

大阪産業大学 学会報

56

テーマ 新しい生活様式と大学での学び



2020

令和2年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)優秀賞作品
『晴天の水』
京家 孝明(経済学部 経済学科)



学会報の 発刊にあたって

吉川 耕司

大阪産業大学学会 会長(本学学長)

ACADEMIC
SOCIETY
OF
OSAKA
SANGYO
UNIVERSITY
2020

大阪産業大学学会は、論集や学会報の発行、そして講演会の開催や研究助成だけでなく、コンテストや見学会等のイベントを通して学生会員の皆さんへの積極的な還元を目指しています。

ところが本年度は残念ながら、新型コロナウイルス感染症の拡大により、多くの企画が中止を余儀なくされました。学会報においても例年、活動報告を行っていた見学会や講演会は全て中止となり、主に学生の皆さんによる楽しい体験談を掲載できなかったことも、あわせて残念な限りです。

そうした中、学会コンテストは、募集時期を変更しWeb応募とすることで実施に至り、また出版助成や、可能な限りの海外留学費補助を行うことができました。これらは常任委員の先生方と事務局の皆さんの創意工夫とご努力の賜物だと感じています。

さて、今回の学会報の特集テーマは「新しい生活様式と大学での学び」です。本学でも前期についてはオンライン授業を原則とし入構を制限するなどの措置をとり、後期についてはハイブリッド授業方式を採用し、状況を見ながらの柔軟な対応を可能としましたが、こうした学びの様式にとどまらず、生活様式全般にわたって変化に対応せざるを得ない状況が続いています。

その中で、どのように主体的に学び、大学生活を含めた新しい生活様式をつくりあげ実行していくかを考えるための寄稿を、教員と学生の皆さんにお願いしたところ、9名の方々にご執筆頂きました。先生方には、授業を実践された際の試みや工夫とともに、オンライン授業の得失、さらには大学教育における課題や取り組むべき事項の提案にまで踏み込んで頂きました。また、学部学科あるいは研究室やイベント関連において、学生フォローアップのための独自の取り組みをされていることを知り、そのご努力と熱意に感謝する次第です。学生の皆さんからも、貴重な経験談を教えてもらえましたし、学びに対する新たな視野を得ることができたとのポジティブな捉え方をされていることを大変心強く感じました。

ウィズコロナ時代の大学像をこれから探っていかなばなりません。その際には、まさにポジティブ思考にて「ピンチをチャンスに変える」気概を持ち、大阪産業大学がさらに「いい大学」だと内外に認められるよう歩を進めたいと思っています。これには学生の皆さんと教職員の皆さんのタッグが不可欠です。大阪産業大学学会が、多様な活動を通じてこのための架け橋になることを期待しています。



CONTENTS [目次]

巻頭言

学会報の発刊にあたって

大阪産業大学学会 会長(本学学長) 吉川 耕司

令和3年度学会行事予定一覧

4

06

特集 新しい生活様式と大学での学び

オンライン授業と新入生支援の取り組み 新型コロナウイルスにより顕在化した 現代社会の課題とどう向き合うか?	(国際学部 国際学科)	今中舞衣子	6
新しい生活様式と大学での学び オンライン・オープンキャンパスでの 新たな試み	(スポーツ健康学部 スポーツ健康学科)	谷本 英彰	8
大学での学びに対する新たな視野 with コロナ考	(経営学部 経営学科)	堀古 秀徳	9
新しい生活様式と大学での学び: オンライン学習ツールの活用	(経済学部 国際経済学科)	野上 勇人	11
新しい生活様式と大学での学び 授業づくりのコーディネート… 『新しい生活様式と大学での学び』	(デザイン工学部 環境理工学科)	尼崎 達也	12
	(工学部 都市創造工学科)	佐野 郁雄	13
	(工学部 電子情報通信工学科)	大野 麻子	15
	(全学教育機構 高等教育センター)	川嶋 克利	18
	(全学教育機構 教職教育センター)	西口 利文	19

22

キャンパスリノベーション

22

26

コンテスト報告

令和2年度 企画委員長

大橋美奈子 26

コンテスト優秀作品

第21回「ぶんかくコンテスト」(長編部門):
鳴らないピアノ

山中 郁弥 29

42

留学記

アメリカ留学	山崎 高弘	42
フランスで行われる主なイベント	田中 早弥	45
私を感じた韓国	松田ひなた	48
フランス留學生生活を振り返って	金 侑蘭	50
日本で味わえない非日常生活	脇本 優輝	52
留学記 STUDY ABROAD IN VANCOUVER	上杉 渉馬	54
大阪産業大学の学生としてのヴェルツブルク交換留学	安田 彦太	56
Student exchange in Würzburg as a student at Osaka Sangyo University	Genta Yasuda	59
Studentenaustausch in Würzburg als Student der Osaka Sangyo Universität	Genta Yasuda	61



中国・上海での留学について
 上海で過ごした時間
 私の韓国留学記
 カナダ留学記
 私のアメリカ留学について
 春期留学
 可能性
 春期英語中期留学

前田 崇太 ————— 63
 岡崎 樹生 ————— 65
 内藤 真穂 ————— 67
 片岡 綾星 ————— 69
 小林 莉穂 ————— 71
 乾 斗偉 ————— 73
 三田羽亜人 ————— 75
 下岡 夏子 ————— 77

80 学術研究書出版助成本の概要

『米中経済戦争と東アジア経済
 —中国の「一帯一路」と米国の対応、そのアジア各国・日本への影響は—』
 の概要
 『森を変えるカワウー森林をめぐる鳥と人の環境史』の概要
 その問いは誰のものか—先住民の科学・西洋科学・科学教育—

福井 清一 ————— 80
 前迫 ゆり ————— 83
 山田 嘉徳 ————— 85

88 学会報告

令和2年度 年次報告 ————— 令和2年度 常任委員長 米田 昇平 ————— 88
 令和2年度 学会活動報告 ————— 89
 令和元年度 学会会計報告 ————— 令和元年度 財務委員長 仲田 秀臣 ————— 91

編集後記

令和2年度 編集委員長

藤岡 芳郎

令和3年度学会行事予定一覧

EVENT INFORMATION

4月	学会報配付 見学会実施予定ポスター掲示	新入生・在学生に配付 (学内各所にも置いています)
7月	前期見学会参加受付 学会コンテスト募集(～9月末まで)	各学部掲示板、学内各所、学会webサイト、 Portal-OSUで案内
夏期休業期間中	鈴鹿安全運転研修(1泊2日) 羽田機体工場見学会(1泊2日) 東京証券取引所と各種メディア見学会(1泊2日) 日帰り見学会	
9月	後期見学会参加受付	各学部掲示板、学内各所、学会webサイト、 Portal-OSUで案内
10月	学会コンテスト書類審査・最終審査 ※優秀な作品は学会報に掲載されますことがあります	
11月	芸術鑑賞巡り見学会(1泊2日) 日帰り見学会 学術講演会	
※適時	学会主催・共催講演会	

※見学会、講演会等の学会企画事業については、適時、学会webサイトでもご案内します。

※コンテストの応募内容や詳しい情報は、学会webサイトや学内掲示のポスター等でご確認ください。

※各見学会は、募集人数に制限があります。詳しい内容につきましては学会webサイトやポスター等でご確認ください。

※新型コロナウイルスの感染状況により、変更・中止になる場合があります。

学会公式webサイト <https://as-osu.jp/>



大阪産業大学学会とは

「大阪産業大学学会」は、昭和39年(1964年)に設立された学術研究団体です。

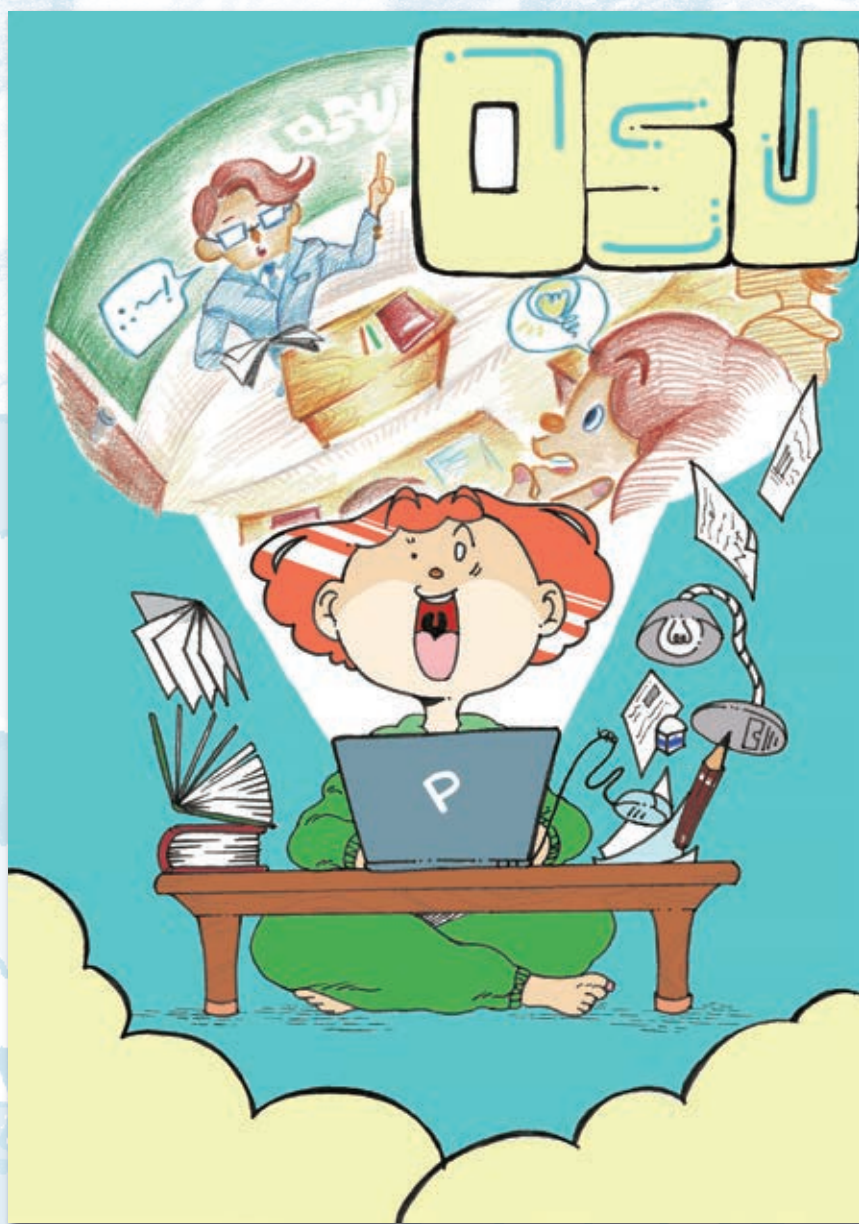
本会は本学における学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて学会会員の研究助成等を図ることを目的としています。これらの目的を遂行するため、「大阪産業大学論集」「大阪産業大学学会報」の発行、「学術講演会」等の講演会・研究会・シンポジウム・学外研修会の開催、教員会員だけでなく学生会員の研究教育活動の助成、海外留学の助成等の事業、さらには、主に学生会員を対象とする各種コンテストや様々の学外見学会を行っています。

〈学会に関する問合せ先〉

大阪産業大学学会事務局(本館8階 産業研究所事務室内) 072-875-3001(内線:2815) お気軽にご連絡ください

特集

新しい生活様式と大学での学び



特集

Special Topics

令和2年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)優秀賞作品
『新しい生活様式と大学での学び』
竹重 風美(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

オンライン授業と新入生支援の取り組み

国際学部 国際学科 准教授 今中 舞衣子

1. オンライン授業の取り組み

未曾有の事態により、本学でも授業の様子は様変わりしました。前期は完全オンライン授業、後期はこの原稿を執筆している段階ではオンラインと対面を組み合わせたハイブリッド形式の授業が始まったばかりです。

私はフランス語教育を専門としている関係で欧州のニュースに触れる機会が多いこともあり、かなり早い段階から完全オンライン授業を想定した準備を始めていました。所属する国際学部でも、学部長の提案による情報共有のためのSlackの導入、教員有志によるWebClassの練習会の実施、各教員作成のマニュアルや解説動画の共有などが急速な勢いで進みました。非常勤講師の先生方への連絡を担当している教員が多く、他の先生方に説明するために喫緊で学ばなければならないという状況もあったと思います。

こうして怒涛のような準備とさまざまな混乱の中で前期の授業が始まりましたが、結果として、オンライン授業の多くの利点を見出すことになりました。

講義型の授業では、短い動画をYouTubeにアップロードし、各動画について設問を設定してGoogleフォームで提出してもらいました。学生の提出率は非常に高く、記述内容も教室で書いてもらっていた前年度に比べて格段に質の高いものでした。コメントや質問に翌週の授業の動画でフィードバックすると、とりあげられることがモチベーションにつながったためか、良い質問を書いてくれる学生が回を追うことに増えていきました。オンデマンド形式の授業は理解できなかった部分を繰り返し見られるということで学生の評判も高く、教員にとってもGoogleフォームでの課題提出は紙媒体での提出に比べて集計や保存が非常に楽でした。

語学の授業では、オンラインミーティング形式をとることによって教室授業とほぼ同じ形でのコミュニケーションやグループワークが実現できたと思います。試験についても、担当がオーラル重視の授業だったので、ひとりずつミーティング入室してもらい普段どおりの口頭試験を実施しました。筆記の場合は従来と同じ形式の試験は難

しいと思いますが、教員にとっては、そもそもこれまでの試験が今の時代に必要な能力を問うものであったのかを再考する良い機会になったのではないのでしょうか。

もちろんオンライン授業では、友だちと会って話すことの楽しさや、同じ空間で過ごす「余白」の時間は失われてしまいます。ただ、今回の経験が今後コロナ禍が収束した後の大学教育にもたらすものは、非常に大きいのではないかと考えています。

2. 国際学部トークルームの取り組み

国際学部では、他の学生と交流する機会がなく大学生活に不安を持つ新入生を支援する目的で、「新入生×先輩トークルーム」というオンラインのイベントを継続的に開催しました。4回生のスタッフ2名に主体的に企画・運営を行ってもらい、毎週月曜の夜に希望する新入生が自由にオンラインミーティングの形で参加するという形のイベントです。毎回違う先輩や教員をゲストに招いてプレゼンテーションをしてもらい、新入生には自己紹介や質問の形で参加してもらいました。4回生スタッフが企画した前期全9回のテーマは下記の通りです。

第1回	フリートーク
第2回	海外体験談(フランス・ドイツ)
第3回	中国語コース・中国留学体験談
第4回	日本語教員養成資格プログラム・特修プログラム
第5回	在学中の活動(国内研修・学会主催見学会)
第6回	英語コース・英語圏留学体験談・教職課程
第7回	国際コース・心理学
第8回	大学施設・大学生生活紹介
第9回	なんでもトーク

参加した新入生からは、「おすすめの授業はありますか?」「留学中困ったことは?」「アルバイトと勉強の両立はどうしましたか?」「どうやったら友達を作れますか?」「就職活動についてアドバイスはありますか?」など様々な質問が寄せられ、今後の大学生活への期待感が感じられました。

第2回 国際学部 新入生×先輩トークルーム
~6月8日(月)20時スタート~

海外体験談!

第2回はドイツとフランスの現地での体験も4回生からお話します。
興味のある方、時間のある方はぜひ参加してください！

スペシャルゲストも登場するかも！

第8回 国際学部
新入生×先輩 トークルーム
7月20日(月)20時~21時

大学施設・大学生活紹介

キャンパスや学生会、大学生活の中で利用できる施設について説明します。
想像していた大学生活がまだ立っていないと思いますが、
大阪産業大学での大学生活をより具体的にイメージできる良い機会です！
大学にどんな施設があるのか・どんな風に大学生活を過ごしていくのか
少しでも気になった方、質問してみたい方
小さなことでもお答えします！気軽に参加ください😊

また、企画・運営に携わったスタッフからは、「自分の経験を直接伝えられ縦の繋がりが出来た」「1回生がアドバイスしたことを実行してくれた」「事前準備(企画・作成物)から実施まで運営を経験しながら交流もでき、やりがいを感じられた」といった報告が寄せられ、新入生だけでなく先輩スタッフにとっても貴重な経験となったことが分かりました。

いっぽう、こうした自由参加の取り組みにおいては自主的に参加する新入生は毎回数名程度で、残念ながら多くの新入生が参加する取り組みにはなりません。こうした支援を多くの学生に届けるためには、授業との連携、動画配信、文字によるやりとりなど、より参加のハードルの低い形態を模索する必要があると考えています。

新型コロナウイルスにより顕在化した 現代社会の課題とどう向き合うか？

スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 講師 谷本 英彰

新型コロナウイルスによって大学での学びの様式だけでなく、生活の様式、ビジネス戦略など、たくさんの方が大きく変容しました。そして、各人が自身や自身の大切な人の生活を守るために、試行錯誤してきたと思います。多くの人が初めてかつ大きな変化に戸惑いを感じたと思います。私もその一人です。昨年度まで、学生とともにテーブルを囲んで語り合いながら進めてきた授業やプロジェクトは、これまで通り進めるわけにはいかず、どうしたものかと頭を抱えながら、打開策を導き出すために勉強をし、様々なことを試してきました。その中で、新たな価値を認識することができました。この経験は何物にも代えがたいものだと実感しています。

世間では、大学におけるオンライン授業について、対面式の授業と比較して質が落ちたと批判的な意見が散見されました。この指摘は、ある部分においては正しいと感じました。多くの授業者がこれまでとは違う環境、使ったことのないツールを使って試行錯誤を重ね、授業づくりに悪戦苦闘していました。使ったことのないツールを使うことで精いっぱいだったと感じています。そのため、そのツールの価値を十分に引き出せないまま、これまで通りの授業をこれまでとは違う環境下で実施していたのだと思います。ただ、これらのツールはコロナ禍以前から存在していました。それに気づいていなかった、もしくは気づいていながらも今の授業スタイルで申し分ないため必要ない関心を持たなかったことが大きな落とし穴となったように感じています。

ここ数年でものごとの電子化は加速的に進んでいき、あらゆる情報を簡単に入手できるようになりました。その結果、情報そのものの価値は低下し、サービスや商品はコモディティ化し、もはやそれら自体で差別化を図ることは難しくなりました。技術を磨いて商品のクオリティを高めても、アイデアを絞り出して新しいサービス内容を考案しても、それらは簡単にコピーされます。もうすでに多くの人は昔ながらの手法で生き抜くことができない時代に突入していました。また、生活様式についても同じことがいえます。あらゆる情報が簡単に入手できるようになったことにより、人の生き方は多様になりました。かつてのように、結

婚して子どもを授かり、マイホームを購入し、退職後は退職金を使って余生を楽しむといったストーリーは、人の生き方のごく一部となりました。しかし、それらの変化に気づかないもしくは、気づいていても変化することを拒み、「これまで通り」が幸せであると考えてきた我々にメスを入れたのが新型コロナウイルスだったのではないのでしょうか。つまり、新型コロナウイルスが時代が大きく変わったことを顕在化し、警鐘を鳴らしたと考えることができます。

今回、新型コロナウイルスによって顕在化した現代社会の問題とどう向き合うか？これからも変化していく時代をどう捉えるか？時代の変化をどのように読み取るか？どのように察知するか？が教育の要となるといえます。これまでの経験から時代の変化と向き合うために必要なのは、多くの知識と多くの経験だと感じています。それらが積み重なって、初めてその場で必要な最適解を生み出すことができます。何のために学ぶか？学んだことがどう活かされるのか？に対する解を明確にしたうえで学ぶのではなく、目の前のことを解決する、あるいは結果を出すために、ただひたすら、ひたむきに思考し、努力し続けた者こそが辿りつく境地があると思います。また、そのような者には、必ずファンがつかます。応援してくれる人が現れます。思考と努力に加え、支援者とともに歩んでいける者こそが、この時代を生きるために必要な力を得られると思います。

今後、大学教育は、単に専門性を身につけたり、その専門性を活かすための実践力を身につけたりする場であるべきではなく、ものごとの価値を最大限に引き出そうと努力すること、その努力の過程を共有しながらストーリーをつくること、その努力を誰かとともに共有すること、こういったことも学修する場であるべきだと考えます。今はオンラインの時代だから…と安易に考えるのではなく、なぜオンラインで実施する必要があるのか？オンラインで実施する価値は何なのか？を思考することを忘れてほしいと思います。そして、そのようなことを思考し、努力し続けること、失敗を恐れずひたむきに努力することの大切さを我々大学教員ももう一度胸に刻みなおし、新たな一歩を踏み出さなければならないと実感しています。

新しい生活様式と大学での学び

経営学部 経営学科 講師 堀古 秀徳

今回の新型コロナウイルス感染爆発により、大学での学びは突如として大きな変革を求められた。従来型の対面授業が実施できなくなり、ほとんどの教員はオンライン授業の準備を突貫工事で、学生諸君は通信環境の整わない中での学習を強いられた。とりわけ、2020年度の新入生諸君は、大学合格時に思い描いていたキャンパスライフを体感することなく、大学生活最初の夏休みを終えることとなった。

大学は、高校までの教育現場とビジネス現場の間にあって、原状復旧が最も遅れた現場として物議を醸した。このような状況にあって、大学側は、従来の教育水準を維持するために、「主体的な学び」というスローガンを掲げて学生諸君に自発的な学習を促した。これに困惑した学生もいただろうが、大学側の言い分の1つは、おそらくこうである。「高等教育機関である大学には、義務教育を終えてなお学びを求める者が在籍しているわけであるから、彼ら・彼女らが主体性を発揮して自ら進んで学習に取り組むのは当然である」と。

確かに、この言い分は全くの見当違いとは言えない。学生諸君にあっては、高校卒業後に就職その他の進路もあった中で、高い学費を支払い(あるいは保護者に支払ってもらい)、専門的知識を修得する道を選んだわけである。勉学に対するそれなりの覚悟を持って大学に入学したはずであり、大学全入時代だからと周囲に流されて、特に興味も関心もない学部学科に進学したわけではないはずである。なお、万が一そのような意識で大学に入学した者がいれば、これを機に自身の将来についてよく考えてほしい。今ならまだ軌道修正は可能である。

話を戻すと、先の大学側の言い分は的外れではないにせよ、そこには「学生は一人でも能動的に勉学に励むことができる」という前提が置かれているように思われる。もちろん、中にはこの前提どおりに学業に勤しむ学生もいるであろう(そういった学習意欲に満ちた学生が増えることを願ってやまない)が、実際のところ、そのような学生はごく少数ではないだろうか。例えば、勉強の取り組み方に関して、人によっては、勉強は一人で黙々と取り組みたいと

いう者もいれば、友人たちと一緒に協力しながら勉強したいという者もいるだろう。これは良し悪しではなく、単に向き不向きの問題である。友人たちと一緒に学ぶこと自体もキャンパスライフの醍醐味の一つでもあり、その機会さえ奪われてしまった学生(特に新入生)諸君の落胆具合を推し量ると胸が痛む。

また、学習意欲の高い学生は少なくないだろうが、先に述べたように、大学は高等教育機関であり、そこで学ぶ内容は高校までと大きく異なる。特に、専門科目に関してはほとんどの学生が大学で初めて学ぶはずであり、そのような高度な知識を能動的に、すなわち何の手がかりも無く自力で学ぶのは、大学生でなくとも容易ではない。そんな彼ら・彼女らの学びを支えるのが、大学教員による講義であり、講義資料であり、テキスト・参考書である。これらを当てにする必要があるという点で、大学での学びは受動的にならざるを得ないわけである。その意味では、教える側の我々教員はこれまで以上に重要な役割を果たすことになるだろう。

以上を踏まえて、アフターコロナにおける大学教育の課題は、次の2つであると考えられる。1つは、学生同士、あるいは学生—教員間の人間関係をいかにして構築するかという課題である。今回の騒動を受けて、実験・実習・実技等の演習科目を除く、いわゆる座学中心の授業については、必ずしも対面形式で実施する必要はないことに、多くの学生、そして教員が気づいたのではないだろうか。そして同時に、大学での学びにおいて、友人や先生との関係構築が重要であることにも気がついたのではないだろうか。従来のように、授業を通じた人間関係の構築が期待できなくなった今、大学側は、オンライン・対面を問わず、授業外で学生同士が交流できる機会を提供していく必要があるだろう。もちろん、その主役である学生諸君には、そのような企画に積極的に参加してほしい。

2つ目の課題は、教員が主体的・能動的・積極的にコロナ禍の教育環境に適応していくことである。教育者としての教員の任務の1つは、高度な専門知識を初学者である学生諸君でも理解できるように教え伝えることである。

この任務を全うするため、教員はさまざまな工夫を凝らして授業準備を行ってきた。授業形式が対面からオンラインに変わってもそこは変わらないが、その一方で、コロナ以降は学生諸君が授業の内容や方法に対してより一層意識を向けるようになったと感じている。教育者としての教員の力量が、これまで以上に試されるようになったのではないだろうか。私自身もその一員として、気持ちを引き締めて教鞭を執る所存である。

オンライン・オープンキャンパスでの 新たな試み

経済学部 国際経済学科 野上 勇人

「今年もオープンキャンパスやるのかな…」手に持ったスマホを光らせ、そう呟かせたのは、大学のホームページのお知らせだった。

冷たい風と暖かい風が入り混じる4月上旬、この時の私は、新型コロナウイルスなんてあまり脅威がないものだと思っていた。しかし大学が取った方針は、前期全面オンラインでの非対面式授業という対応であった。私は必修のゼミ(演習4)しか授業は無かったので、授業を受けるうえではそれほど問題はなかった。けれども、大学の入構制限があったため学校に行けず、オープンキャンパス活動が出来るか不安だった。

私は経済学部オープンキャンパスリーダー(通称:OCL)という学生団体に所属している。名前を見たらわかるように、主な活動内容は、経済学部のオープンキャンパスで学部の魅力を学生目線で高校生に伝えるためのイベント企画・運営である。私がこの学生団体に入ったきっかけは、入学したばかりのときに、授業終わりで先輩方からもらったチラシである。大学で打ち込むことがなかったことと、先輩との関係が欲しかった私は、参加することにした。

1年生から3年生の頃は、オープンキャンパスの1か月ほど前から定期的集まり、どのように進めていくのか、必要なものは何かなどを話し合っ決めて。オープンキャンパス当日は機材や備品の確認など行い、模擬講義の準備やブースのチラシ配布など担当に分かれて行動していた。

そして今年、コロナウイルスの影響で授業が全面オンラインとなり、大学に行くことが出来なくなってしまったから、まず私が取った行動は情報の共有だった。担当の先生を含めたオープンキャンパスリーダーのLINEグループがあったので、今年のオープンキャンパスはどうなるのか、開催の有無やその方法について話し合うことにした。オンラインでの開催が決定し、制約があるなかでOCLの役割を果たすにはどうすれば良いか話し合った結果、ZOOMというアプリを使って高校生と交流する「OCLオンラインカフェ」というアイデアが採用された。

活動内容が決まり準備に取り掛かるわけだが、まずは

近況報告と今後の予定を決めるためZOOMを使って会議をすることにした。4年生は履修している授業はほぼなかったため日程さえあらかじめ決まっていれば予定は確保できるが、3年生はインターンシップがあるため予定はまだ分からないとのことだった。前期の後半から夏休み中も、ZOOMを使った会議を定期的に行き、高校生役と相談役に分かれてオンラインカフェの予行練習を行うことにした。インターンシップや授業、就職活動の関係で継続した参加が難しいなか、オンラインの利便性を駆使して、話し合いを重ねていった。

そしてオンライン・オープンキャンパス当日(7/26日曜、8/30日曜)の経済学部への参加希望者は、大学のホームページで事前予約しているため人数は把握していた。私たち「OCLオンラインカフェ」へ何人か来ると予想していた。しかし結果は0人だった。オンライン・オープンキャンパスの参加者はあらかじめ参加する項目(個別説明会、学科相談、模擬講義)を選べる。我々のオンラインカフェは、予約は不要だが、逆に言えば予約した項目に満足すれば来なくてもいいのだ。オープンキャンパスは基本的に教員が運営するので、我々が行なうブースの宣伝が出来ず結果として0人になってしまった。

結果だけ見れば残念だったが、事前準備にかけた時間や当日の何気ない時間は私にとって大切な思い出となった。写真はZoomで行った「OCLオンラインカフェ」の実際の様子である。



▲写真1 8月30日のOCLオンラインカフェの様子

大学での学びに対する新たな視野

デザイン工学部 環境理工学科 尼崎 達也

新しい生活様式と大学での学びについて、私は学生の立場から、現在の大阪産業大学における学びの中で感じたことや気づいたことをもとに述べていきたいと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、大阪産業大学においては2020年の前期からWebclassやGoogle Meetなどを利用した非対面形式のオンライン授業が主要な授業形態となりました。コロナ禍以前においては、大学の授業は対面形式で実施されることがほとんどであったため、オンライン形式の授業への一斉変更には戸惑うところが多く、情報機器や通信環境の整備、様々な授業形式や課題提出方法への対応など、新しく取り組むことが非常に多くなり、普段のように思うように学ぶことができない状況が続きました。しかしながら、コロナ禍における新たな授業形態や生活様式の変化によって、学びに対する新たな視野を得ることもできました。

以前のような対面形式の授業では、先生と学生との対話や授業内容から派生した余談の中から多くの学びや気づきがありましたが、オンライン形式の授業では、以前のような双方向的な対話は難しく、授業内容に沿った余談も割愛される場面が多いため、以前と比べてより学びへの積極性の重要度が増していると感じています。それでは、この学びへの積極性を高めるにはどのようにすればよいのでしょうか。

これには様々な手段があるだろうと考えられますが、私は身の回りのものや自然現象などに“なぜ?”、“どうして?”といった、疑問や興味を持つことであると考えています。私の場合は、植物を育てることが好きなのですが、なぜ好きなのかと聞かれると、植物の成長や花が咲く様子を見ることが楽しみであり、植物が身近にあるとなんとなく気持ちが落ち着くからという理由からです。しかし、花が咲くと言っても、太陽の方向に咲く花もあれば地面の方向に咲く花もあり、また、日が昇った時だけ花を開くものあれば日が沈んだ時だけ花を開くものがあります。「このような現象には何か理由があるのだろうか。理由があるとすれば、どのような理由があるのだろうか。」というように、視

野を広げて物事を見つめ直してみると、意外に知らないことが沢山あつたりします。このような些細な疑問や興味こそが、知りたいという学びの源泉になるのであらうと考えます。この学会報を読んでいる読者の皆様も、「そう言えばなんでなんだらう。と思うことはないだらうか」と、今一度考えてみてはいかがでしょうか。疑問や興味というのは、私たちが見ようとしていないだけで、実は身の回りにたくさん存在しているのかもしれない。

一見、これらのことは単純で当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、幼稚園や小学校の頃のような見るもの全てに目を輝かせていた夢見る子どもの純朴な心をどこかに忘れてきてしまった人も意外と多いのではないのでしょうか。少なくとも私は、その一人だと思えます。それに気づけたのは、皮肉なことに、新型コロナウイルス感染拡大を受けてのオンライン形式の授業をはじめ、会議や仕事といったあらゆるものがオンライン化になり、不要不急の外出を控える自粛生活によって、自分を見つめ直すきっかけや時間ができたからなのです。

もうしばらくは、新型コロナウイルスに関連する様々なことと向き合わなければならない情勢で、日常生活や大学での学びにおいて苦しい期間が長引きそうです。そんな時期だからこそ、「艱難 汝を玉にす」ということわざを胸に秘めて、様々なことに意欲的に挑戦することが大切であり、新しい生活様式と大学での学びを大きな糧にできるかといった人間力が試されているのだと感じます。

with コロナ考

工学部 都市創造工学科 准教授 佐野 郁雄

10年ほど前「感染列島」という映画を見に行った。それとなく、主演女優に興味があったのが理由であったが、当時は、架空の出来事としてヒューマンドラマを含む感染というパニックに立ち向かう映画という印象であった。最近、改めて鑑賞すると、重症化する新型コロナウイルスによる風邪をテーマにしている点も含め、感染症の原発特定、風邪感染の症状、感染症対策、病院での救命活動、感染症の広がりなど、ほとんどが今回のコロナ(COVID-19)の感染にあてはまる。映画レベルでも、感染症についての正確な知見がすでに定着していた点で、驚いている。

映画の中で印象的な言葉が2つあった。一つは、「明日地球が滅亡しても、今日、リンゴの木を植える」という、感染症封じ込めに奔走する女医が病気に冒されて、病床上で発した言葉である。小さな声ではあるが、毅然とした態度で言った言葉である。

もう一つは、すでに体を癌にむしばまれ、余命幾ばくもない動物学者が、感染の原発となるマングローブ林を開いて作ったエビの養殖場を特定し、その池の前で、「ウイルスという敵と戦うのではなく、癌と共生して生きていく道を選んだ自分のように、ウイルスとともに生きる道はないか探していこう」withコロナという考えをさりげなく発していた。

2020年3月11日WHOが新型コロナウイルスの世界的な拡大についてパンデミックを宣言して以来、広く新型コロナウイルスについて世界的に知られ、感染者のみならず、感染予防・拡散防止対策が取られた。当時は症例が11万8000例に達し、4000人以上が死亡し、ウイルス感染を南極を除く全大陸で確認されている状況であった。9月28日現在、3336万人の感染者数、2315万人の回復者数、100万人の死亡者数が発表されており、現在も約30万人/日で感染者が増え続けて、勢いは衰えを見せていない。

今回、正しい感染症対策として定着しているものは、手

洗い・うがい、マスク、3密回避である。感染予防の拡大を阻止するには、個人が感染予防対策をどれだけ取れるかが重要である。Go toトラベルの旅行先であっても、Go to Eatの食堂であっても、これらの対策を意識して行動すれば、感染症リスクは下げられると言われている。

人はよくわからない物に対する恐怖心がある。このため今は、自らの生活にさまざまな制約が生じたままになっている。おそらく、特効薬の開発や予防ワクチンによって普段の生活に急激に戻っていくであろう。しかし、その時点では、新しい生活様式が根付いており、ニューノーマルの中での「普段の生活」をしていることであろう。

昔と全く同じ生活ではなく、感染予防を生活の中に根付かせる新たな生活様式を作っていきたい。この感染症対策を行っていくことがwithコロナを実践していくことにつながる。新型コロナウイルスの感染者がゼロになることは直近ではないであろう。そうならば、ある程度のリスク軽減をしながら、感染リスクを受け入れて、大学生活を続けていく。予防対策について、普段から少し気にとめ、丁寧な対策をしながら普段の生活をする。普段のいくつかの生活姿勢を皆が共有していく。これにより、今年のインフルエンザの発生もある程度抑えられるかもしれない。この簡単な感染症対策について、粘り強い、丁寧な、継続した取り組みが、おそらく何より新しい生活様式では求められるのではないだろうか。

学校の授業では、現在、リアルな授業形態とリモートによる授業形態がハイブリッドの形式で取り入れられている。そういった授業の選択肢を持ちながら、なんとか工夫して大学生として活動をしていく。どちらか一つを選択するのではなく、授業として密を避け、手洗い/うがい、マスク着用という継続できる簡単な感染症対策を取りながら普段の大学生活に戻りつつある。

動物の中には土を食べて体調を整える生き物がいる。

さまざまな細菌が動物に良い作用をしている。一方で、土足で家に入る生活様式を取るヨーロッパやアメリカでは、土をよく拭き取ることで細菌を部屋に持ち込まないことが感染症を防ぐという考えが定着しつつある。土からすれば、変わらずそこに存在し、人という生き物をこれからも育てていくことに変わりはないのだが。

withコロナの時代に求められる大学生活の中で、皆とたわいもない話をし、スポーツをし、自らの趣味を伸ばす行為の中で、専門の勉強をし、さまざまな経験をしていく。普通の豊かな毎日を過ごしていく。特に私は、普段のこういったさまざまなシーンにおいて、ゆったりとした気持ちで、お互いのコミュニケーションを取る機会が貴重であり、今後はより一層大切な機会となるのではないかと考えている。少しの継続した簡単な感染対応を取りながらも、大学生活の中で人と触れ合う機会、さまざまな人と出会う機会を大切にしてほしい。大学でのさまざまな交流を普通に丁寧にゆっくと楽しんでほしい。今できることをなるべく今していこう。映画の2つの言葉がよみがえる。

新しい生活様式と大学での学び： オンライン学習ツールの活用

工学部 電子情報通信工学科 准教授 大野 麻子

コロナ禍における教育

2020年度、新型コロナウイルス感染症の流行により私たちの生活様式は一変しました。本稿執筆時の2020年9月現在、依然として世界的な感染拡大が続いており、連日各種メディアで報じられています。

コロナ禍を契機に、各教育機関では学びのスタイルの大転換が求められました。特に大学では、小中高に比べ授業全体におけるオンライン授業の割合が高く、現時点でも多くの大学が一部あるいは全面的にオンライン授業を実施しています。

筆者を含め大多数の教員にとって全授業のオンラインで実施は初めての試みです。演習や実験・実技を含め、これまでに行ってきた授業の質を落とさずにオンライン上で実施するにはどのようにすればよいか、大学の示す枠組みの中で日々試行錯誤が続いています。

本学における授業実施方法

本学では前期にはWebClassというLMS(Learning Management System)上に授業資料や課題を掲示する形で行うオンライン授業が行われました。後期にはオンライン授業と録画配信、対面授業の併用であるハイブリッド方式の授業が実施されています。

本学では教職員や学生全員に大学公式のGmailアカウントが発行されていることから、ハイブリッド方式の授業実施にあたりGoogleのサービスが積極的に活用されています。例えば、教員がビデオ会議サービスGoogle Meetを介してリアルタイムにオンライン授業を実施し、学生は大学または自宅から授業に参加します。また、教員が授業内容を録画した動画ファイルをオンラインストレージGoogle Drive上に保存してそのURLを学生に知らせることで、授業終了後も学生がオンデマンドで視聴することができます。

インターネット上で提供されるこれらのサービスやICT機器の扱いに不慣れな教員・学生にとってオンライン授業やハイブリッド方式の授業は負担が大きいようです。「マイクが正常に動作せずチャットで乗り切った」「質問

方法が分からずLMS上をさまよった」など、苦労話が絶えません。それでも、大学側のサポートや教員間の情報共有、学生の協力もあり、「(やってみると意外と)できないことはない」と感じている方も多いのではないのでしょうか。

新しい学びのカタチ(オンライン学習ツールの紹介と活用事例)

G Suite for Education

本学で使用可能なGmailやカレンダー、Drive、Meetや各種Officeソフトに相当するドキュメント、スライド、スプレッドシートなど、Google社の提供する無料のオンライン・ツール群のことをG Suite for Education[1]と(以下「G Suite」と表記)いいます¹。G Suiteはその有用性から近年国内外において注目が集まっており、毎年スペインで開催される世界最大規模の教育工学の国際会議INTED[2]においても、例年G Suiteのワークショップが催されています。2020年度より必修化した小学校プログラミング教育の影響もあり、国内で開催される情報系の学会や情報教育関連の展示会においてもG Suiteのデモを見かける機会が年々増加しています。

卒業研究での利用事例

筆者は2017年頃から積極的にG Suiteのツールを卒業研究指導に活用してきました。具体的には、以下のような内容を行ってきました。

- ・ カレンダー上でミーティングの予定や論文の添削状況、教員の空き状況を共有する
- ・ Drive上に参考資料やメモ書きを保存し教員・学生間で共有する
- ・ 図形の描画やプログラミング、スライドの編集をオンライン上で学生が共同で行い、教員がコメントや添削を入れる
- ・ 打ち合わせ時に参加者全員がドキュメントにアクセスし共同で記録する
- ・ 卒業論文の添削や議論をドキュメント上で行い、他の

1 正確には本学は有償版のG Suite Enterprise for Educationの契約を締結しています[3]。

学生にも共有する

2019年度までは対面が基本でしたので、あくまで対面指導を補完する位置づけでした。また、卒業研究は一人で行うものですが、他者との議論や進捗の見える化により客観的な視点で研究に取り組んで欲しいとの思いがありました。2020年度のコロナ禍ではこれまでのように学生が毎日研究室で過ごすというスタイルの維持が難しく、上記をもとに試行錯誤を続けています。

実験での利用事例

2020年度前期にスタートした情報系の実験では、コロナ禍による授業のオンライン化に合わせ急ぎよ Google のアプリケーションである Colaboratory[4] を用いて Python による Web スクレイピングとデータベースの実習を行いました(本稿執筆時点で大学の公式 Gmail アカウントには対応していませんので、利用の際には学生に新たに Gmail アカウントを取得してもらう必要があります)。

事前準備資料の配信や質問フォームと担当スタッフによるサポートのおかげもあり、無事予定通りの内容を全てオンラインで実施することができました。学生から寄せられた質問と回答をフィードバック資料として WebClass に掲載し、自己解決を促しました。何度も質問応答を繰り返してもどうしてもエラーが解決できない学生に対してはドライブ上のファイルを共有してもらい教員がアクセスしてプログラムを修正しました。このような最終手段がとれることもオンライン・ツールのメリットの一つです。各学生の所持するパソコンに開発環境をインストールさせる方法では、エラーを特定するために学生のパソコン環境を把握する必要があるケースもあり、場合によっては多大な労力と時間がかかります。

その他のツール

G Suite 以外にも無料で使用できる優れたオンライン・ツールは数多く存在します。

2020年度のC言語によるプログラミングの授業ではオンライン開発環境 paiza.IO[5] を利用しています。Paiza.

IOではJavaやPHP、JavaScriptなど多様な言語をサポートしています。また、Googleアカウントとの連携機能もありオンライン上で複数のプログラムを管理することが可能です。

オンライン学習ツールには2019年にサービスが終了したJavaScript環境jsdo.it[6]や無料で利用が期間限定に移行したオンライン共同描画環境cacao[7]のように、いつまでも同じ条件で使用できる保証がないというリスクがあります。しかしその一方で次々と素晴らしい新サービスが生まれ出されて、上手く利用すれば長年の悩みや不便さが一気に解決できるという期待もあります。手持ちのパソコン環境にごとに異なるインストール方法や設定への対応に悩まされることもありません。計算機能や記憶機能といったパソコンの機能そのもののオンライン化が進む昨今、これからはまず「これオンラインでできないか」と考えることも必要かもしれません。

「特別なツール」は必要か？

これまで紹介してきたG Suiteのようなオンライン学習ツールを用いなければ効果的なオンライン授業を行うことはできないのでしょうか。「効果的」の定義が行われていませんが、オンライン授業にありがちな「一方通行」「やる気が出ない」といった問題を少しでも解決可能という意味であれば(少なくともその工夫がなされていれば)、必ずしも特別なツールは必要ではないと筆者は考えます。

例えば、前期期間中に行ったコンピュータ・リテラシーの授業では課題の提出と共に感想を書いてもらい、課題の採点時に入力する教員からのコメントでは、学生の書いた感想やそれを踏まえた課題の出来に対して何かしと言及するようにしました。この方法の効果を示すエビデンスはありませんが、後日個別のオンライン面談にて学生から話を聞いた限りでは少なからずモチベーションの維持に貢献できたようです。但し、このような赤ペン先生型の授業の労力は受講者数に比例します。また、積極的な双方向性を求める学生にとっては物足りないことでしょう。

新しい生活様式、新しい教育様式

コロナ禍の中、人々が時には互いに影響し合い、時には個人の価値観を信じて試行錯誤を続けていくうちに、次第に社会全体に新しい生活様式が形成され、浸透していきました。同様に、個々の教員が大学の提供する枠組みの中で学生の様子を見ながら自分にあった方法を模索し、選び、実践することを続けていくことで、ポストコロナ時代に続く新しい教育様式が形成されていくのだと思います。

参考資料

- [1] G Suite for Education | Google for Education, https://edu.google.com/intl/ja_ALL/products/gsuite-for-education/
- [2] International Technology, Education and Development Conference (INTED), https://library.iated.org/publication_series/INTED
- [3] 大阪産業大学情報科学センター, <https://www.osaka-sandai.ac.jp/cnt/movies>
- [4] Google Colaboratory, <https://colab.research.google.com/notebooks/welcome.ipynb?hl=ja>
- [5] paiza.IO, <https://paiza.io/ja>
- [6] jsdo.it, <https://jsdo.it/>(2019年10月をもってサービス終了)
- [7] cacao, <https://cacao.com/ja/>

新しい生活様式と大学での学び

全学教育機構 高等教育センター 准教授 川嶋 克利

元号が令和になってしばらくすると、新型コロナウイルスが猛威を振るい始めました。外出時はマスクを着用しソーシャルディスタンスを意識するなど、日常生活はコロナ以前から一変しました。この原稿を執筆している令和2年9月現在も状況は変わっていません。そんな中、大阪産業大学でも他の大学と同様にオンライン授業を実施したわけですが、前期が終わった今、これまでのことを振り返りたいと思います。

まず、通常の授業について述べます。当初は、授業で板書する予定だったことを清書した資料を用意して学生に閲覧してもらい、内容を理解したかどうか確認するための問題を課して提出してもらっていました。すると、学生からわかりにくいという声が出始めました。資料を読むだけではなかなか理解しにくいところもあるので、そんな学生の声をもっともです。そこで、閲覧用資料を解説した動画を作成し、ついでに課題の解説動画も作成しました。これが思いのほか好評で、結果的に講義20回分の動画を作成しました。ただ、間違ったことを言っていないか確認しなければならない上、慣れない作業でもあったので、かなり手間がかかりました。学生の反応を見ながら解説することもできず、学生から好評を得ていましたが、通常の対面式の授業よりもうまくできていたかは不明です。ただし、録画した動画ですので、何度も見返すことができるという利点もあったかと思います。

次に、教室で行う授業と異なり、気軽に質問ができません。私が独自に実施したアンケートでも、その声が多かったように思います。また、オンラインで質問の機会を用意したとしても、数式や図などの言葉だけでは質問をしにくいことや、質問をするのに勇気があること、質問と回答に時間がかかることなどで、十分に機能しません。実際、私が担当している科目の一つ「日本語とコミュニケーション」において、チャット形式で質問を受け付ける時間を設けましたが、参加者はいませんでした。

主に教員側からのオンライン授業を振り返りましたが、学生側に立った場合どのような状況であったかを考えてみます。通常時とオンライン授業で決定的に異なるのは、

人との接触が極端に少ないことに尽きます。先ほど、学生の反応を見ながら授業ができないと述べましたが、学生側からも授業をする教員がどこを重要視しているかを判断しづらいでしょう。ほんのちょっとした疑問をぶつけることは、オンラインでは躊躇してしまうと思われます。

授業以外だと対話がありません。新型コロナウイルスに関する真偽のほどがわからない情報が蔓延しています。そんな情報が学生を不安にさせ、学問どころではない状況です。そんな不安を解消してくれるのが学生同士の何気ない会話なのですが、オンライン授業を実施している現在では、それもままなりません。ましてや、学問のあるトピックに関する議論など期待できません。

以上、前期の様子を振り返ってきました。後期はハイブリッド授業が始まる予定となっていますが、後期が始まってしばらくはほとんどの学生がオンライン授業を受けることになるでしょう。すぐに状況が改善するとは考えにくくなっていますが、これを受け入れて学生と教員のそれぞれが努力して、そして学生と教員が協力して学びの質を上げていくしかありません。

先に述べた前期の様子からもわかる通り、オンラインでは学生同士、または学生と教員の間でのコミュニケーションが極端に少なくなります。このことにより、好奇心を抱くことが減ることを危惧しています。他人の考えから何かいい考えが思いつくこともあります。これも減るでしょう。この状況が続けば、学問への動機や興味を失って主体的に何かを学ぼうとする姿勢が学生に芽生えません。これを踏まえて、もっと積極的に学生とのコミュニケーションをとる機会を準備し、学生が学問へ意識が向くような仕掛けを考えていきたいと考えています。ただし、具体的にはどのようにすればいいか、皆目見当がつかない状況で非常に歯がゆい思いをしています。

授業づくりのコーディネート… 『新しい生活様式と大学での学び』

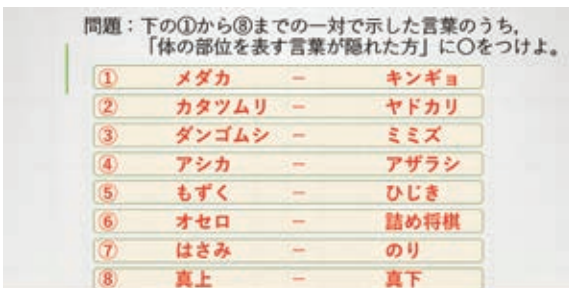
全学教育機構 教職教育センター 教授 西口 利文



▲図1 問題の例(その1)

はじめに、図1の問題をご覧ください。もし時間があれば、ぜひとも3分ほど考えてみてください…。(3分経過)はい、それでは先に進みましょう。読者の中には「わかった!」という方もいらっしゃる、「?」という方もいらっしゃるでしょう。なお、図1の問題でどうしても自力で「わかった!」を実感されたい方は、次の段落の内容はネタバレになりますので、納得のいくまでここで立ち止まって考えてください。

図2の問題をご覧ください。図1の問題に似ていますが、問題文が違います。さて、この問題については解いていただく必要はないですが、どのような感想をもたれたでしょうか。少なくとも、図2の問題を熱心に解いたとしても、「わかった!」といった興奮を覚える方はほとんどいないでしょう。率直に「つまらない問題」です。扱う題材が同じでも、問題文が異なるだけで、問題に向き合う私たちのモチベーションや問題解決時の興奮の感覚が全く異なってくるのがわかります。



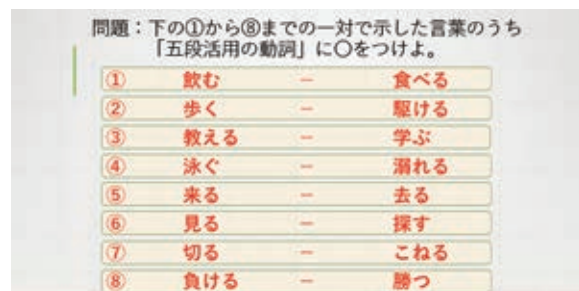
▲図2 問題の例(その2)

上の話は、いわゆる謎解きパズルの世界に限定されるものではありません。図3と図4の問題をご覧ください。中

学校国語科の学習内容である「動詞の活用」を扱ったものです。図3は前者の図1の問題、図4は後者の図2の問題と、構造が同じになるようにしています。果たして、学校で生徒たちはこれまでどちらの問題に多く接しているでしょうか。残念ながら、おそらく図4の「つまらない問題」に接する機会の方が多いような気がします。たとえば、動詞の活用(五段活用、上一段活用、下一段活用など)の「法則」を教員が最初に説明し、その後、生徒たちは、教えられた「法則」を「事例(①~⑧)」にあてはめる図4のような「つまらない問題」を解いていくといった具合です。このことは、他の教科や単元の学習にも無関係な話ではありません。特に教員が、正しい知識を効率的に伝える授業づくりを重視すると、図2、図4の「つまらない問題」が幅を利かせることになります。



▲図3 問題の例(その3)



▲図4 問題の例(その4)

ここで図1、図3の問題に、再度注目してみましょう。これらは「事例(①~⑧)」から「法則」を見つけるという問題の構造になっています。私たちは目の前の出来事から「法則」を見つけようとする際、「あーでもない」「もしかしたらこーかな」という知的な葛藤(認知的葛藤)が生まれます。その結果、深い思考も働かせつつ、目の前の問題を解決

したいという主体的な学びが起きるようです。

ところで、「新しい生活様式」のもと、教育の場では、オンライン授業、家庭学習、ICT教育がにわかに注目されるようになりました。特筆すべきは、教員がいずれの学習概念に向き合った場合でも、多かれ少なかれ学習者の学びを支える課題の準備を余儀なくされるということです。すなわち「新しい生活様式」の教育では、教員が学習者に対して果たすべき役割が鮮明になりました。それは、教員の教科や学問分野の専門的知識や技能を活かした、課題設定を軸にした授業づくりです。ここでは、中心となる課題設定はもとより、その解決を支えるための情報提供、さらには補助的な発問やヒント、教材、教具を、巧みにコーディネートする力が要求されます。専門的知識をわかりやすく伝える説明力は、それを傾聴させることを学習者の目的として発揮するのではなく、その説明内容を手段として、課題解決に挑むように発揮されることになります。

図1、図3の問題は、『課題』のコーディネートの重要性を示唆しています。ここでは詳細は触れませんが、「新しい生活様式」では、『教育目標』や『学習者の責任感』のコーディネートを念頭においた授業づくりも、教員には試されるようです。

なお、実のところ、授業づくりのこうしたコーディネートを巧みに行うことは、コロナ前から教育の場で目指されてきた、「アクティブラーニング」や「主体的・対話的で深い学び」を実現することにも通じています。図らずも2020年度は、教育界が一丸となって、授業づくりのコーディネートにエネルギーが注がれた時代であったと、後になって教育史に刻まれるような予感がします。

キャンパスリノベーション

キャンパスリノベーション

Campus Renovation



令和2年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品
『鯉踊り』
奥田 守(経済学部 経済学科)

キャンパスリノベーション

Campus Renovation

2020年度は世界的に感染爆発を巻き起こした新型コロナウイルスの影響で、大阪産業大学でも前期はオンライン授業、後期はハイブリッド授業となるなど、生活様式の変化を余儀なくされました。

今回のキャンパスリノベーションでは、オンライン授業の様子をお届けします。



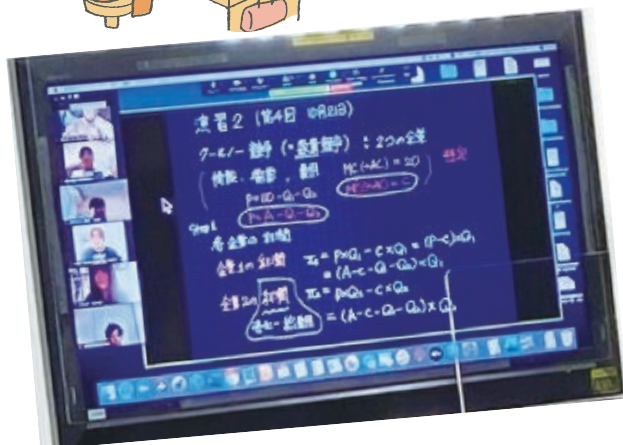
オンライン授業の様子。学生は自宅などからGoogle Meetを使用し、授業を受けます(写真は経済学部の李東俊教授の授業風景)



各教室では、オンライン授業に必要な様々なツールが用意されています



画面上では学生が映ったり、授業内容が映ったりとその時々で画面が切り替わります





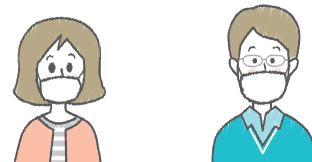
ハイブリッド授業の様子。教室での対面授業とオンライン授業を同時に行います。
 (写真は工学部 機械工学科の土井正好教授の授業風景)



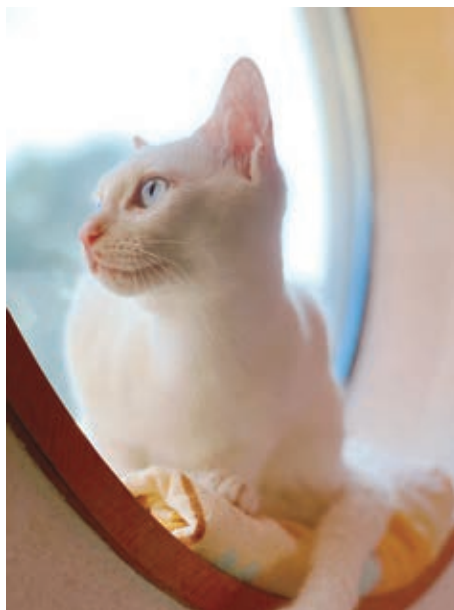
教卓には感染防止のため、アクリル板が設置されています。



人数を制限することでソーシャルディスタンスを保ちながら、授業を受けることができます。



学会報のテーマでもある「新しい生活様式と大学での学び」、皆さんはどのように変化を受け止め、過ごされたでしょうか。



▲令和2年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『私の新しい家族』
長舩 晏(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

コンテスト報告



コンテスト報告

令和2年度企画委員長 大橋 美奈子

第21回「ぶんかくコンテスト」

(長編部門／短編部門)

第5回「写真・イラストコンテスト」

(写真部門／イラストデザイン部門)

第4回「見学会プランニングコンテスト」

大阪産業大学学会では、例年、学部生・大学院生を対象に学会コンテストを実施しています。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、応募方法をweb応募に変更しました。また、オンライン授業となったことなどを考慮し、応募期間を変更しました。

ぶんかくコンテストでは、「長編部門」「短編部門」でそれぞれ募集し、小説やエッセイなど、どれも読み手が楽しめるよう工夫を凝らした作品の応募がありました。

写真・イラストコンテストでは、学内にこだわらず風景写真を募集し、国内のみならず、海外の写真や、季節を感じられる写真など、たくさんの応募がありました。また、イラスト部門では、手書きで細部まで丁寧に作成された作品や、パソコンを用いて作成された作品の応募がありました。

見学会プランニングコンテストは残念ながら今回は応募がありませんでした。

次年度以降も、学生がより興味をひくよう工夫を凝らしながら、継続していきたいと思います。

大阪産業大学学会
コンテスト 2020
Osaka Sangyo University Academic Society
Contest 2020
大阪産業大学学会主催

Let's try!
日頃蓄積している文章やデザイン、写真、行ってみたい見学会などを
この機会にご応募ください！

応募期間
2020年9月23日(水)～10月16日(金)
締切厳守

優秀賞 賞状+Quadカード1万円分
奨励賞 賞状+Quadカード2万円分
努力賞 賞状+Quadカード1万円分
参加賞 Quadカード1,000円分
※参加賞は抽選で50名(50名未満の場合は抽選)
(但し、賞状等は抽選作品のみ)

夏季期間中の思い出を
文章や写真・イラストにし
て応募してみませんか？

【応募方法】
学会webサイトの応募フォームより応募ください
【お問い合わせ先】
大阪産業大学学会事務局
【本部住所 産業研究所事務室内】
【平日】 10:00～16:00
TEL : 072-879-3001 (FAX : 2815)
MAIL : gakkai@cmt.osaka-sandai.ac.jp

▲2020年度学会コンテストチラシ

大阪産業大学学会コンテスト2020実施結果

募集期間 2020年9月23日(水) ～ 2020年10月16日(金)
審査 書類審査
2020年10月30日(金)
最終審査
2020年11月17日(火)

第21回 ぶんかくコンテスト実施結果

募集内容 長編部門・短編部門
応募件数 長編部門……………2件
短編部門……………3件

〈受賞者一覧〉

[長編部門]

【優秀賞】

山中 郁弥(デザイン工学部 環境理工学科)

作品：鳴らないピアノ

【奨励賞】 …該当者なし

【努力賞】

河崎 一輝(経済学部)

作品：天に背く

[短編部門]

【優秀賞】【奨励賞】【努力賞】 …該当者なし



▲山中郁弥さん

▲河崎一輝さん

〈審査委員〉

曾我千亜紀、春口淳一、日高なぎさ、藤岡芳郎、福森徹、三宅敦、山本到、米田昇平、福井清一、李東俊、
服部純典、大橋美奈子

(順不同、敬称略)

第5回 写真・イラストコンテスト実施結果

募集内容 写真部門・イラストデザイン部門
応募件数 写真部門……………37件
イラストデザイン部門… 4件

〈受賞者一覧〉

[写真部門]

【優秀賞】

京家 孝明(経済学部 国際経済学科)

作品：晴天の水



▲京家孝明さん

【奨励賞】

吉田 舞(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

作品：夜のバンコクはこれから

【努力賞】

奥田 守(経済学部 経済学科)

作品：鯉踊り



▲吉田舞さん



▲奥田守さん

[イラストデザイン部門]

【優秀賞】

高塚 基和(デザイン工学部 環境理工学科)

作品：白亜の川の王



▲高塚基和さん



▲竹重風美さん

竹重 風美(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

作品：新しい生活様式と大学での学び

【奨励賞】…該当者なし

【努力賞】

眞木 稜介(デザイン工学部 環境理工学科)

作品：未知



▲眞木稜介さん

〈審査委員〉

T.ハリス、佐藤慶明、谷本英彰、平松綾子、川口将武、岡田準人、川田美紀、藤田久和、佐野郁雄、大野麻子、塩見剛一、北澤章平

(順不同、敬称略)

第4回 見学会プランニングコンテスト実施結果

募集内容 日帰りで実施可能な見学会プラン
 応募件数 応募者なし

鳴らないピアノ

デザイン工学部 環境理工学科 山中 郁弥

1

「ねえ、どうしてこのピアノはならないの？」

まだ幼いその子は不満そうに隣にいる母親に呟いた。

目の前には多くの傷がつく年季の入った黒いピアノがある。

その子はピアノの前に座り、何回も鍵盤を叩いて音を出そうとしていた。

しかし、どれだけ頑張ってもピアノが音を鳴らすことはなかった。

「なんでだよ！」

彼が鍵盤を叩いてもう一時間になる。叩いても鳴らない、不満が溜まる、意地になってまた叩く。

これを延々と繰り返し、ついに痺れを切らしたのか、彼は不満をぶつけるように鍵盤を乱暴に叩いた。

「こらこら颯太。そんなに強く叩いたらピアノがかわいそうでしょ？」

「でも、ならないんだよ」

「じゃあ、もしかしたらピアノが痛まって拗ねちゃったのかも」

「ピアノはそんなこと思わないよ」

軽い冗談に似た注意に彼、颯太は口を尖らせる。

「ねえ、どうしてピアノを弾こうとしてるの？もしかして、幼稚園で何かあった？」

拗ねた颯太に母は困ったように笑いながら横に座った。

颯太は今までにピアノに興味を持ったことはない。それが、彼は今日初めてピアノを弾きたいと言って、急いで母を連れてこのピアノの前に座ったのだ。

母の質問に、颯太は少し俯きながら答える。

「お母さんが、いつもこのピアノを見てさびしそうにしてたから」

その思いもよらない理由に母は少し驚いた。

「……そっか。颯太は優しいね」

悔しがる颯太を見た母は彼の頭をゆっくりと撫でた。

「このピアノね、昔は鳴ってたんだよ」

「ほんと!？」

「うん。お母さんもたくさん弾いたなー」

母はピアノに手を乗せ、懐かしむように笑った。

それを見た颯太はどんな面白い話が聞けるのかと目を輝かせ、母はその期待に応えるように次々とこのピアノの思い出を語る。

「だけど、颯太が生まれるよりずっと前に鳴らなくなったの」

「なんで？」

「それは……分からない、かな。でもね、何度か音が鳴った時があったの」

母は思い起こした記憶をなぞるようにピアノを撫でる。

「最近だと、颯太が生まれる頃だよ」

「ボクが、生まれてくるとき？なんで、そのときになったの？」

「きっと、このピアノが奇跡をくれたんじゃないかな」

「きせき？ボクが生まれたことはきせき、なの？」

「もちろん。颯太が私たちのところに生まれてきたのはすごいことなんだよ」

そう言った母は颯太に体を密着させる。

母はとても幸せそうな表情をしていた。もうそれだけで、十分と思えるほどに。

「でも」

たった一つ。目の前にあるピアノを見ながら。

叶わぬ願いであると知りながら、母は呟いた。

「できるなら、もう一度、聞いてみたいな」

母の遠くを見るような目にはどのような景色が広がっているのか。見上げる颯太には見当もつかなかった。

それでも、颯太は母の願いとも言える感情を子供ながらに感じ取り、あることを決心した。

颯太は思い立ったように立ち上がり、その決心を口にする。

「なら、ボクがひく」

「え？」

「ボクがこのピアノをひいて、お母さんにきかせてあげる！」

颯太の大きな声は部屋に響き渡り、母は彼の言葉に不意を突かれる。

母は颯太を見つめる。そこには胸を張る頼もしい我が子の姿があった。

その姿を見た母の瞳はわずかに潤み、
「ありがとう」

その潤み隠すように、母は颯太を抱きしめる。

しばらく抱きしめた後、落ち着いた母は静かに颯太から離れる。

「でも、今の颯太じゃきっと弾けないよ」

「なら、いっぱいひいてうまくなる！ うまくなって、ぜったいにこのピアノをお母さんにきかせるんだ！」

そう言って、颯太は再びピアノに向かった。

弾き方など知らない小さな手で鍵盤を懸命に叩き、ピアノはそれに応えるようにボコボコと弦を叩く音を返す。

音が鳴ることはない。それでも、彼ががむしゃらに、思うがままに、音のない音を奏でる。

これは、彼が今できる、精一杯の演奏だった。

そんな演奏を聴いた母は微笑み、

「楽しみにしようかな。いつかきっと、その日が来るまで」

小さく呟いた母の言葉には颯太の成長を楽しみにしている感情と、わずかに——後ろめたい色が隠れていた。

2

——照明、うざいな。

燦然と輝く照明が主役である彼と、黒いグランドピアノを照らしている。

その照明は彼らが下にいる限り、永遠に彼らを照らし続け熱を与える。

その熱は徐々に彼の身体を蝕んでいた。

背中には大量の汗が流れ、それを吸収した服が背中に密着して絶妙な不快感を彼にもたらしている。

——早く、終われよ。

心の中で愚痴を零した。彼は演奏中だった。

目の前にあるピアノの鍵盤の上で指を走らせ、綺麗に音を奏でる。

——そんなに俺のことを見んなよ。鬱陶しい。

ただ演奏に集中しているわけではなく、心ここにあらずといった様子だ。

照明や観客の視線が気になり、挙句には演奏が終わらないかを切に願う。

演奏家がさっさと演奏が終われと思うなど言語道断だ。でも、彼は願ってしまった。

——早く、終われ。

なぜなら、彼——谷島颯太は、ピアノが嫌いだからだ。

演奏が終わり、彼は舞台の前に立ち観客に顔を向ける。

観客席にはちらほらと人がいるが、はっきり言って少ない。

それもそのはず。これは一般向けのコンクールなどではないからだ。

「では野田先生、感想をどうぞ」

司会役の女性が、舞台に最も近い場所に座っている男性にマイクを渡した。

彼は野田歩。国内のみならず、海外でも人気の高い有名なピアニストだ。

「……はあ」

野田がマイクを受け取った瞬間、酷く退屈そうな溜息が会場に鳴り響いた。

「えっと、谷島、颯太君、だっけ？」

「はい」

「君、やる気あった？」

いきなり核心を突かれた言葉に颯太は息を飲む。

これがこの演奏会の真の姿。ここは各々が演奏をし、それに対してプロである野田が意見をjする批評会だ。

「その感じ、凶星のようだけど。何か言いたいことは？」

「……いえ。その通りです」

威圧感とも取れる野田の雰囲気から颯太が太刀打ちできるはずもない。そもそも、そう思って演奏していたのだから、彼の意見に文句のつけようなどなかった。

「君は、何を想いながらピアノを弾いていたんだ？」

「それは……別に何も」

「ああ知ってる。君の演奏を聞いたらだいたい分かったよ」

野田は嘲笑し、そのあまりにも挑発的な振る舞いに颯太は苛立ちを覚えた。

これは、この批評会ではよく目にする光景だった。

野田はあえて演奏者のこれまでの努力を馬鹿にするような言葉をかけ、それに対してどのような反応をするのかを見ていた。

なぜこのようなことをするかというと、野田はこの反応にこそ演奏者の本質が見えると考えているからだ。

「君はそこそこ上手い。でも、上手いだけで、演奏に心が無い。例えて言うなら……君がしているのは白と黒の鍵盤を覚えた通りに押していく作業だ」

颯太の演奏をここぞとばかりに馬鹿にするように笑った野田。

だが、これでも動かない颯太を見た野田はもう一押しする。

「作業をしにここに来られてもね。作業なら君がピアノを弾く必要はないんだし。機械にでも任せておけばいい。その方が君なんかよりずっと上手い。何か、意見はあるか？
谷島颯太君」

野田はマイクを口から離して颯太の意見を待つ。

颯太は少し考えていると、

「機械に任せておけばいい、か」

野田の発言の中にあつた言葉を無意識に拾い上げ、復唱した。

彼は口遊んだ瞬間、その言葉が妙に腑に落ちた。

「……確かに。俺なんかより、機械の方がずっといいな」

颯太は薄ら寒く笑った。まるで、自分の演奏などどうでもいいように。

それを聞いた野田の余裕だった表情は曇る。

「本気で、言っているのか？」

野田は本心からの言葉なのかを確認するが、颯太は言い淀むこともなく「言葉の通りですよ」と否定しなかった。

それを聞いた野田は啞然として颯太を見つめ、思えば初めから変だったと野田は彼の態度を一から思い出す。

やる気のない演奏に心の籠っていない音色。この時点で気付くべきだったのだ。

彼が、ピアノに対して真摯でないことを。

それでも野田は信じたかったのだろう。彼もここに来る演奏家と同じ向上心がある人間だと。

しかし、結果は違った。これ以上はもう何も聞けないと思った野田は問いかける。

「君は、どうしてピアノを始めたんだ？」

この問いは野田が颯太にできる最後の手助けだった

「きっかけ……」

颯太は記憶を掘り出すが、そこには白い世界しか広がってなかった。

「何も覚えてないです」

「なら思い出すといい。ピアノを始めたきっかけ、ピアノを始めた頃の思い。それを思い出してからでも、きっと遅くはない」

颯太は返答しない。

「この批評会は半年後にもう一度ある。そこで、君の答えを聞かせてくれ。以上だ」

野田の批評は終わり、司会の女性にマイクを渡した。

会場には微妙な空気が漂う。そんな空気を背に、颯太は舞台を去った。

そして、舞台裏。彼は誰もいないことを確認すると、苛立ちを込めた拳を壁にぶつけ、

「何が想いだ。何がきっかけだ。俺の演奏に価値がないなら、はっきり言えよ」

怒りを口から吐き捨てる。

「やっば——ピアノなんて、嫌いだ」

その声は、虚しく舞台裏に反響するだけだった。

3

高校一年生、谷島颯太はピアノが嫌いだった。

「従え」と命令する譜面。

結果ばかり気にして、いい結果を持ち帰ってこなければ怒鳴る講師。

結果を取ったとしても、楽譜通りで心が籠っていないと陰で蔑む第三者。

何をとっても、嫌いな要素しかなかった。

「……クソが」

批評会は終わり、帰路に着いた颯太の上にはいつもより赤く見える夕焼けが広がっていた。

その帰り道、彼の脳内では野田の最後の問いが何度も何度も繰り返されていた。

『君は、どうしてピアノを始めたんだい?』

颯太には、どうしてもこの言葉の真意が分からなかった。

思い出せば分かるかもと記憶を順に掘り起こすが、思い出せるのはピアノの嫌な記憶ばかりで颯太は余計にむしゃくしゃした。

「始めたきっかけなんてどうでもいいだろ」

投げやりな言葉と共に、颯太は道端に転がる小石を一蹴する。

その後も、幾度となく野田の批評とピアノの嫌な記憶が蘇り、颯太の気分は最悪。

その最悪な気分はもはやピアノだけに向かず、道ゆく他人にまで苛立ちを覚えさせるまで膨れ上がっていた。

「クソ、クソクソクソ! どいつもこいつも……!」

どうして自分だけが苦しんでいるのかと、颯太は周りを睨みつける。

そうして怒りに任せて歩いているといつの間にか家の前に立っており、颯太は荒々しく扉を開けた。

「颯太お帰り」

玄関が開いた音を聞きつけた母が出迎えにやってくる。だが、苛ついている颯太は返事もせずに無視して、横を通り抜けようとする。

それに対し、母は少し悲し気に笑い、

「今日の演奏会、どうだった?」

「……別に」

「野田先生まだ元気にした? きっと、根も葉もないこと言って色んな人を怒らせたんでしょ」

「……」

「お母さんも昔、『お前の演奏は品がない』って言われてね。お母さんももう我慢ならなくて、品がなくても情熱はあります! って言ってやったの。そしたら野田先生声を出して笑ったのよ。それでね」

昔のことを懐かしく思ったのか、軽快に話す母はとても楽しそうだ。

そんな笑っている母を見た時、颯太は自分の荒んだ心が徐々に赤く染まっていくことに気がついた。

——なんで、そんなに楽しそうにしてるんだよ。

心の奥底から怒りが込み上げ、その怒りは全身を巡り体を熱くさせた。

颯太は許せなくなった。自分がどれだけ苦しんでいるかも知らずに、楽しそうにピアノを語る母のことが。

そして。

「うるさい!」

歯止めが利かなくなった怒りは口から溢れ出てしまう。

「そんな話聞きたくもないんだよ!」

颯太の瞳には激しく動揺する母の姿が映るが、彼にはもうどうでもよかった。

「ど、どうしたの? 野田先生に何か言われた?」

「ああ言われたよ。心が籠ってない、機械が弾いた方がマシだって! でも、そういう風に弾けて言ったのはお前らの方だろ! 俺を縛り付けて、こんなくだらねえもんにしたのは全部全部、お前らのせいだろ!」

楽譜も、講師も、結果も。全ては颯太に正確な演奏だけを求めた。そこに、彼の意思は必要なかった。

颯太はそれが自分という存在を否定されている気がして嫌だった。

でも、颯太はピアノから逃げることができず、弾き続けるしかなかった。

そうして長い間、颯太はずっと自分の嫌いな演奏を続けた結果、彼は自分の全てを縛り付けるピアノが嫌いになった。

「待って、何を言ってるの」

「母さんも関係ないとか言わせないからな。俺の演奏を聴いても何一つ文句を言わない。母さんも俺のピアノを認めてたんだろ。俺なんかいらぬ死んだような演奏をさ!」

「違う! お母さんはそんなことを思っていない! 颯太、いったん落ち着こ。落ち着いて、話して。お願い」

激情を吐き捨てる颯太を宥めようと母は少し怯えながら笑いかけるが、それがかえって彼の怒りに油を注ぐこと

になる。

「ふざけんなよ！ 誰のせいでこうなったと思ってんだよ」

颯太は怒りはもはや憎しみに近くなっていた。

「母さんさえないなければ、俺がピアノなんて弾かずに済んだのに……」

静かに放ったその言葉を境に、廊下には静寂が流れる。

言いたいことはまだまだたくさんある。だが、それ以上に颯太は自分を苦しめた母を苦しめたい欲望が芽生えた。

ただ暴言を吐くだけでは優しい母を最大限苦しませることはできない。

だったら、言うことは一つだった。

彼はゆっくりと歩きだし、二階へ続く階段の前でその言葉を口にする。

「俺、ピアノ辞めるわ」

短い言葉だ。でも、颯太には分かっていた。

この言葉が母にとっては最も重い言葉だということを。

「……颯太、何を言って。待って、考え直して」

「は？ やっぱ都合のいい道具がなくなるのは嫌か？ どこまでも自分勝手な親だな！」

「いい加減にしなさい！ 颯太、一回ちゃんと話を！」

母は颯太の腕を意地でも離さないように強く掴んだ。

「まだ、俺を縛り付けるのかよ。そのせいで俺が苦しんでるって分かってんだろ！」

「颯太！」

「離せよ！」

「お願い、話を聞いて！ 颯太！」

「……っ！ 離せて言ってんだろ！」

怒りの限界を迎えた颯太。直後、背後で鈍い音と呻き声が聞こえてきた。

自分は何をしたのか。怒りで何も覚えていない颯太は恐る恐る後ろを振り向くと、

「う、うう……」

母が頭を抱えて倒れていた。

颯太には母を突き飛ばした感覚はないが、現実がそれを物語る。

「そう、た……そうた」

頭が割れるような痛みを抱える母。そんな痛みを持ってもまだ、必死になって颯太に何かを伝えようと必死に口を動かすが、声が出ない。

「……俺は、ピアノが大嫌いだ」

「……」

「母さんがなんで俺にピアノを弾かせたのか、だいたい想像がつく。どうせ、ピアニストだった時の栄光を引き継がせるために、俺を無理矢理ピアニストに仕立て上げたんだろ」

「ち、違う。あなたは」

「……もう、いいよ」

何と言っても無駄だと悟った颯太は、

「まって、そうた……颯太あ！」

悲痛めいた母の叫び声を背に階段を上がり、自室へと駆け込み部屋を見渡した。

彼の部屋には練習用のピアノが置いてあり、本棚にはこれまで弾いてきた楽譜の数々が収納されている。

「はは……これでお前から解放されるのか」

颯太はそれらを見てから、腕についた手の痕を眺める。

母の手すら拒めたのだ。颯太はそう思うと、もうピアノと関わる必要がなくなったと、嬉しく思った。

しかし。

「なのに何で、まだこんなに！」

収まりかけた怒りが再発する。

あれだけ不満を曝け出したと言うのに、颯太の心は満たされてはいなかった。

溢れ出す怒りが颯太を侵食し、すぐにでも発散しなければ頭がおかしくなりそうだった。

「あああああ!!」

彼は叫んだ。

行き場のない怒りを追い出すために喉が張り裂けんばかりの絶叫を繰り返した。

さらに、本棚にある楽譜たちを乱暴にばら撒き、破り捨てて。

「こんなもんがあるから、俺は！」

颯太は狂ったように部屋を荒らし、自分を縛り付けていたものを片っ端から壊した。

壊して壊して壊して。目に入るものを全て壊した彼に残った最後のものは、壊した残骸と、虚しさだけだった。

4

時間が過ぎ、颯太が気がついた時には月夜の明かりもない暗い夜になっていた。

どれだけの時間をかけて破り捨てたのか。

颯太はゆっくりと目を動かし、部屋に散乱している楽譜の残骸を見渡した。

「……こんなことやったって、何も変わらないこと分かったんだらうが」

怒りは消えたが、颯太は酷い虚無感に襲われた。

冷静になった今なら分かる。こんなことをしたって今までピアノに費やした時間が消えるわけではない。

颯太はまた蹲り、再度時間が経過する。

その間、颯太はどうしようもない後悔に苛まれ、潰されそうになっていた。

そんな時、扉を叩く音が部屋に反響する。

「颯太、入るぞ？」

それは父の声だった。

颯太は扉に目を向けるがすぐに視線を戻して返事すらしない。

「返事がないってことは、勝手に入っても文句は言うなよ……おお、これまた随分と荒らしたもんだな」

返事をしない颯太に痺れを切らした父は勝手に部屋の中に入り電気をつけると、そこに広がっていた光景に一瞬だけ言葉を失う。

「勝手に入ってくんなよ」

「文句は言うなって約束だ」

力のない颯太の意見を切り捨てた父は近くにあるベッドに腰をかけた。

それから、父はすぐに口を開かずに部屋のことを観察した後、じっと部屋の隅で蹲る颯太のを見つめた。

「母さんと喧嘩したんだって？ お前も親に向かって口を利けるようになったんだな」

「うるさい。母さんに言われて俺を連れ出すために来たん

だろ。最初からそう言えよ」

「残念、ハズレだ。俺は颯太と話がしたいと思ってここに来た。母さんは関係ない」

「嘘つけ」

「ほんとだって」

父は少し笑う。

「さて、前置きはここまでだ。颯太、何かあったんだ？ お前と母さんの喧嘩だ。きっとピアノ関係のことなんだろう。言ってみ」

それを聞いた颯太は父を鼻で笑った。

「ピアノのことなんて何も分からないくせに」

「確かに。でも、ピアノのことが分からなくても、颯太のことなら分かるよ」

「分からないから、こうなったんだろ」

「……そうだな。そこは親として不甲斐ないばかりだ。こんなに追い詰められているお前に気付けなくて、悪かった」

父は颯太に向けて深く頭を下げる。

その謝罪を受けた颯太は、なぜか心が重くなった。

「今さらそんなこと言っても、遅いだろ」

「遅いなんてことはない。だから、父さんはここに来たんだ。颯太、話してくれ。幸いにもここにはピアノを全く知らないやつが一人いるだけだ。独り言でいい。俺は、お前のが知りたいんだ」

「頼む」と、父はさらに頭を下げ、颯太は顔を上げて初めて父の姿を見た。

すると、颯太はさらに心が重くなり、次第に父にこのようなことをさせていることに対して、強烈な罪悪感に襲われてた。

なぜ、そんなものを感じたのか。颯太はもう、分かっていた。

「今から喋ることは独り言だ。聞き流してほしい」

「……ああ」

颯太は震える声で語りだす。

「俺さ、ずっと前に結果が出ない時が続いてたんだよ。何をしても、どれだけ頑張っても結果を得られなくて、今みたいにイライラしてた時期があったんだ」

「——」

「その時にさ、もうどうでもよくなって、コンクールでただ楽譜を忠実に再現する機械みたいな演奏をしたんだ。そして、入賞して。それまでの結果が全然だったから色々な人に褒められたんだ」

「——」

「それから、俺はずっと自分を殺して演奏を続けた。そして、形だけでも結果を残せるから。演奏から自分を排除して、死んだように演奏を続けて、いつしかこの演奏に自分はいらないことが分かった」

「——」

「でも、それに気付いた時にはもう遅かった。やめようとしても、俺が積み上げてきた演奏は体に染みついて、振り払うことは無理だった」

「——」

「俺はずっと、自分のいない演奏を続けた。こんな演奏じゃ駄目だって分かってながら。何度もピアノを辞めようと思ったよ。でも、できなかった。俺のちっぽけなプライドがピアノから逃げることを許してくれなかった」

「——」

「最初から分かってたんだ。悪いのは全部俺だって。でも、俺はこんな屑な自分を一生懸命に守ろうと、ピアノを嫌いと思い込んで、全部ピアノのせいにして逃げたんだ。馬鹿だろ、自分が苦しむことぐらい分かってただろ」

「——そう、だったのか。本当に、すまなかった。息子がこんなに悩んでいるのに何もしてやれなかったなんて、俺は親失格だ」

颯太の苦しみに満ちた告白を聞いた父は、なぜ気付いてやれなかったんだと自分を叱責するように強く唇を噛み締める。

「父さんはさっき、親子喧嘩って言ったけど。あれは俺の一方的な八つ当たりだった。全部、俺が招いたことなのに、それを母さんのせいにした。ほんと、最低だよな」

笑い声を出す余裕すらない颯太だが、それでも自分を嘲笑せずにはいらなかった。

颯太は最初からピアノを憎んでなどいなかった。ただ、彼の自尊心がそれを強制させ、自分ですら気付くことのないように蓋をしたのだ。

全ては自業自得だ。

なのに、颯太は自分のせいなのに頭を下げる父の姿を見て胸を痛めたのだ。

「こんなことなら、ピアノなんて弾かなければよかった」

こんなに周りを気付つけてしまうのならピアノなど始めなければよかったと心の底から思う颯太。

その颯太の言葉を聞いた父は眉間にしわを寄せた。

「弾かなければよかったなんて、颯太が言うんじゃない」

「じゃあ、俺はなんでピアノを始めたんだよ」

「忘れたのか？ ……まあ、ずっと前のことだし無理もないか。よし、付いてこい。颯太がピアノを始めたきっかけを見せてやる」

父はそう言って颯太を連れて部屋の外に出て、一つの部屋の前で立ち止まった。

「ここって、物置だよな？」

「ああ。ここが、お前のピアノの始まりだ」

父は二階にある物置を開ける。

開けた瞬間、埃が舞い上がり颯太を汚く出迎えてくれた。

颯太の見渡す限り、段ボールが積みあがっているだけで特に変わったものはない。

父はそんな段ボールを横にどかして奥へと足を進めた。

そして、一番奥には少し開けた空間があり、その中心には、

「これが、颯太のピアノの始まりだ」

黒いピアノがあった。

颯太はそのピアノに吸い込まれるように歩み寄る。

随分長い間使われていなかったのか、大量の埃を被っていた。

そんな埃まみれのピアノを見た彼は無意識に一音だけ弾いてみる。

「……鳴らない」

ピアノは鳴らなかった。どの鍵盤を弾いても鳴ることはない。

「颯太はよく、ここで母さんと一緒にそのピアノを弾いたんだ」

「一緒に……」

颯太は周囲をぐるっと見渡すと、記憶と重なる光景が広がっていた。

窓際に椅子が置いてある——よく、母さんが座っていた椅子だ。

本棚には子供向けの楽譜集があった——母さんが教えてくれた曲だ。

ピアノには落書きがあった——母さんと一緒に書いた落書きだ。

「あ……」

記憶は一瞬にして蘇る。

音、熱、明かり、匂い、仕草、優しさ。彼の奥底に眠っていたものが一気に表に顔を出した。

「なんで……」

ピアノを撫でてその時のことを思い出した颯太は、ある一つの約束を思い出した。

——ボクがこのピアノをひいて、お母さんにきかせてあげる!

「なんで、忘れてたんだよ……こんな、大事なこと」

一つ一つの記憶を鮮明に呼び起こす。

どの記憶にも母がいて、優しく笑いかけてくれていた。

「母さん……」

忘れていた懐かしい思い出は颯太の目の奥を熱くし、その熱は頬を流れ鍵盤に落ちる。

「このピアノで弾いていた時間は短かったからな。忘れていたのも無理はない」

鍵盤を眺める颯太の横に父は立ち、肩を優しく叩いた。

それからしばらくの間、颯太は母との思い出に耽った。どの記憶も暖かな温もりに包まれていて、いつの間にか怒りや虚無感は消えていた。

母との大切な思い出を取り戻した颯太。

「俺、謝りにいかない」と

自分がどれだけ馬鹿なことをしてしまったのかと、それを謝りに行きたくなくなった。

「……いい表情になったな。よし、俺も一緒について行ってやる。母さん、怒ると怖いからな」

「ありがとう、父さん」

今までの空気を和ませるように笑った父につられ、颯太も久しぶりに笑った。

彼らは部屋を後にし、緊張を胸に一階に下りた二人はリビングに入り、母を呼ぶ。

「母さん」

しかし、母の返事はなかった。

テーブルの上には食事が乗っていた。

おそらく、颯太のことをずっと待っていたのだろう。食事はすでに冷え切っていた。

颯太がそれを確認して、ふと目を横に逸らすと、そこには。

「……かあ、さん？」

——母が、倒れていた。

5

「母さん、具合はどう？」

「心配しなくてもお母さんは大丈夫だから。それより颯太。学校はいいの？」

「今日は祝日だよ」

「そうだった？ あー、もうそんな時期か」

呑気な物言いの母は颯太を見て笑った。

ここは病院の一室。母はその部屋のベッドの上にあった。

「ねえ、次の批評会まで、後どのくらい？」

「三か月後だよ」

「三か月か。なら、今度こそ野田先生を一泡吹かせるくらいの時間はあるね」

「そう、だね」

母はとても元気そうだった。

でも、時折見える服の隙間からは以前の母とは思えないほど細い腕が見え隠れする。それを見た颯太は心を握り潰されるような感覚に襲われた。

「ごめん、ちょっとトイレ行ってくる」

「行ってらっしゃい」

颯太は外に出るが、トイレには行かずに適当なソファに

座って頭を抱える。

母は元気に振舞ってはいるが、それは心配させないためにしんどいのを我慢していることを颯太は知っていた。

なぜなら母の命は——もう、後わずかしかないから。

医師から突き付けられた宣告は、余命半年。

どうやら、母は元から脳に異常があり、あの日、頭への強い衝撃と共にその異常が急激に悪化したらしい。

その衝撃に颯太は覚えがあった。

母を突き飛ばしたあの時だ。

「それって、俺が……嘘だ……俺が母さんを……俺が！」

父は「お前のせいではない」と言ってくれたが、颯太は自分のせいでと自責の念に押し潰された。

それから月日が流れた。

何とか治療を続けているが、回復の余地は一向に見られない。

だから、颯太と父はできる限りの時間を母と一緒に過ごすことを決めた。

母と、いつ別れてもいいように。

それからというもの、彼らは母との時間を全力で過ごした。

これから過ごすはずの時間の分まで、彼らは母と語り合った。

いつまでもこの時間で止まってほしいと何度思ったことか。

でも、現実は無慈悲だ。

母の命は刻一刻と終わりに近づき、余命一か月を切った時。

「では、これから一週間。家族との最後の時間を送ってください」

医師はそう言って、母を一時的に退院させた。

これが、病院側にできる最後の配慮なのだろう。

病院を出た三人は久しぶりに家族全員で家の床を踏んだ。

「母さん、お帰り」

「ただいま、皆。遅くなってごめんね」

そして、母と過ごす最後の時間が訪れた。

とは言え、母はいつもと変わらない生活を過ごした。掃除をしたり、料理をしたり、ご飯を食べに行ったり、何気ないことを噛み締めるように繰り返した。

母にとって、家族といつも通りの日常を送ることが何よりも幸せであり、それ以外の特別なものを必要としなかった。

だが、多くの時間を共に過ごしてきた父は違った。

ふとした瞬間に突き付けられる現実には幾度となく涙を流し、今まで通りの時間を過ごすことなどできなかった。

そんな父を見た颯太は、決意を固めた様子であのピアノが置いてある部屋を開ける。

部屋は母の手によって掃除され、積み上げられていた段ボールは見る影もなくなった。

その部屋の中心。そこには、あのピアノが変わらずに颯太に顔を向いていた。

彼にはこのピアノに向かう理由があった。

それは、母との約束を守るためというのもあるが、もう一つ理由がある。

あの時、母は言ったのだ。

——このピアノが奇跡をくれたんじゃないかな。

その言葉を信じて、颯太は藁にも縋る思いでこのピアノを鳴らそうと懸命に弾いた。

毎日、毎日毎日毎日。鳴らないピアノを鳴らそうと皆が寝静まってから何時間もピアノと向き合った。奇跡が起これと、鳴ってくれと願いながらずっと弾き続けた。

しかし、彼の思いはピアノには届かない。

「なんでだよ……鳴れよ！ 鳴ってくれよ！ 鳴って、くれよ……頼むから」

颯太は自分の無力さに涙した。

そんな彼を嘲笑うかのように、時間は無情にも過ぎていく。

そして、最後の一日。残された時間はわずかとなった。

でも、颯太は諦めなかった。その日の夜もピアノに向き合っていた。

ピアノの前に座った颯太は大きく深呼吸をし、最後の願いを込めて指を鍵盤の上で走らせ、一心不乱にピアノを弾く颯太。

一回で鳴らなければ、二回目三回目と。何度も何度も、音を鳴らすために己の全てをかけて演奏をする。

「鳴れ、鳴れ、鳴れ、鳴れ……いい加減、鳴りやがれ！」

いつまで経っても音を出さないそのピアノに颯太は拳を叩きつけた。

「なんで鳴らないんだよ！ こんな時に起こすのが奇跡だろ！ だったら起こせよ！ 奇跡を起こして、母さんを救ってくれよ……なあ、頼むから……母さんを、救ってくれよ」

颯太は目の前のピアノに泣き崩れる。

彼の脳裏にはこれまで過ごしてきた母との記憶が流れていた。

楽しかった記憶から悲しかった記憶、寂しかった記憶に辛かった記憶。大切な思い出を思い出せば出すほど、颯太は母がいなくなることに耐えられなくなった。

「かあ、さん、母さん……」

嗚咽を吐きながら、颯太は遠くに行くことを引き留めようと子供のように、母のことを呼んだ。

「……颯太」

その声に、誰かが返事をした。

顔を上げ、颯太は声の方を向くと、

「かあ、さん」

母が見つめていた。颯太はすぐに涙を拭き強引にせき止める。

「……ずっと、弾いてたの？」

「どうにかして、鳴らせないかなと思って」

母はそこで「どうして？」とは聞かずに、ピアノを一瞥してから苦痛めいた表情で口を開いた。

「ごめんなさい。お母さんね、嘘、付いてたの。実はそのピアノ、もうずっと前に」

「壊れてるんだろ。俺も多少はピアノを触ってきてる。壊れてることぐらい、分かるよ」

先取りされた言葉に母は驚いたが、すぐに視線を下げて申し訳なさそうに話し出す。

「ごめんね。嘘ついてまであんなこと言って。これじゃあ、颯太に言われた通り、私が強引にピアノを始めさせたようなものだよね」

「違う！ あの時の俺は本当にピアノを弾きたかったん

だ！」

「……やっぱり優しいね、颯太は」

母は颯太の優しさに微笑を浮かべる。

「ごめんなさい。あなたに、何もしてあげられなかった。苦しんでいる時も気付かなかったし、今だって颯太にこんな思いをさせて。本当に、親として情けない。こんな親でごめんなさい」

「そんなことないよ！」

「うん。事実なのは事実。本当なら、これから颯太の歩む道を手助けしないとイケないのに……」

母の声が震えた。

その時、颯太は初めて見た。

母が涙を流すところを。

「もっと、一緒にいてあげられなくて。色んな事に気が付いてあげられなくて。こんなに早く颯太を置いていく母親で……ごめんね」

母の「ごめんなさい」はとても辛そうで、聞いた颯太の目頭が熱くなる。

母はずっと我慢していた。最後の最後まで我慢して、できるだけ家族に辛い思いをさせないようにと心に蓋をしていた。

でも、颯太を見た瞬間に母は自分の思いを止めることなんて出来なかった。

母は颯太のことを愛しているから。

「ずっと一緒にいたかった。もっと話をしていたい。一緒にどこかにも行きたい。成長する姿を見ていたかった。まだまだたくさん、一緒に笑っていたいよ……颯太」

「……」

「ごめんね、颯太。子供の前でみっともない姿を見せて」

溜め込んでいた気持ちを吐き出す母は声を出して泣いた。

颯太は母の思いを聞き、止めていた涙が流れそうになったが、

「母さん」

覚悟を決めた表情を浮かべ、涙を堪えた。

「まだ、このピアノの音を聞かせてないね」

「颯太、そのピアノは」

「大丈夫だって、あの時より上手くなってるから。だから、母さんはいつもの椅子に座って、俺の成長した姿をちゃんと見てて」

颯太は再びピアノに向き合い、母は椅子に座り颯太のことを見守る。

その時、颯太は母のことを見つめて、あの時言いそびれた仲直りの言葉を紡いだ。

「母さん。あの時、酷いこと言ってごめん」

「……うん。許してあげる」

視線の先では母が優しく微笑んでいる。

ようやくできた仲直りは颯太の胸に引っかかっていたものを消した。

もう、言い残したことはない。後は、母に演奏を聞いてもらうだけで。

「——」

音のない静かな夜。颯太の演奏が始まった。

全神経をピアノに集中させ、指を軽やかに走らせる。彼のその姿は一介のピアニストとして遜色ない。

が、ピアノは鳴らない。颯太が押す鍵盤に合わせて、弦を叩く鈍い音が部屋に満ちるだけだ。

——もう関係ないだろ、そんなの。

颯太は鳴らなくても演奏を止めなかった。

強く叩いたりもせず、優しく撫でるようにピアノを弾いた。

もう、颯太にとって音が鳴らないことはどうでもよかった。最後に、母にピアノを弾いている姿を見せられただけで、十分だった。

——母さん。母さんのおかげで俺はここまで成長できました。ありがとう。

颯太は感謝してもきれない想いは演奏に感情をもたらす。

——小さい時はたくさん一緒に弾いたっけ。楽しかったよ。

思い出が演奏に色を与えた。

母はどんな時も颯太の隣にいてくれた。

かけがえのない思い出が胸を暖かくしてくれる。

——生意気言ったりしてごめん。母さんをたくさん困ら

して、ごめんなさい。

母への謝りは演奏に強弱をつけた。

今思えば、口から出た出まかせばかりで、そんなことを言っていた過去の親不孝な自分を殴りたくなかった。

それから、颯太は母に伝えたい想いを、演奏に込めた。

様々な想いは指先を通じて、ピアノに伝わっていく。

そして、最後に颯太は一番大切なことをピアノに流し込んだ。

——母さん。今までありがとう。本当に、ありがとう……大好きだよ。

颯太の愛情がピアノに伝播していく。

母にたくさんの愛情を注いでもらった彼は、今度は自分の番だと、母にありったけの「好き」を届ける。

その愛情を最後に、彼は全て伝え終えた。

もう伝え残すことはない。後は、最後まで弾き切るだけになった。

その時だった。

ピアノから、音が鳴る。

今まで鳴らなかったピアノは、颯太の想いに応えるように音を奏でる。

その音は、母と同じ、優しさに満ちた綺麗な音色だった。

音は部屋を充満し、颯太のことを優しく抱きしめる。

颯太は演奏する手が震え、堪えていた涙が溢れ出た。

もう、鍵盤は涙で見えていない。色んな感情が入り乱れて、何も考えられない。

それでも、彼は弾いた。

演奏者として、聞かせたい人のために最後まで弾き続けた。

そして、颯太は最後の音符を奏で、鍵盤から手を下した。

颯太はどうしようもないほど泣いていて、母はそんな彼を抱きしめる。

「颯太、上手くなったね。ありがとう。母さんの願いを、叶えてくれて——愛してる」

こうして、颯太の、母へ送る最後の演奏が幕を閉じたのだった。

6

数週間後。

颯太は再び批評会の場に立ち、以前と同じように野田の前に立っていた。

「……いろいろと言いたいことはあるが。その前に一つ。何か、あったのかい？」

立ち振る舞いも、ピアノの演奏の質も以前と違う颯太に野田は問う。

「先生の言った通り、俺は自分のピアノを弾いたきっかけを思い出しました。そのおかげです」

「……そうか。なら、ようやく私も思う存分口出しできるというものだ！」

颯太の成長を嬉しそうに笑った野田は、いつも通り気に食わない箇所にケチをつけ、演奏者を馬鹿にするような態度に戻った。

そんな態度に、前の颯太は投げやりになっていただろう。

しかし、彼は前のようなピアノに対して不誠実ではない。

颯太は言われた文句に対して自分の意見を主張し、それに対して野田がさらなる発破をかけ、過去一番に熱い口論が会場に響き渡った。

一時間ほどかけて口論はようやく終結を迎え、颯太は疲れた表情で会場を出て近くにある噴水の前に向かった。

そこには、彼が待ち合わせしている人がいる。

急いで向かった颯太。

そして、辿り着いた場所には車椅子を押す父の姿と。

「いい演奏だったよ。颯太」

車椅子に座って、笑う母の姿があった。

あのピアノを弾いた日から、母の容態は改善へと向かった。

それに父と颯太は泣いて喜び、医師もこれには「奇跡でも見ているかのようだ」と驚きを隠せていなかった。

それもこれも、全てあのピアノのおかげだったのかも知れない。

だがあれ以降、あのピアノは役目を終えたのか、音が鳴らなくなり再び深い眠りについた。

少し寂しい気もしたが、いつも通りに戻ったと颯太は深く考えないようにしていると、

「ねえ颯太」

不意に、母に名前を呼ばれた。

「なに？」

「ピアノは、まだ嫌い？」

それは颯太がこれまで思ってきたことだった。

でも、もう心の蓋もちっぽけなプライドもどこか遠くに捨ててきた。

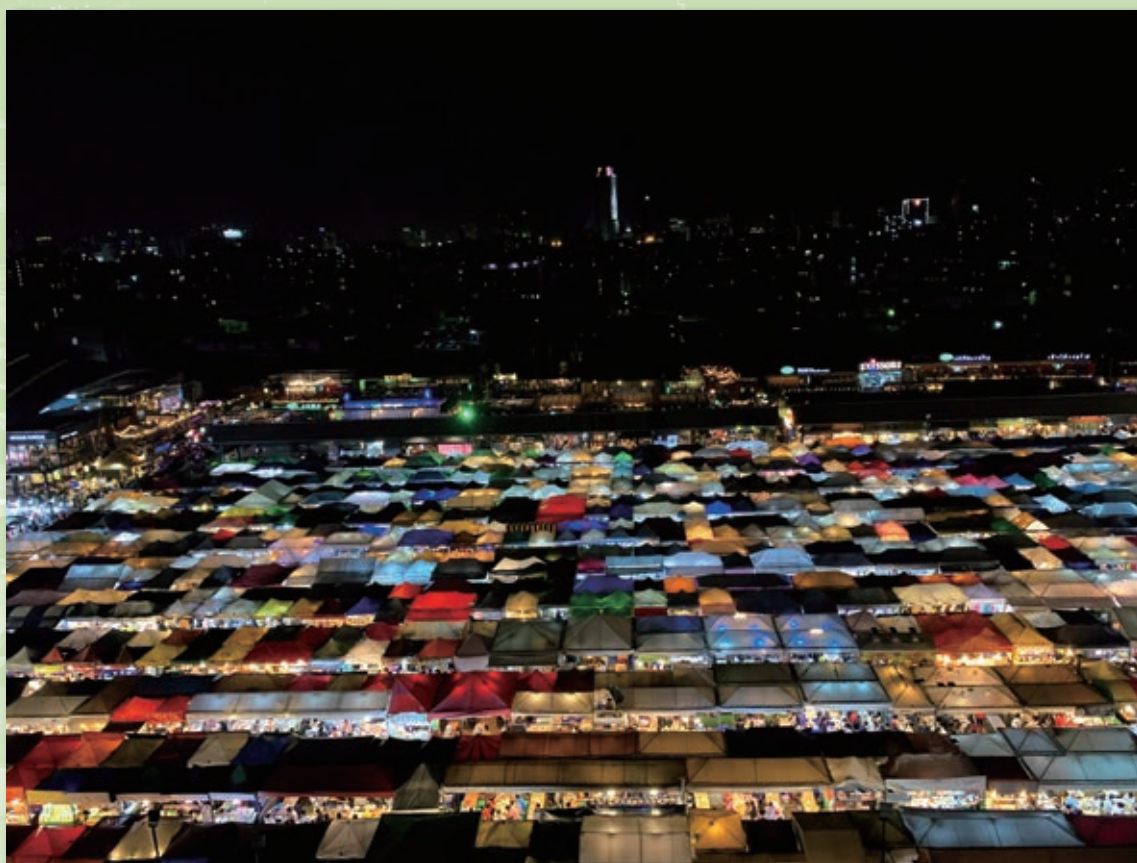
今なら、颯太は素直な気持ちで答えられる。

瞳を閉じ、大きく息を吸った颯太は屈託のない無邪気な笑顔で、母にこう言った。

「いいや——大好きだよ！」

2020年10月16日

留学記



STUDENTS

留学記

Study Abroad Report

令和2年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)奨励賞作品
「夜のバンコクはこれから」
吉田 舞(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

アメリカ留学

工学部 電子情報通信工学科 准教授 山崎 高弘

2019年6月から2020年3月までカリフォルニア大学アーバイン校へ留学してきました。新型コロナウイルスの影響で帰国直前はいろいろと振り回されましたが、長期間の海外滞在は研究活動においても海外生活においても大変貴重な体験となりました。

カリフォルニア大学(University of California)は、10大学で構成されるカリフォルニアの州立大学機構です。カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)などは有名ですね。アーバイン(Irvine)校は大阪産業大学と同じ1965年の設立です。運営は各キャンパスで独立しているため、大学の規模や学部の教育内容、キャンパスライフには幅広い差があるようです。アーバイン校には13のスクール(学部)に相当があり、工学部の名称はThe Henry Samueli School of Engineeringといい、ヘンリ・サミュエリというネットワーク企業Broadcomの設立者の名称が付けられています。広大なキャンパス内はバスが循環しており、キャンパス内には多くの学生アパートが存在しています。留学生も多く、南カリフォルニアの民族的・文化的な多様性を反映しているように感じられました。



▲5階建ての工学部棟、1階は大講義室

大学キャンパスは、名称のとおりロサンゼルス国際空港から70kmほど離れたオレンジ郡アーバイン市にあります。アーバインは元々広大な農地だったところに、大学を中心として設計開発された都市であるため、非常に整っ



▲食堂の様子、いつも学生で賑わっていました

た景観をしています。町並みは整備されており、現地の人に聞いたところによると住居の外観や生活方式についてかなりの規制があるそうです。そのぶん、治安は申し分なく全米でもトップクラスに安全な場所ということでした。住居はキャンパスから離れたところに借りたため、車での通勤途中に色々と市や町を通りましたが、町並みの綺麗さと治安の良さは確実に比例しています。でも、そういう場所は、イコール家賃が高くなるということになるわけですが。

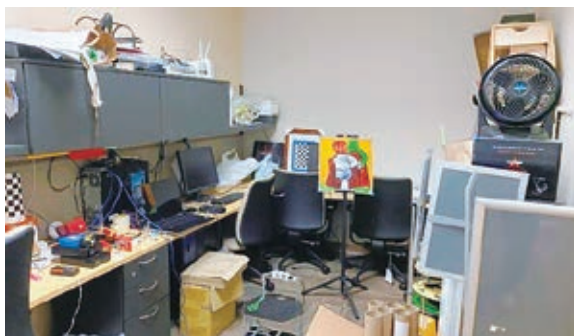
ところで、私がこのエリアに居住するのは、実は初めてではありません。博士課程の大学院生のときにアーバイン校に研究関係で滞在する機会がありました。当時の指導教員の紹介で数ヶ月間ほどお世話になったLin教授に、今回の海外留学においてもホストを引き受けて頂くことになったのです。今回の研究テーマは学生時代にやっていたものとは異なりますが、現在のテーマと近い内容をLin教授が行っていたため、改めてお世話になることになりました。当時の自分には思いもよらない縁があったということですね。20年近く前のことなので、まわりの環境のことはほとんど覚えていませんでしたが、そのときの経験や取得していたソーシャル・セキュリティナンバーが、今回の生活の立ち上げに役に立ったのは幸いでした。特に、今回は一人ではなく家族を連れての滞在であったので。

ホストのLin教授の都合により私がアメリカに入国したのは6月半ば、大学では試験が終わって夏季休暇の直前でした。休暇中は事務職員もしっかり休むので、慌てて事

務手続きをしに行きましたが、このときに印象に残ったのは、すべての手続きが電子化されていることでした。大学に在籍するにあたって必要な契約書などをタブレットで見せられ、タブレット上でサインをし、あとで電子メールで届くと。紙へのサインは一切しませんでした。住宅の賃貸契約や保険の契約、車の購入契約なども同じだったので、「さすがアメリカ、電子契約が進んでいる。手続きで窓口に並んだり、事務処理に時間がかかることはないんだな。」と思っていたのですが、これについては後日大きく裏切られました。

工学部棟に滞在スペースを与えられて、研究活動の準備をすることになりましたが、何でも自分でやる必要があるというのが新鮮でした。例えば、IDカードを作るにしてもブックセンターに足を運び写真を撮って作ってもらい、ネットワークに接続するためにアドレスの許可設定を自分で行う、駐車場を利用するにはポータルから申請してチケットを購入しに行く、など。これらの情報はすべてWebサイトに載っているので、スタッフも学生も自分で調べて自分で動くようです。自己責任の考え方が強いというのでしょうか、何でもかんでも資料を準備して教えてあげるやり方ではなかったです。

Lin教授の研究室の研究テーマは、サービスエンジニアリングの研究であり、IoT機器を用いたシステムの構築を目指すことを主としています。博士課程の学生を含む10名ほどの学生が所属しており、「ロボットの屋内定位値認識による自動制御」「運転者のパフォーマンス向上を目的としたエージェントシステム開発」などのプロジェクトに取り組んでいました。私自身の研究活動は、クエート大学か



▲研究室内、研究環境が雑然となるのは世界共通？

ら来た博士課程学生のMarafie氏ら数名の学生とともに行いました。このグループでは、運転者支援エージェントシステムの開発を目的としており、具体的には、①自動車の運転データをセンサから取得し運転者の特徴分析、②運転結果のスコア化とフィードバック、③Androidによるシステム実装という流れとなっていました。私は主として①の部分を担当し、これまでの研究で用いた自然言語処理手法を使った手法により、センサデータからイベントの文字化およびそれを単語列として、特徴分析を行うことを実施しました。実際にセンサデータを取得するために、車を運転して急ブレーキや急アクセルなどの挙動をさせることもしました。もちろん、公道ではなく、誰もいない駐車場です。ただ広い駐車場はたくさんあったので。

データ取得と分析の繰り返しと状況報告を兼ねたミーティングは、週1回のペースで実施することにしていました。修士の学生は講義などで忙しいらしく、主としてMarafie氏とコミュニケーションを取ることが多かったのですが、この場では学部生もしっかりとした意見を述べるのには、関心させられました。ただ、この週ミーティングも2月ごろからは新型コロナの影響でオンライン化されてしまい、学生達と最後に直接の挨拶ができなかったことが残念でした。本学でもそうなったように、試験や4月以降の講義もオンライン化されたようです。Lin教授とオンラインで話したときには、また日本で会いましょうと言われましたが、それが実現するのはいつになるのでしょうか。

カリフォルニアでの生活は、大変過ごしやすかったです。ただし、生活費(特に家賃)は高かったです。今回の滞在中では子供の通学環境のこともあり、アーバイン市ではなくトーランス市にアパートを借りました。2つのベッドルーム、2つのバスルームとリビングという、日本ではあまり馴染みのない間取りですが、家賃が高いためシェアをして住む人も多いようです。トーランスはロサンゼルス南にあり、多くの日本企業があるため、駐在の日本人や日系アメリカ人が多く住んでいます。日系のスーパーも多数あり、日本の食材も少々高いですが手に入れることができますし、日本料理の店も多くありました。治安もロサンゼルス圏という都市近郊にしては良く、さらにその南の高台にあ



▲高台からのトーランス市の眺望、まわりには高級住宅が並ぶ

る町は大きな邸宅が並ぶ有数の高級住宅街でした。気候は雨は降らない、夏はそれほど暑くない(湿度低い)、冬は暖かいと非常に恵まれています。滞在中の6月から11月まで雨が一滴も降らず、こんなに過ごしやすい夏は初めてでした。ただ、今年のように山火事が起きると大変になるようですね。

カリフォルニアで生活するには車が必須です。また、みんなが持っているためフリーウェイは朝晩が大渋滞となります。このため大学に行くときは、通勤の時間をずらすようにしていました。空いているときは30分なのに、混雑すると80分くらいかかることもザラでした。車といえば、以前の滞在中にとった運転免許の情報が残っていて、更新手続きだけで有効になったのはびっくりしました。20年も前に失効したものが、ちょっとの手続き後に仮の免許証を貰って、こんな適当でいいのかと。しかしながら、免許証の実物が届いたのは4ヶ月後というオチがつかしました。

ロサンゼルスという大都市圏には、日本でも有名なテーマパーク(ディズニーランドやユニバーサルスタジオ)、四大スポーツのスタジアム、博物館、美術館、動物園など多数の見所も多いです。旅行者か在住者かはわかり

ませんが、日本人も多く見かけました。最初に言ったように、多くの人種が生活していることもあるのか、少なくとも私の滞在中は人種差別や危険なことも感じませんでした。帰国後に起こったBLM運動をみると、潜在的にはあっ見えなかっただけかもしれませんが。

現在、アメリカは新型コロナウイルスで非常に深刻な状況のようです。帰国前の2月頃は全く話題になっていませんでした。3月の初め頃からアメリカ国内で感染者が始めると、すぐに広まり非常事態宣言が出され、連日ずっとニュースになっていたことを覚えています。レストランや公共施設が閉鎖され、それまでの生活と一変したことは、大きなショックでした。この原稿を書いている11月現在ではさらに感染が拡大し、現地でできた友人は「これからどうなるのだろう」とか「今後のことは神のみぞ知る」とか不安で一杯なようです。このパンデミックができる限り早く収束することを願うばかりです。



▲エンゼル・スタジアム・オブ・アナハイム、打席には大谷翔平選手

フランスで行われる主なイベント

国際学部 国際学科 田中 早弥

はじめに

今回フランスに約5ヵ月間、留学させていただきました。その中で学んだことや感じたことはたくさんありましたが、今回は私がいた10月～1月の間に行われた主なフランスのイベント、行事について紹介をさせていただきます。

ハロウィン

日本でも多くの人に知られているハロウィンというイベントですが、元々が西洋の文化であっただけあって、私のハロウィンのイメージは仮装やメイクをして楽しむ日くらの認識でした。イベント事が好きな自分にとっては、初めての海外でのハロウィンがとても楽しみでした。私のホームステイ先には10歳の妹さんがいます。妹さんから「今夜街にお菓子をもらいに行くけど一緒に行く？」との誘いがあったので私はその夜、妹さんとその友達数名と、親御さん達と一緒に街へお菓子をもらいに家を訪ねて回りました。

子供たちはインターホンを押すと「Des bonbons ou un sort !」と大きな声で叫びます。これは日本でいう「お

菓子をくれなきゃ悪戯するぞ!」という意味です。洋画などで海外のハロウィンの様子を見たことがありましたが、実際にこのイベントを正式な形で行った事がなかったので、街の方々が実際にはどのように対応をされるのかと少し緊張しました。

結果としては、大人も仮装をして子供たちを向かい入れる家、子供たち以外の保護者にもお菓子を配る家などとても親切に対応してくれる家がほとんどでした。ごくたまに「うちでは行っていない」と断る家や、はじめから家の前に張り紙を貼っている家がありました。しかし、それもお互いが快くこの日を迎える為の工夫に感じました。

初めて経験する海外でのハロウィンでしたが、地域の人たちと交流をするいい機会になりました。町の子供たちや大人にとっても、とてもいい地域交流行事だと感じました。

クリスマスツリー

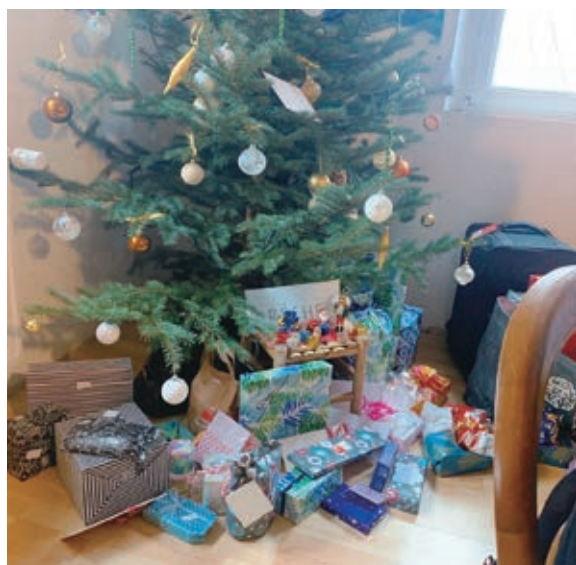
11月22日には、ストラスブールの街で一番大きなクリスマスツリーの点灯イベントがありました。会場にはたく



さんの人が集まっていました。今回のイベントのゲストとして、映画「アナと雪の女王」の代表曲「Let It Go」のフランス語版を歌っているアナイス・デルヴァさんと他3名の歌手の方が来ていました。クリスマスツリー点灯式と共に、町中に飾り付けられた飾りも点灯されました。

クリスマス

日本でクリスマスと言えば、恋人や友達と過ごす方が多いと思います。しかしフランスでは、家族や親せきと過ごすのが一般的です。私のホームステイ先でも親せきや近い友人などが集まってホームパーティーが行われました。私の幼い頃のクリスマスの思い出は、やはり25日の朝に起きて枕元を見るとサンタさんからプレゼントが置かれていたことが一番印象深く、それこそがクリスマスの醍醐味だと思っていたのでフランスの子供がどの様に過ごすのかとても気になりました。24日の夜は、家族や友人などが集まって美味しい料理を食べ、25日は親せきだけでお祝いをしました。25日の朝になるとクリスマスツリーの下はプレゼントでいっぱいになります。私もホストファミリーに用意したプレゼントを置きました。この家にはサンタの風習は無く、代わりに親せきの方から沢山のプレゼントをもらっていました。子供の気持ちを考えると少し現実的で物寂しい気もしますが、それよりも家族との思い出を大事にするフランスのクリスマスはそれ以上に幸せな空気で溢



れているように感じました。まるで洋画に出てくる様なクリスマスでとてもわくわくしました。

年越し

日本とフランスでは今8時間の時差があるため、家族や日本にいる知人との年明けのあいさつをした時、フランスはまだお昼の三時でした。1月1日になる瞬間、私は車でホストファザーとストラスブールへ移動している最中でした。年が明ける瞬間は車内になってしまいましたが、ストラスブールに着く道中で四方八方から花火が上がるのを見ることができました。フランスにはお正月の様な文化は無く、ホームパーティーをして騒ぐ人や、若者たちは外に出て花火や爆竹に火をつけるなど、のんびり過ごす日本の風習とは真逆の派手なお祝いの仕方が一般的なようです。日本では花火師の免許がないと打ち上げられない様な大きさの花火も一般の方が買って、自身で打ち上げることができるそうです。しかし事故なども毎年多数起こるようで、特に私が驚いたのは車を燃やす人がたくさんいるという事です。フランスでは年越しに車を燃やすというのが風習化しており、そのために毎年たくさんの方が逮捕されます。日本の文化との違いに驚きつつも、自分が今いる環境の新鮮さに楽しさも感じました。

ガレット・デ・ロワ

フランスでは1月6日にガレット・デ・ロワというケーキを食べます。地域やお店によって異なりますが中にアーモンドクリームの入ったものが一般的です。ケーキを家族で切り分けて一番年齢の低い人がテーブルの下に潜ってケーキの配当を決めます。ケーキの中にはフェーヴ(Fève)という陶器の小さなおもちゃが入っており、それを当てた人は王様(女王)になれます。そしてその日一日みんなから祝福されます。ガレット・デ・ロワとは諸王(3博士)のガレットという意味です。これは、キリストが誕生した時に「バルタザール」、「メルキオール」、「ガスパール」という3博士がキリストの誕生の祝福に乳香、没薬、黄金を贈ったとされる言い伝えがもとにされています。フランスではこれを食べないと一年が始まらないと言われるほど有



名な文化です。

まとめ

今回の留学を通して様々なイベントに触れ合う中で、異文化の違いを感じると共に、異文化の中でも変わらない共通した人間の優しさに出会うことが多くありました。ホストファミリーはもちろんですが、その親戚の方、地域の

方、街の方、様々な場面でその優しさを知りました。ごくまれに、街で差別的な事を言われることもありましたが、その度に自分の考えを強く持つことができました。それは、私がフランス人の中に色んな考えを持った人がいるという事を理解できる環境にあったからだと思います。留学期間は終了してしまいましたが、この事を忘れずに自身の将来へと生かしていきたいです。



私が感じた韓国

国際学部 国際学科 松田 ひなた

私の韓国留学が始まったのは2019年8月22日でした。タイミングが悪いと言うのか、この頃韓国と日本の政治情勢がとても悪化していて、留学前に両親や周りの人たちから本当に留学して大丈夫なのかと何度も心配されました。日本を出発していざ仁川国際空港に着くと、聖公会大学から私たちの生活をサポートしてくれる学生が待っていてくださり、異国の地で緊張している私たちをとて優しく出迎えてくれました。その学生が日本語を勉強していたため、初めて会った時からずっと日本語で話してくれました。そのおかげで早く打ち解けることができ、緊張していた気持ちも安心へと変わりました。韓国に来てから約一ヶ月程は、聖公会大学の学生証を発行したり外国人登録証の登録をしに行ったりなど済ませておかないといけない事が多く、その業務のほとんどがまだ韓国語が未熟な私にとっては不安であり緊張していました。しかし、サポートしてくれる学生のおかげで全てスムーズに終わらせる事ができました。

語学堂では10人以下の少人数で授業を受けました。日本から来た留学生が最も多く私を含め4人いました。他

の留学生たちはアジア圏からは台湾をはじめ、マレーシアやマカオ、そしてミャンマーから来た留学生たち、ヨーロッパ圏からはドイツ人の留学生もいました。初めて会った時は韓国語もうまく話せない上に私自身が人見知りということもあり、どう話しているのか分からず、ましてや外国人の方とコミュニケーションを取ったことがほとんどなかったため不安な気持ちと緊張でいっぱいでした。勇気を振り絞って話してみると、みんな優しくしっかりと私の話を聞いてくれて、楽しく会話することができました。授業では文法や単語を習うのはもちろん、その都度会話表現でよく使う言い方なども組み込んで教えてくださったため、実際に会話をする際はとても役に立ちました。また、授業内で韓国の文化について取り上げる時や自分の国を紹介する時は韓国の文化も学びながら様々な国から来た留学生たちの出身地の文化についてもたくさん学ぶことができ、異文化理解が深まりました。授業で一番楽しかったのは会話練習でした。実際に習った文法や単語を組み合わせる話すのは難しかったけれど、実際に話して使うことで自信にも繋がり、より理解し覚えることができました。



語学堂の授業を受けるのとは別に、聖公会大学の授業も二つ程度なら受講していいとの事だったので、韓国人の友達を作る為にも日本語を学ぶ授業を受けることにしました。その日本語の授業を受けている学生たちは日本語専攻でないにもかかわらずみんな日本語がとても上手く、韓国語がすぐ出てこない私の話もゆっくりと聞いてくれて、打ち解けやすかったです。韓国に来る前までは、韓国の学生たちは反日教育を受けていて、中には反日の人もいと聞いていましたが、実際に私がこの留学中に関わった人の中では誰一人として反日の人はいませんでした。

生活面において韓国に来て初めの頃一番しんどかったのは、お店などでのコミュニケーションでした。語学堂の先生や学校の友達と話す時はお互いゆっくり話したり簡単な韓国語で話していたため理解することができたので

すが、外に出て実際にお店などで店員さんと会話する時には話すスピードも速く、知らない単語ばかりで聞き取れないことが多かったです。その都度何度も聞き返したりその場の雰囲気でどういう意味なのかを理解しようとしていました。そうして何度も聞いていくうちに理解していき、今ではお店へ行った時もスムーズに会話ができるようになりました。韓国は市場が多く、ただ見学するだけでも楽しかったので友達とよくいろんな市場へ行きました。市場で働いている方はみんな親切で優しく、買い物しながら会話練習もできたのでとてもためになりました。

この語学留学を通して韓国語も上達しましたが、様々な文化や人々に触れて新しい知識や考え方を知り、人として成長できたと思います。また留学する前よりも自分に自信を持てるようになったので、留学して良かったと思いました。



フランス留学生生活を振り返って

国際学部 国際学科 金 侑蘭

今回、私はフランスで約5ヶ月間を過ごした。振り返って気づいたことや、向こうでの生活スタイル、ホストマザーとの関り、ボランティアに参加したことなどの出来事を少し紹介していく。

まず初めに、私が滞在していたホストファミリーについて紹介する。ホストマザーが借りているアパートの一室を間借りするという状況で、マザーと私、そして、フランス人2人、アメリカ人1人、(途中からアメリカ人が帰り、アメリカの大学に行っている日本人が来た)の5人で生活していた。食事はついていなかったので近くのスーパーマーケットで買い物をし、自炊をしていた。マザー以外みんな学生なのでそれぞれの時間があり一緒に過ごすということは少なく、いい意味で一人の時間があった。休日はマザーが企画してくれたお菓子作りをしたりすることが多かった。

次にストラスブルで参加していたボランティアについて少し紹介する。私が参加していたボランティアはアルザス補習校と言い、日本に繋がる子どもたちに日本語を教える補習校である。1986年に設立され、日本政府からの支援と児童生徒の保護者から成り立つアルザス日本語教育協会(APEJA: Association Pour l'Enseignement du Japonais en Alsace)により運営されている。対象児童は幼稚園児(3歳以上)~中学校3年生までで、2019年11月現在の生徒数は49名。教員は6名である。クラスは幼稚部、小中学部合わせて6クラスあり、子どもたちへの配慮からあえて学年を付けず組となっている。通っている子どもたちは日本国籍はもちろん、日仏や、両親がフランス人だが、日本生まれの日本育ちで日本語を忘れないために通っている、というような様々な理由で参加している。ストラスブルはドイツとの国境に位置するため、ドイツから通っている児童もいる。授業内容は日本語や日本文化を学んでおり、放課後には書道や季節の行事、日本の伝統文化を知る機会になる様々な活動が用意されている。留学前に去年ストラスブルに留学に行っていた先輩からこのボランティアのことを教えてもらい、日本語コースに所属していることもあって、参加した。私がサポートし

たクラスは小学3、4年生の教科書を使用しているが学年は日本の年齢で小学3年生から中学3年生までいた。教科書音読や、漢字テストで子どもたちに助けが必要な時にサポートをした。子どもたちの日本語能力は私が想像していたよりはるかに高かったが、日本人が多いパリと比べると低く課題だと補習校の教員は言っていた。放課後に用意されている行事にも参加する機会があった。私が参加したのは年始一発目の行事、書初めである。児童は自分たちで選んだ四字熟語を書いていた。私はこのボランティアに参加し、日本人の温かさをとても感じる事ができた。私自身やはり、知らない土地での生活で精神的に来てしまっていた時期があり、その時にボランティアに参加すると気が晴れとても有意義な時間を過ごす事ができた。日本からだいぶ離れたこの街で日本人と交流することができ、温かさに触れたのは私の中でも大きく、いい体験であった。

ストラスブルはドイツとの国境に位置し、EU加盟国であるため国の行き来がとてもスムーズである。ドイツのほうが食材が安かったりと、ストラスブルに住んでいる人はドイツに買い物に行くことが多いためか、2017年にストラスブルからドイツまでのトラムが開通し、とても便利に行くことができる。(下写真)ストラスブルとドイツの国境にライン川が流れており、そのライン川にかかる橋の一つに(Passerelle des deux rives)ミムラムの歩道橋という橋がある。橋の真ん中にはベンチがあり、両国を眺めることができる。ストラスブルはフランス領、ドイツ領を繰り返しており、戦争中ここにかかる橋が何回も壊さ



れたと考えるととても心が痛い。この橋を渡るとドイツ語が飛び交っているので不思議な感じがした。国境を歩いて越えることは滅多にできないため、いい体験であった。

そして私はストラスブールで衝撃的な再会をした。それは、私が小さいときに家にあった絵本の作家がこのストラスブール出身であったことだ。彼はTomí Ungerer トミーウングラーといい児童作家、イラストレーターである。昔好きでよく読んでいた絵本であったためとても覚えており、こんな形で再会するとは思ってもみなかった。彼は昨年2月に亡くなっており、ストラスブールで追悼セレモニーがあちこちで行われていたようだ。彼の美術館に何回も足を運び、絵本もたくさん買い、彼の作品をもっと好きになった出来事であった。幼少期の出来事がこの歳になっても生きてくるというのが驚いた。

この約5ヶ月間を振り返ると時間の流れがとても速かった。余裕がなく、嫌なことや辛いことにもぶつかった。マザーと意見が合わず悩んだこともあった。しかし、自分の時間がたくさんあったため、自分と向き合うことができ、自分はこの人間だと発見し、理解することができた。やはり、周りから聞く話と体験するのとはだいぶ違う。このストラスブールでの出来事全てがいい思い出、体験である。濃厚な5ヶ月間を過ごせたことに感謝である。



日本で味わえない非日常生活

国際学部 国際学科 脇本 優輝

私は、学校だけでなくどうしたら海外の人と知り合い、様々な国の異文化に触れることや英語の上達をできるかカナダに着いた初日から考えていました。そして私は、交流イベントと教会の2つの場所で会うことができました。1つ目の場所の交流イベントは、ネットやアプリを使い外国人が主催している無料の交流イベントを探しました。そして、私は人脈を広げるために、その外国人主催の無料交流イベントに学校が終わった後毎日参加しました。そこでは、様々な年齢の外国人や様々な国籍の人と知り合うことができました。例えば、サウジアラビア、エジプト、中国、カナダ、イタリア、メキシコなど、あらゆる国の人と話しました。また、英語でしか話し合うことしか出来ないのが最初の頃は理解するのが難しかったです。しかし、毎日参加し続けて徐々に理解できるようになりました。そして、話を聞いたり話していく内に国によって様々な国の独自の考え方やルールがあると感じました。さらに、実際にその国の人と話すことができ、私は交流イベントに毎日参加したおかげで英語の上達だけでなく、異文化理解に対する意識が変わり、異文化理解の能力も上がりました。そして次に、教会です。日本ではあまり馴染みのない文化ですが、海外では、教会が多くあり、多くの人教会の礼拝やイベントに参加しています。そして、教会だからといってイエスを信じなければならないという訳でもありません。海外の教会は様々な目的で来ている人がいます。例えば、色々な人と話したい、友達を作りたいなどでコミュニケーションや憩いの場として利用する人もいます。さらに、歌も歌うので歌を歌いに来る人もいます。そして、私が教会にいききっかけになったのは、ショッピングモールで勧誘されたことがきっかけです。私は、行くのは不安でしたが、挑戦したい気持ちがあり、教会に行ってみました。私は、多くの子供からお年寄りまでと様々な年齢の方と出会い、様々な価値観を共有し合い、異文化の理解が深まりました。私は、そこで、実際に行くことで教会のイメージが変わりました。そして、教会のメンバーは様々な場所へ私を連れて行ってくれました。例えば、バンクーバー美術館、

水族館、公園、様々な国の料理、ホームパーティー、空手の練習などです。さらに、様々な文化体験、友達の大切さなど多くのことを教会で知り合った友達から学ぶことができました。私は最も思い出に残った2つのエピソードがあります。

1つ目は、バンクーバーのダウンタウンにあるGranville Senior Centerでのボランティアです。私は、そこで多くのカナダ人と他国の人と会うことができ、会話は英語です。まず、最初にイスとテーブルを並べました。一個一個運んでいくので、運ぶときが大変でした。そして、他国の人との作業をしながら英語でコミュニケーションをとる難しさを知りました。その後、各担当に分かれて作業します。私はアイテムの売り場担当でした。そして、私の他に外国人の女の子がいました。そして、売り場のアイテムと客の動きを見ながら、一緒にいる外国人の女の子と英語でコミュニケーションをとり連携しあい、客の方からの質問になども気にしなければならぬ難しかったです。しかし、売り場にいる時に客と一緒に担当している外国人のみんなに色々な体験や話を聞くことができ、とても貴重な体験をすることができました。



2つ目は、交流イベントで知り合った黒人系の外国人とカナダ人とのエピソードです。友達とは、パブで知り合い、毎週参加して、話していく内に友達になりました。友達は、多くの日本のアニメや曲を知っており、日本語は話せないのですが、歌詞やアニメの言葉の日本語を知っている方

でした。そして、私は、日本のアニメや曲の意味を説明してと言われたときは難しかったです。しかし、友達は理解してくれました。そして、最初は、上手く説明できなかったのですが、最終日に近づくと説明できるようになりました。そして、帰国前にあった時は、私のためにお別れパーティーをしてくださいました。さらに、誕生日だったので私のためにバースデーソングを歌ってくださいました。別れ際にみんなでアニメのポーズをして写真を撮ったあとに、『日本に帰ってしまってもSNSで繋がることのできるから』と英語で友達に言われたときは、感動して涙がこぼれました。そして、私は友達の大切さ、異文化を理解しようとする姿勢の大切さを学び、かけがえのない友達ができました。

最後に、私が、四ヶ月で多くの外国人と出会い、様々な場所へ行き、多くの新発見をしたと感じ、英語の上達だけ

でなく異文化を学び理解することが大切だと感じ最も他国の文化を知り、異文化や料理や様々な国の人と繋がりたいと感じました。



留学記 STUDY ABROAD IN VANCOUVER

国際学部 国際学科 上杉 渉馬



10月20日、この日から私にとって非常に意味のあるおおよそ4か月間になった。初めての北米での生活でなおかつ初めての長期海外留学となった。すなわち、何もかもがゼロの状態がかつ不安を抱えてのスタートであった。しかし時間が経つにつれて人と触れ合う機会が増えるにつれて彼らがとてもオープンマインドで優しく、為すぐに打ち解けていき、非常に充実した時間を過ごせた。この留学記では以下の三点に焦点を当てていきたいと思う。社会的

相違点、風習、Langara collegeでの内容、これらを中心に語ろうと思う。ちなみに左段下の写真はdowntownの景色である。

では初めに社会的相違点から着目していきたい。北米と日本社会では電車に乗っている時特に大きな違いがあると感じた。乗車中に通話をするのは他の人にとって無礼な行為であるのか？日本だと失礼な態度にあたるが北米だと何気ない普通の風景である。また目の前に年寄りや子連れの子が現れたらすぐに声をかけて席を替わるのが北米では普通のことである。日本人もより周りを見て声をかける勇気が必要であると感じた。教育面ではどのような違いがあるのだろうか。まず高校で受ける授業について取り上げようとする。日本教育のメリットとしては数学のレベルがとても高いらしい。特にアジア全体的に数学はとても高度なものを我々は受けていることになる。カナダでは高校から必須でプログラミングを受けることになっている。すなわち彼らはすでにホームページを作成できるスキルを身に付けているということになる。大学ではどのような違いがあるのだろうか。大きな違いは入試システムであろう。日本では入学するのが大変で北米では卒業するのが大変である。すなわちキャリアを積む時期が高校までか大学生活で積むのかの違いがある。

次に風習である。詳しく言うとクリスマス、お正月についてである。日本では一般的にクリスマスはカップルと二人だけで過ごす。しかし北米ではたくさん友達を呼んで大勢でパーティーをするのが一般的である。次ページの写真はクリスマスシーズンのdowntownの様子である。カナダではクリスマスの時はお店も8割程閉店されて、日本ではお正月のような盛り上がりがある。では正月のバンクーバーではどのような習慣があるのだろうか。Polar Bear swimというEnglish Bayで寒中水泳を行うのが一つの習慣となっている。年初めに寒中水泳をすることで年内の無病息災を願う意味が込められている。特に今年2020年の元旦は珍しく晴天に恵まれてとても参加者が多く大変盛り上がった日となったようだ。



下の写真は今年のこのイベントの光景である。とても賑わった様子がこの写真で伝わると思う。音楽も盛大に鳴り響き出店も多く出店していて色んな人が楽しめていた。このイベントはただ海に飛び込むだけの部門と5km泳ぐ部門、2種類存在している。私は当然前者の部門に参加した。体験したことがないことだったので楽しめたのだが寒さ以上に痛さがかった貴重な体験なのだったので二度としないだろう。



最後に私がLangara collegeで受けた授業について語りたいと思う。私が受けていた内容はLEAPというものを受けていた。このプログラムは留学生のための英語のアカデミックスキルを身に付けるというものになる。具体的に言っていくとアカデミックなwritingやエッセイの書き方、listeningやreadingのスキルを養うものである。また各セッション二回プレゼンテーションを行うことになっている。毎日の授業で必ずディスカッションを行うことになってspeakingのスキルも当然伸ばすことができる。このLEAPのシステムは約10段階にレベル分けされていてそれを終えたら本コース、すなわち一般的なカレッジの専門コース、例えばコンピューターサイエンスや生物学、デザインなどを受けれるようになる。しかしLEAP5まで到達すると編入試験を受けることができそれをパスすると本コースへと移ることができる。英語を第二言語として話す者であれば非常に理想的な環境となっており、気が付いたら苦なく英語を話せるというカリキュラムだと私は感じた。またこの学校の先生たちはとても優秀でかつ友好的である為特別緊張することはなかった。

この留学記の最後としてこの留学を終えての感想を簡潔に伝えようとする。私はこの意味のある約4か月間のバンクーバーでの留学生活は非常に充実していて、非常に楽しめた。今後の人生にとって大きな転機となるであろう。色んな人と触れ合い様々なことを吸収し、また時には壁にぶつかり、日本ではなかなか味わえない時間であった。この経験を良い意味でいかせていきたいと思う。

大阪産業大学の学生としてのヴェルツブルク交換留学

人間環境学部 文化コミュニケーション学科 安田 彦太

1. 概要

この論文では、私の交換留学中の成り立ちと共に、この留学に置いての長所や短所について述べていく。そしてこの論文内では全てを正直に記述したいと思う。なぜなら、大阪産業大学の学生は交換留学生としてヴェルツブルクに行くことはあまりないからだ。十年前が最後の学生とお伺いしており、そして今年の私のような。ですから、この情報は次の学生にとって非常に重要だと考えている。

そして私はすでに長い間ドイツにいることに加え、この論文の原文はドイツ語で記述した物である。ドイツでは直接的で正直な表現が一般的である為、日本語特有の非直接的な表現方法はこの論文内では出来ないことをご理解していただければ幸いである。よって、この論文はドイツ語を原文としてドイツ語、英語、日本語で、それぞれを私の今の言語能力にて応じて書いていく。



2. 初期混乱

まず初めに言いたい事は、留学前はとても厳しい状況にあったという事である。何故なら、この留学についての全ての手続きを全て一人で行わなければいけなかったか

らである。というのも大阪産業大学、国際交流課のドイツ留学のシステムは全く機能していなかったからである。それにも関わらず当時の私の担当者は次の様に述べていた。“うちからの学生はもう十年間ほど誰も行っていないので、私はわかりません。自分でやってください。”

もうこれは冗談の様に聞こえるのだが実際にこのような事態が起っていた。更に、私が大阪産業大学によって選考されている時点で、ヴェルツブルク大学の入学期限日と学生寮の申し込み期限がもう過ぎてしまっているという酷さであった。よって私は勿論、住む家も無く、入学さえ出来ない状態であった。もうその当時の私には何も出来ない状況であった。この点は大阪産業大学からの学生としての短所であると言える。

だがしかし、私は無事にヴェルツブルクに来ることができた。それらの問題を解決してくれたのはトーマさんという方で、彼はヴェルツブルク大学の国際交流課のスタッフである。彼は、私に対して本当に親切で、本当に沢山の事



をしてくださった。本来なら期限が切れているはずの学生寮に部屋を見つけてくださり、更に入学許可書の発行までしてくれたのである。多分、ヴュルツブルク大学側に彼が口を聞いてくれたのだろう。もし彼がいなかったら、私はヴュルツブルク大学に留学することは間違いなく出来なかったと思う。

だから、私は彼に本当に感謝をしているし、彼のおかげでこの非常事態でさえも現在の私は、これも良い経験だとも言えるようまでになった。何故なら、この大阪産業大学の学生としての短所は結果的に、私の留学を唯一無二にしたからである。そして、これによって私自身も成長ができた。

この様な状態を今の私はいつも“bassd scho”（直訳：全て良い、もう適合した）と言う。これはフランケン地方の方言であり、私も一人の大阪人として（どうにかなったからもうええわ、次行こや）というポジティブな意味で私は日々この言葉をよく使っている。

しかし大阪産業大学の中で、この事件を認識してもらい、次の学生の為にも二度とこの様な事がない様にシステムが改善されることを私は願っている。



3. 学業と日常

ドイツに到着後からは、私は本当に素晴らしい環境を得る事ができた。というのも、可能な限りの行動をすべて行ったからである。例えば新しい友人を毎日のように作り、毎週ヤーパンスタムティッシュに通い、とにかく常にドイツ語でたくさん話すといった事である。その効果もあった



のか、本当に素晴らしい友達や教授達にたくさん出会う事が出来た。しかし到着後から三ヶ月目までは、ドイツ語を話すにあたり多くの問題があった。ドイツに着くまでの私は、ドイツ語を上手に話すことができると思っていた。なぜなら、私は常に大阪産業大学のドイツ語の試験では常に満点で合格していたからである。しかし今思えば、テストが簡単であっただけで、当時の私は間違った自信を持っていたと、今になって思う。

だが、私の間違いだらけのドイツ語にもかかわらず、私の友人は私に常に良く振る舞ってくれた。特に、私のタンデムパートナー（お互いに母国語を教え合うパートナーを意味する）であるアレックス（高校の教授）とデニース（スタムティッシュのメンバー）は、いつも私にとって親切であった。もし何か問題が起これば、私は彼らにいつでも相談する事が出来た。もちろん、会話は全てがドイツ語なので、こういう場面でも私はドイツ語を上達させる事が出来たと思う。

ヴュルツブルク大学のドイツ語の授業も本当に素晴らしい物であった。教授達は本当におしゃべり好きで、生徒達の為に分かりやすいドイツ語で話してしてくれる。だが、ヴュルツブルク大学にはそれほど多くのドイツ語の授業は無く、週に三日が最も多いと記憶している。なので、沢山話をしたい話好きの私としては、物足りなく感じる事もあった。私は外国語を学ぶにあたり、最も重要な事は細かいルールよりも、話す事だと考えている。なので、私は授業だけでなく、主に週に三〜四日、タンデムパートナーとドイツ語を話す時間を作った。それによって、この方言

(Frankisch)や実際に私達の年代の人が話す様な会話の方が、私は授業の様な完璧なドイツ語よりも得意である。そういう事もあってか、よく周りの人達に貴方はB2.1レベルでは無くもっと上であると褒められ、お仕事の誘いなどもされる事もある。

しかし、実際は方言や日常会話が飛び抜けているだけであり、読み書き、単語のポキャブラリー、文法、正しいドイツ語という面では、クラスメイトよりも少し劣っていると感じる事もある。何故なら、これらの事を机に向かって学習するのは正直、私は好きでは無いからである。しかし、これらは日本でも出来る学習方法であるし、とにかく話していれば時間はかかるが、徐々に良くなっていくと私は考えている。しかし、帰国後からは、上記の様な学習方法も試してみて、この弱点を少しでも克服して行きたいと思う。

そしてドイツでの日常は授業やタンデムを除いても、まだ沢山の自由な時間があったので、ドイツ語を学ぶ事以外にもたくさんの活動を行った。例えば、私は日本ではパーソナルトレーナーとしてアルバイトをしているので、ドイツでも毎日の様にジムに行き、他の会員さんと話したり、トレーニングを教えたりした。そして休暇時や週末には、よく旅行にも行った。この一年で私は、パリ、ロンドン、リバプール、マンチェスター、ブリュッセル、ナポリ、アマルフィ、ローマ、ミラノ、チューリッヒ、そしてドイツのほとんどの都市を訪問する事が出来た。



4. 最後に

ヴュルツブルクでの私の交換留学は、本当に素晴らしい物であったと言いたい。なので、多くの大阪産業大学の学生がこれからはヴュルツブルクに毎年の様に行き、ヴュルツブルク大学と大阪産業大学の関係を維持し続けられる事を私は強く願っている。

ヴュルツブルクは本当に美しい街であるし、街の人々も、本当に素晴らしい人が多い。なので、私はヴュルツブルクが、ヨーロッパで最もいい街であると毎日の様に言っている。その街のヴュルツブルク大学と私たち、大阪産業大学は協定校という関係を持っており、これは私たちの誇りになるべき物だと思う。



私自身のこれからは、今年から新しいプロジェクトを現地で出来た友人と共に開始する。そして、インターンシップの為に再び、ヴュルツブルクに戻って来るつもりだ。そして将来的には、日本とドイツでそれぞれ半年ずつの生活を視野にこれからは活動していく。

もしこの論文が将来のヴュルツブルクへの留学生に役に立てば幸いである。そして、これからも私はこのヴュルツブルク大学と大阪産業大学の関係についてお手伝いしていければと考えている。

この両大学と私の素晴らしい友人達に感謝。

Student exchange in Würzburg as a student at Osaka Sangyo University

Faculty: People and Environment Subject: Culture and Communication Genta Yasuda

1. Explanation of the report

In this report, I will talk about my student exchange with its advantages and disadvantages. I want to be completely honest, because students at Osaka Sangyo University (from now on I am going to write OSU) don't go to Würzburg as exchange students that often. The last student came ten years ago, then me. I think this information is very important for the next student. I've also been in Germany for a long time. In German you always express yourself directly and honestly.

Therefore it is unfortunately not possible to use indirect forms like in Japanese and I write in German, English and Japanese, the languages that I can speak.

2. Initial Chaos

First of all, I want to say that it was really difficult at first because I had to prepare everything on my own. That means the system of our university's international office didn't work well. The OSU employee said: "No students have gone to Würzburg for ten years, so I have no idea. Do everything yourself." That sounds funny, but it happened like that. That's why I not only didn't have an apartment, but also couldn't enroll because the registration deadline was already over when I was selected by OSU. That was a real problem for me. So I can say that I had the impression that I had real disadvantages as a student of OSU.

Still, I could safely come here. The solution was that an employee from the International Office in Würzburg named Thoma was just very kind

and helpful. He did a lot for me. He helped me find an apartment, enrolled me, etc. Without him I might not have been able to study in Würzburg. Therefore I thank him very much and can now also say that the bad problems are also good experiences because I have grown with them. So you can say everything "basd scho" (that means "everything is fine or okay" in Franconian). But I very much hope that the system will be improved by OSU.

3. My studies and everyday life

After the chaos, I came into a really good environment. I did as much as possible from the start. For example: Finding friends, going to the Japanese regulars' table (Japan Stammtisch) every week, always talking a lot and more. I was lucky enough to meet a lot of really nice friends and teachers, although of course I had some problems with my German until the third month.

At the beginning I thought that I could speak German well because I had always got about a hundred percent in all German exams at OSU. But this test was pretty easy, so I think I had a false confidence.

My friends showed a lot of understanding for my mistakes in German. Especially my tandem partners, called Alex and Denise, and of whom he is a high school teacher, were always nice and helpful. (Tandem means that we teach each other our mother tongue.) If something happened, I could always rely on them and of course we spoke in German, so my German has improved a lot. Actually there is not that much German class in Würzburg. Maybe three days a

week at most. But the lessons are really good because the teachers are really talkative and speak simple German for us. I think speaking is the most important issue when learning a foreign language. As a result, I talked to my tandem partners not only in class, but mostly three or four days a week. This was really good for me because I can now speak good German at level B2.1, as people confirm. But I still have a lot of problems writing or reading because I don't like learning vocabulary so much. But that can also be done in Japan, which is why I want to work on this weakness in Japan after my return.

In addition to learning German, I went to the gym almost every day because I was a personal trainer in Japan and still had a lot of time. I often traveled during semester vacations or at the weekend. This year I've been to Paris, London, Liverpool, Manchester, Brussels, Naples, Amalfi, Rome, Milan, Zurich and most cities in Germany.

4. Conclusion

In conclusion, I would like to say that my student exchange in Würzburg was really great. I also recommend it to other OSU students, of course, because Würzburg is really beautiful and the people are really nice. I mean that Würzburg is the best city in Europe. Our university also has relationships with the University of Würzburg. We can be proud of this. I hope that many OSU students go to Würzburg because we have to maintain the relationship between the University of Würzburg and OSU.

From this year I start a new project and I have the plan to come back to Würzburg for an internship.

If this paper is helpful for the future, I am very happy.

I thank both universities and my great friends.

Studentenaustausch in Würzburg als Student der Osaka Sangyo Universität

Fakultät: Menschen und Umwelt Fach: Kultur und Kommunikation Genta Yasuda

1. Erklärung des Berichtes

In diesem Bericht werde ich über meinem Studentenaustausch mit seinen Vor- und Nachteilen sprechen. Dabei will ich ganz ehrlich sein, denn Studenten der Osaka Sangyo Universität (von nun an schreibe ich OSU) gehen nicht so oft nach Würzburg als Austauschstudenten. Der letzte Student kam bereits vor zehn Jahren, dann ich. Ich glaube, dass diese Information sehr wichtig für den nächsten Studenten ist. Außerdem bin ich schon lange Zeit in Deutschland. Im Deutschen drückt man sich immer direkt und ehrlich aus.

Deswegen ist es leider nicht möglich, wie auf Japanisch indirekte Formen zu benutzen und ich schreibe auf Deutsch, Englisch und Japanisch, also in den Sprachen, die ich beherrsche.

2. Anfangschaos

Zuerst möchte ich sagen, dass es anfangs wirklich richtig schwer war, weil ich alleine alles vorbereiten musste. Das heißt, das System des Internationalen Büros unserer Uni funktionierte nicht gut. Die Mitarbeiterin von OSU sagte: „Schon zehn Jahre lang sind keine Studenten mehr nach Würzburg gegangen, deswegen habe ich keine Ahnung. Mach alles selbst.“

Das klingt witzig, ist aber genau so passiert. Deshalb hatte ich nicht nur keine Wohnung, sondern konnte mich auch nicht immatrikulieren, denn der Anmeldetermin war schon vorüber, als ich von der OSU ausgewählt wurde. Das war ein echtes Problem für mich.

Ich kann also sagen, dass ich den Eindruck hatte, als Student der OSU wirkliche Nachteile zu

haben.

Trotzdem konnte ich sicher hierher kommen. Die Lösung war, dass ein Mitarbeiter des Internationalen Büros von Würzburg namens Thoma einfach sehr nett war. Er hat für mich richtig viel getan. Er half mir eine Wohnung zu finden, mich zu immatrikulieren usw. Ohne ihn hätte ich vielleicht nicht in Würzburg studieren können.

Deshalb danke ich ihm sehr und kann jetzt auch sagen, dass die schlimmen Probleme auch gute Erfahrungen sind, weil ich daran gewachsen bin. Daher kann man sagen, alles „basd scho“ (das bedeutet „alles gut oder passt schon“ auf Fränkisch).

Aber ich hoffe sehr, dass das System von der OSU verbessert werden wird.

3. Mein Studium und Alltag

Nach dem Chaos kam ich in eine richtig gute Umgebung. Von Anfang an habe ich möglichst viel gemacht. Zum Beispiel: Freunde zu finden, jede Woche zum Japanstammtisch zu gehen, immer viel zu sprechen und noch mehr. Ich hatte das Glück, viele echt nette Freunde und Lehrer zu treffen, obwohl ich bis zum dritten Monat natürlich ein bisschen Probleme mit meinem Deutsch hatte.

Ich dachte am Anfang, dass ich schon gut Deutsch sprechen kann, weil ich in allen Deutschprüfungen an der OSU immer ungefähr hundert Prozent bekommen hatte. Aber diese Prüfungen waren recht einfach, deswegen hatte ich ein falsches Selbstvertrauen, glaube ich.

Meine Freunde zeigten viel Verständnis für

meine Fehler im Deutschen.

Besonders meine Tandempartner, die Alex und Denise heißen, und von denen er Lehrer am Gymnasium ist, waren immer nett und hilfsbereit. (Tandem bedeutet, dass wir uns einander unsere Muttersprache lehren.) Wenn etwas passierte, konnte ich mich immer auf sie verlassen und wir sprachen natürlich auf Deutsch, darum hat sich mein Deutsch sehr verbessert. Eigentlich gibt es nicht so viel Deutschunterricht in Würzburg, höchstens vielleicht drei Tage in der Woche. Aber der Unterricht ist richtig gut, denn die Lehrer sind echt gesprächig und sprechen für uns einfaches Deutsch. Ich denke, dass das Sprechen das wichtigste Thema ist, wenn man eine Fremdsprache lernt. Folglich habe ich nicht nur im Unterricht, sondern meistens drei oder vier Tage pro Woche mit meinen Tandempartnern geredet.

Das ist wunderbar für mich, weil ich jetzt gutes Deutsch auf dem Level B2.1 sprechen kann, wie mir die Leute bestätigen. Aber beim Schreiben oder Lesen habe ich noch Probleme, weil ich nicht so gern Wortschatz lerne. Aber das kann man in Japan auch machen, weshalb ich an dieser Schwäche in Japan nach meiner Rückkehr arbeiten möchte.

Außer Deutsch zu lernen, bin ich fast jeden Tag ins Fitnessstudio gegangen, weil ich in Japan

Personal Trainer bin und noch viel Zeit hatte. Im Urlaub oder am Wochenende bin ich oft gereist. In diesem Jahr war ich in Paris, London, Liverpool, Manchester, Brüssel, Neapel, Amalfi, Rom, Mailand, Zürich und in den meisten Städten in Deutschland.

4. Fazit

Abschließend würde ich gern sagen, dass mein Studentenaustausch in Würzburg wirklich toll war. Ich empfehle ihn natürlich auch anderen OSU-Studenten, denn Würzburg ist echt schön und die Leute sind richtig gut. Ich meine, dass Würzburg die beste Stadt in Europa ist. Außerdem hat unsere Uni Beziehungen mit der Universität Würzburg. Hierauf können wir stolz sein. Ich hoffe, dass viele OSU-Studenten nach Würzburg gehen, denn wir müssen die Beziehung zwischen der Universität Würzburg und OSU erhalten.

Ab diesem Jahr fange ich ein neues Projekt an und ich habe den Plan, für ein Praktikum nach Würzburg zurückzukommen.

Wenn dieser Bericht hilfreich für die Zukunft ist, freue ich mich sehr.

Ich danke beiden Universitäten und meinen tollen Freunden.

中国・上海での留学について

国際学部 国際学科 前田 崇太

私は今回の中国・上海外国語大学での留学で様々なことを学び、経験しました。

まず、中国に着いたばかりの頃は銀行口座の開設や食堂・図書館などで使うカードの作成、健康診断、ピザ申請に追われました。一回生の夏休みに参加した語学研修の時と違い、今回は寮生活で、食事も自分で自由に選択でき、掃除や洗濯などの身の周りのことを自分ですることになりました。中国に来たばかりの頃は「早く帰国したい……」という気持ちがありましたが、現地で知り合った色々な人に助けをもらいながら、様々な手続きをやりました。ルームメイトと話し合っ、部屋に必要な物を一緒に買いに行ったり、上海での生活に慣れるために、寮の周辺に何があるのかを知るために散策しました。その結果、大学での授業が始まる頃には、しっかりと周辺の環境を把握できるまでになっていました。

私のクラスには日本人学生は三人いましたが、海外からの学生がとても多かったです。韓国人、アメリカ人、ロシア人と、国名を挙げたらキリがないほどです。授業は先生が中国語の単語や文法の説明を英語、或いは簡単な中

国語で説明されるのですが、最初は理解するだけで精一杯でした。しかし隣の席になったロシア人の友達と毎日昼食の時に、積極的にその日に習った文法や単語を使って会話をすることで、だんだんと文法や単語を覚えることができました。一回生の頃は中国人の先生以外に外国人とコミュニケーションを取ることが基本的になかったので、彼らとのコミュニケーションがだんだんと楽しくなってきました。担任の先生主宰の食事会、韓国人のクラスメイト主宰の食事会、秋の湖州への日帰り旅行などのイベントなど、留学したての頃は「早く帰りたい!」と思っていましたが、楽しさがどんどん膨らみ、「帰りたくない!」という気持ちに変わっていきました。

上海では楽しいことばかりではなく、実は体調を崩したことがありました。中国の気候は日本と同じように寒暖差がはっきりとしていて、長袖を持ってこなかったこと、寒いにも関わらず半袖で過ごしていたことが原因で、去年の秋に風邪をひいてしまいました。大学内に病院があることを知らず、加入した保険会社の書類に目を通す気力がないほどの高熱でフラフラになりました。なんとか保険適用



外の病院を寮の近くに見つけ、そこに通院する日々を二週間ほど送りました。ちなみにその時の医療費は帰国してから、保険会社に連絡して返してもらいました。

最後に、中国でコロナウイルスが蔓延した時のことを書きます。私は、コロナウイルスが流行り出したことを日本のネットニュースで初めて知りました。それからは、寮から出る回数を極力減らし、朝、昼、夜の一回ずつコンビニに行き、食料を買っては部屋で食べ、大学からの帰国指示が出るまで、基本的に部屋に籠る生活が続いていました。帰国せざるを得なくなったことは非常に残念なことでしたが、二年前に夏期語学研修に参加した当時の自分と比較すると、話す力、聴く力の語学力だけでなく、自分自身の内面が大きく変化したと思います。私は内気な性格だったこともあり、日本人、中国人を問わず初対面の人と喋ること

ができませんでした。この語学研修が人生初めての海外旅行で、初めてコミュニケーションを取った時に、中国人の声の大きさに迫力を感じ、怖気付いてしまったこともあり、研修プログラムはとても楽しめたのですが、その3週間では語学力も、自分の内面もあまり成長させることができませんでした。今回の留学では前回の反省を活かし、上海で知り合った友達とその日習った単語や文法を使って会話をする、積極的に話しかけて食事に誘う、テストがない時は、去年行けなかった場所に出かける、単語を発音しながらノートに書く、テストの前はとにかく教科書の本文を音読するなどして有意義なものにしようと心がけました。その結果、半年だけでしたが、自分の内面と語学力を共に大きく成長させることができ、自分にとってとても有意義な留学になりました。



上海で過ごした時間

国際学部 国際学科 岡崎 樹生

私は、今回の上海留学が、とても実りのある濃い時間であったと思います。上海には1年生の夏の短期語学研修で一度行ったことがあるので、どういうところかはある程度理解はしていましたが、今回の留学は以前に行った時とは全く違う時間になりました。

今回の留学は1年という長い期間であり、はじめは戸惑いや、不安もありました。なぜなら、前に上海に行ったときは、中国語を話せる友達と常に行動を共にしていたので、買い物に行くとき、食事の時などは常に彼が助けてくれたからです。しかし、もし今回の留学に彼がいて、短期研修の時と同様に助けを求めていたとすると、私はなんの成長もせずに帰国していたと思います。

私は、サッカーが好きで、毎日のようにグラウンドに行っていました。そこには、中国人や、私のような留学生もたくさん来ていました。そこで私は彼らと仲良くなり、サッカーが終わってからは一緒に食事をしに行っていました。私は、積極的にコミュニケーションをとり、お互いの趣味や、留学について話し合いました。私の仲のいい友達はポーランド人で、上海にきて3年になるので、とても中国語が上手く、大学のことなどにも詳しくだったので、何かわからないことがあれば、彼に聞いていました。毎日グラウンドに行っているうちに、友達がたくさんでき、常に中国語を話す環境ができていました。たとえば、私の住んでいる宿舎には多くの留学生が住んでいるので、宿舎で友達と会ったときや、食堂で一緒にご飯を食べる時など、常に中国語を介して誰かとつながっている感じでした。そのような生活が続いているうちに日本語を話す機会が減ったことに私は気づきました。私は、これは留学において、とても重要なことだと思いました。なぜなら、私はそのような生活を続けているうちに、自分が意識せずに中国語を話せていることに気づき、知らず知らずのうちに中国語を聞き取れるようになっていました。もちろんそれは、しっかり授業に出席していたこともあるとは思いますが、それだけでは補えないものだと自覚しています。

宿舎には管理をしてくれるおばちゃんが3人いて、私は

その中の一人のおばちゃんと特に仲が良くなり、しょっちゅう話をしていました。するとそのおばちゃんが、「岡崎、まだ上海にきて1ヶ月しかたってないのに、中国語がすごくようになったね!」と、ほめてくれました。これもすべて、意識的に中国語を話す環境に身を置くようにしたからだと思います。そのおばちゃん曰く、授業が終わるとすぐに、自分の部屋に帰り、部屋から出てこない留学生が多いとのことでした。でも私は授業が終わって、昼食をとり、部屋に戻ってからは宿題に取り組み、3時からはグラウンドでサッカーをし、そのままみんなでご飯を食べに行くそんな生活でした。もちろん留学生で僕より勉強をしている人はたくさんいました。

しかし、私はこのような留学生活が、とても充実していて、実りのあるものだと思っています。

私は大学の活動にも積極的に参加しました。留学生の暗唱スピーチコンテストにクラスメイトと出場し、3位に入賞しました。そのなかでも一番印象に残っているのは留



学生のサッカーの大会です。なぜなら、仲の良い友達と同じチームでサッカーがしたいと誘ってくれたのです。私は初めての体験で気分がよく、日本人のメンバーは私一人で、他はみな違う国の人で構成されていたのがとても印象的でした。結果は惜しくも決勝戦で負けてしまい準優勝でしたが、我々のチームはさらに絆が深まりました。

このような、素晴らしい留学の機会を与えてくださった、先生方には感謝してもしきれません。今回、コロナウイルスの世界的な蔓延で半年で帰国せざるを得なかったことは非常に残念ですが、私が今以上に成長することで先生方に恩返しができると思っているので、これからも中国語の勉強に精進していきます。



私の韓国留学記

国際学部 国際学科 内藤 真穂

私は、2019年8月22日から2020年3月3日まで、韓国・ソウルにある、聖公会大学語学堂に留学していました。はじめは、やっと韓国にいけると、旅行気分でしたが、入学願書やビザを申請していくうちに旅行ではなく、元々興味があった韓国語を実際に現地で学ぶことが出来ると、意識が変わっていきました。初めてのビザ申請の手続きで分からないことが多かったのですが、一緒に行く友達と協力しながら申請をしたことも今となってはいい経験だったと思います。留学前は、留学してからのことが楽しみでしかなかったです。

実際に、8月22日に渡韓をし、最初の1週間程度は寄宿舎で必要なものを揃えるために買い物に出かけたり、携帯を韓国で使えるようにパタパタしていました。その時に、聖公会大学のチューターさんがいて、まだ、韓国語が分からず、右も左もわからない私にとっては、とても心強かったです。全部整った後は、友人とお出かけをし、ご飯を食べに行っていました。また、寄宿舎は3人部屋で、私は立教大学の学生2人と同室で、関西と関東ということもあり、仲良くなれるのか心配でしたが、今でも連絡を取って



いるくらい仲良くなることができました。

9月2日から語学堂の授業が始まり、日本人はもちろん、台湾やミャンマー、ドイツの友達もいて、まったく言語が異なる人たちと韓国語でコミュニケーションを取ることは、自分の韓国語の実力不足で、想像以上に難しかったです。最初は、どのように言葉をかけていいか分からずにいましたが、最後になるにつれて、段々と自然にコミュニケーションを取ることが出来るようになっていました。

授業以外にも、学校外の美術館に行ったりし、より違う国の友達とも仲良くなっていた気がします。

そして、私は11月1日から、高熱を出し、同室の友達に看病をしてもらっていました。10月31日に私の好きなアイドルグループから1人脱退してしまい、その事と、高熱が出たことで余計にしんどかったです。コンビニで買った薬や、日本から持って行った薬を飲みましたが、2、3日経っても熱が完全に下がることはなく、友達に付き添ってもらい、近くの総合病院で診てもらいました。最初は、扁桃炎だと診断され薬をもらい、様子を見ていましたが、次第に咳が出てくるようになり、もう1度同じ病院に行くと、肺炎だと診断されました。日本でも大きな病気にかかった事がなかったのと、親が近くにいない事で、しんどさと、不安がもの凄くありましたが、周りの日本人の友達のおかげで心強かったです。釜山に行く予定で、KTX(韓国の新幹線のような乗り物)や宿も押さえて準備していたので、凄く悔しかったです。完治後に、釜山の代わりに、仁川に行き、童話村とチャイナタウンで思い出を作りました。

1月には、日本にいる時は考えもしなかったのですが、韓国のコンサートに1人で行きました。全く1人で知っている人もいない状態で行ったので、緊張していましたが、スタッフの言っていることや、アイドルの言っていることが今まで以上に理解することができて、勉強とは無関係ですが、行って良かったと思っています。

2月は、日本に帰る友達がいたので、いっぱい遊びに行き、思い出を作りました。

遊ぶときは、大体、韓国人しかいないようなカフェを探

し、カフェに行ったり、おいしいものを食べに行ったり、服を買いに行ったりしました。

遊びに行くのも、最初は韓国語が合っているのか、実際に対韓国人に使うとなると、恥ずかしさがありました。慣れていくうちに、自信をもって、韓国語を発していました。

この留学で得たものは、違う言語の国で友達たちと助け合いながら生活をし、自分が興味を持っていた言語を、興味ではなく自分の力になるように自信を持てるようになった事です。

私は、コロナの影響で帰国命令が出て、本来行く予定だった1年ではなく、約7か月で帰国をしました。1年間の留学が半年で終わった事は、最初是不発だと思っていましたが、今ではまたいつか行ける時のために勉強をし、また不発ではなく、どこかで自分の力になっていると思います。

現在、完全に留学が打ち切られたわけではないので、残りの留学生生活を再開できる時に向けて、韓国語を継続して、勉強していこうと思います。



カナダ留学記

国際学部 国際学科 片岡 綾星

私は10月22日から3月22日までの5か月間、カナダ、ブリティッシュコロンビア州、バンクーバーにあるランガラカレッジに留学をしました。留学理由は、大学に提出した用紙には視野を広げたい、英語力の向上と書きましたが、本当の理由は、海外に長期で行きたいという憧れです。良いか悪いかは別とし、何でも思い立ったらすぐに行動という性格のため、留学者募集という大学のパンフレットを見てすぐに先生に申し込み、両親に相談をしました。大学と両親の了解を得て、私は日本人の割合が多くない、留学生向けプログラムのLEAPが厳しいということで有名なランガラカレッジに留学先を選びました。

まず、カナダに到着数日後に4つのセクション(Reading Listening Writing Speaking)のクラス分けテストを受けました。Leapは毎週20時間の授業×7週間で1セッションで、その7週間の中に、毎週2回の小テストと最後にFinal Assessmentがあります。その全てのスコア平均点が70%以上で次のセッションで1つ上のクラスに上がることができ、90%以上で2つ上のクラスまでスキップできるという制度です。このleapプログラムを受けて特に良かったと思う点は2つあります。1つ目は、先生と生徒の距離が近いこと、2つ目は毎週授業のテーマが違います。クラスの人数が基本15人程なので、先生と生徒の距離が近く、分からない事があればすぐに質問し、それに対して親身になって教えてくださります。もう1つは、毎週テーマが違うので、飽きることなく毎週新鮮な気持ちで受講できるという点です。テーマによっては、苦手な分野もありましたが、とても為になりました。私は3セッションの途中まで受講し、最初の2セッションは日本人が自分を合わせて2人しかいないクラスでした。3セッション目も3人だけで、とても運に恵まれたと思います。なぜ、そう思うかというと、授業ではスピーキングにあまり重点を置かれていないので、会話の時間があまり設けられません。なので、授業外でどれだけ英語を話す機会を作れるかが鍵でした。周りには、集団で来ていた他大学の生徒もたくさんいて、同じ日本人同士で固まっているのをよく見か

けました。私は、できる限り日本人と固まらないようにしていたため、リスニングとスピーキングは初めと比べると、凄く伸びたと思います。最初はうまく聞きとれないし話せませんでした。分からないことは分からないとはっきりと伝え、もう1度言ってもらったりしていました。そして、会話で一番大切だと思ったのは、文法や単語のミスを恐れないことです。伝わらなければ、ジェスチャーや意味が近い単語などを使ったりしていました。そして、もし間違っても自分が思っているほど、私の友達やホストファミリーは気にしていなかったです。勇気を出して話すことで、伸びるスピードは変わってくると思います。

留学生生活を充実させるには、友達やホストファミリーとの良好な関係性を築き上げることが大切です。ホストファミリーはとても暖かい家族でした。ハロウィンやクリスマスのイベントの際はホームパーティーにも参加させてもらい、外食にもよく一緒に行きました。本当に恵まれました。友達とは、図書館などで一緒に勉強したり、週末の休みはカレッジから電車で15分ほどのダウンタウンなどによ



く出かけたりもしました。バンクーバーは都会と自然が隣接しているので、とても生活しやすかったです。

最後に、留学は日本ではできない貴重な経験をすることができます。その中でも、特に行ってよかったなと思うのは、たくさんの繋がりが増えたことです。言語や文化の違

いがある中で生活をするのは、予想以上にストレスや疲労が溜まります。そういったときに、相談に乗ってくれたりする友達や先輩が、国境や世代を越えてできたことが1番留学をしてよかったと思いました。

この留学記が皆さんのお役に立てれば幸いです。



私のアメリカ留学について

国際学部 国際学科 小林 莉穂

今回、長年の夢だったアメリカ留学が実現しました。私は、大阪産業大学の協定大学であるワシントン州立ワッコム大学(Whatcom Community College)にて、派遣留学生として学ぶ機会をいただきました。

実際に留学が決まってからは、希望と不安が入り交じった複雑な気持ちになった時もありました。いざ出発当日になると不安が全部なくなり、『これから頑張るぞ!』という前向きな気持ちで溢れていました。もちろん、大切な家族や友達としばらく離れてしまうのはとても寂しかったです。でも飛行機に乗るしかありません。空港の搭乗ゲートには、すでにアメリカ・シアトル・タコマ空港へ向かう多くの人々が待っていました。機内に入り、携帯の電源はシャットダウン、いよいよ離陸です。離陸の瞬間は正直怖かったです。機内食がとても美味しく、映画も充実していて、とても快適なフライトでした。

そして夢だったアメリカへ到着しました。事前に先生が教えてくれた通りにバスに乗りました。バス停で初めてホストファミリーと対面した時、とても優しく接してくれて、これまでの緊張が和らぎました。ホストファミリーの家に着いた瞬間、私はとても驚きました。映画に出てくるような、とても大きな家だったのです。「これからここで生活するのだな」と考えると、とてもワクワクしました。

現地での留学生活も始まり、大学でも友達ができて、ホストファミリーとも順調に過ごせていました。しかし、ホストファミリーや、ルームメイトたちとの文化の違いが少しずつ見えてきました。例えば、ホストファミリーの家は湖の近くだったということもあるせいか、水道水をとても節約していました。日本人は長風呂が好きだとか、水道代がそこまで高くないということもあり、水道水の使用についてあまり気にしないと思いますが、私のホストファミリーは水をとても大事に使っていたので、シャワーの時間も5分ぐらいで終わるそうです。家の決まりで、「シャワーの時間は10分まで」となっていたため、私なりに努力しましたが、とても難しかったです。このことは、私が現地で文化の違

いに直面した最も大きな出来事でした。

次に、ワッコム大学での学生生活についてです。私は、ワッコムの授業で、リーディング、ライティング、スピーキング、文法の4つの授業を受けていました。私のクラスには、スイス人と韓国人とカザフスタン人の友達がいる、日本人は私一人でした。もちろん英語漬けの日々でした。私のクラスメイトは、英語が母国語ではないので、何事も英語で必死に伝え合っていました。なかでもスイス人の女の子ととても仲良くなり、授業だけでなくランチなどの時間も一緒に過ごしました。英語で話さないと通じないので、お互い頑張って伝わりやすいように文章を考えて、拙い英語で頑張っていました。英語を母国語としない友達とずっと一緒にいることで、英語でのコミュニケーション力が向上したと思いますし、とても思い出深い時間です。

学校生活以外でも様々な経験をしました。たくさんの外国人の友達ができ、一緒に買い物に行ったり、ツアーで観光したり、時にはメキシコ人の女の子がメキシコ料理の美味しいレストランに連れて行ってくれました。

ホストファミリーとは、一緒に映画やドラマを見て、楽しい時間を過ごすことができました。ホストファミリーは日本に興味があったので、一緒に日本のドラマなどを見て、日本のことについて教えたりもしました。夕食が終わって、みんなでテレビを見ている時に、お決まりのことがありました。それはアイスクリームを食べることです。ホストファミリーが毎日「アイス食べる?」と聞いてきてくれて、甘えて毎日食べていました。とても幸せで、ゆったりとした時間を過ごすことができました。

このように、海外の友達がたくさんできたこと、現地で英語を学び、英語漬けの日々を送ったこと、文化の違いを実感し、たまにホームシックになったこと、幸せだなと感じたこと、全てが私の宝物であり、とてもいい経験ができました。夢だったアメリカ留学ができて、本当に良かったです。これからもさらに英語力を伸ばして、将来につなげていきたいと考えています。

留学時の写真



▲ファミリーとの写真



▲ホストファミリーの家から見える綺麗な湖

春期留学

国際学部 国際学科 乾 斗偉

予定より早めの帰国となったが、この1か月はとても充実した留学となった。自身の英語能力の向上は間違いないかと思う。渡航初日は時差で疲れると思ったがあまり時差は感じず疲れはなかった。しかし、みんなでホストファミリーの迎えを待つときは今までに感じたことのない緊張感だった。楽しみと緊張が混ざった何とも言えない感じだった。自分の迎えが来たときに頑張って握手をしながら自分の自己紹介を簡単にした。ホストファミリーも答えてくれて、「疲れてる？」など少しだけ会話をした。家に帰ってから家の説明を聞いた。それが最初の関門だった。普段から授業で聞いている英語より聞き取りにくく何回も聞き直してしまった。それでもホストファミリーは嫌な顔を一つせずにゆっくり喋りなおしてくれた。学校の行き方も最初は不安だったが、バス停についたときに男性が一人いたので勇気を出してこのバス停でありますかと聞いた。通じるのか不安だったが通じていて達成感が感じられた。学校初日はテストだった。意外と出来が良くて自分が思っているクラスよりかなり上だった。ついていけるか不安だったが、先生の英語はとても聞き取りやすくすぐに不安は消えた。授業で学んだことは主に英語の4技能だった。

でも私はそれ以外に学んだことがあった。向こうの学生は日本の学生と違って恥ずかしがらずにわからないところはすぐに先生に質問したり友達に聞いたりする。これは授業が始まってから真似しようと思った。授業中も休み時間も頑張って他国の人とコミュニケーションをとるように努力した。毎日バス通学だったが、途中から毎日同じバスに乗るアメリカでできた友達と英語を使って会話をした。学校まで20分ぐらいかかるが、喋るのと聞き取るのに必死で5分ぐらいに感じた。家ではご飯の時間がとても早くたまに一人で食べていた。アメリカのご飯は想像していた通り、とても油がこく、スナックなどはとても甘かった。家でハンバーガーを2回作ったがとてもおいしかった。アメリカの料理は日本人の口に意外と合うと思った。食べ物はあまり困らなかった。ご飯を食べた後は毎日のように一緒に映画やドラマを見た。字幕なしで見ている最初は全然わからなかった。でも見ているうちに、2週間ぐらいたったあたりから何となくわかったりして、一緒に笑ったりできるようになった。ホストファミリーと話していく内に自分でも実感できるぐらいに成長できた。実際にホストファミリーにも成長しているといわれた。学校が休みの日は毎日のように出かけ



ていた。ダウンタウンやショッピングモール、シアトルのアウトレットにも連れて行ってくれた。ダウンタウンでは、おいしいハンバーガー屋さんに行ったり、ゲームセンターに行ったりした。ゲームセンターは海外ドラマで見たことのあるゲームがあり、実際にやってみるととても楽しかった。ショッピングモールは意外と安いものがたくさんあり、いい買い物ができる。シアトルのアウトレットはベリンハムのアウトレットとは比べ物にならないくらい大きく、いろんな店があった。バンクーバーも街並みがとても綺麗でいたるところにペイントがされていた。ベリンハムも最初の観光

のやつで先生方に運転してもらってたくさんの観光名所に行ってきた。ベリンハムは、カナダやシアトルと違ってとても自然が多く、運転しているときでも普通にシカが出てきたりした。山の上からの景色がとても綺麗だった。最後に、コロナウイルスで期間は少し縮んだがとてもいい経験ができたと思う。また機会があったら、必ずリベンジをして、もっといい経験ができるように今回学んだことを生かしたい。この留学でお世話になった方々への感謝を忘れずにこれから努力を惜しまず頑張っていきたい。



可能性

国際学部 国際学科 三田 羽亜人

この春、私はワッコムコミュニティカレッジにて人生初となる留学に挑戦しました。当初は、自らの言語能力による不安や新しい環境による緊張などで頭が一杯でした。その不安を払拭する為、日々の語学学習に励みました。それも相俟って毎日の学校生活やホームステイでの日常は非常に充実していました。その為、様々な側面から私が印象に残っている事柄を紹介していきたいと思います。

まず、勉強面で印象深いのがReadingクラスの授業です。私は幸いなことにReadingのクラスにおいて一番上のグレードのクラスに配属されたのですが、そのクラスには長期留学している中国人留学生や日本人留学生しかおらず最初の授業でレベルの違いを痛感しました。そんな中で私は他の学生に早く追いつき追い越せるよう、担当の先生のオフィスに足繫く通い質問をしました。しかし、先生に分からない箇所を説明するのも全てが英語である為、そこでも言語の壁に直面しました。そうしているうちに、何とか授業に付いていくことが出来るようになり、いつしかクラスメイト達と気軽にコミュニケーションを取ることが出来るようになりました。全ての授業において言えることではありますが、ワッコムの先生は全員がフランクで私が理解するまで懇切丁寧に説明してくださいました。特に私の担当のReadingの先生は私の片言の英語を出来



る限り理解しようとしてくださり、先生の説明を聞いて私が理解出来なくても何度も愛想尽かさず指導してくださいました。また私が帰国する為ご挨拶に伺った際は、涙を流して別れを惜しんでくださいました。勉強面において、私は毎日の充実した日々を過ごしつつ多くの知識を獲得することが出来ました。

次に文化面について述べたいと思います。文化面については、日々の生活の中に多くの発見がありました。その中でも最も印象的なのがコミュニケーション方法です。私が留学中に総じて感じたことではありますが、現地の方達はコミュニケーションを取ることに非常に積極的であるということです。私はかつて人と会話をすることが苦手で自分が考えていることに自信を持たずコミュニケーションに関して消極的でした。しかし、ホストファミリーや大学の先生、友達には自らが感じたことを素直に主張し私の意見を聞き入れ許容してくれた事から私は過去の自分と比較し自らの考えを主張することの大切さを改めて知りました。また、自らの考えを覆い隠さず主張することは自分の可能性を大幅に広げることを知りました。というのも、ワッコムには私のような留学生だけでなく実際に物理学や化学などの様々な研究分野の勉強に取り組んでいる学生が多く在籍しています。そして彼らの中には17、18歳という日本で高校生の年代にあたる学生もいました。そんな彼らは自らの意見に純粋で真っ直ぐな考えを持ち、可能性を開拓するように日々を過ごしていました。そんな彼らの姿を見ていると努力次第でどんな自分にもなれることが出来るということに気づかされました。日本に帰国した今、「将来、どのような自分になりたいか。」「今の自分に何が出来るか。」というのを考えさせられるようになりました。それに気づくのが遅かっただけなのかもしれませんが、この留学という機会を通してその事に気付けたのは私の人生の中で非常に有益であったと感じています。まずは自分の意見に自信と責任を持ち、それを分かりやすく人に伝えることが出来るような人間になりたいと思います。そうなることが出来たら、今回の留学に意義があったと改

めて感じる事が出来ると思います。

1か月という短い期間でしたが、多くの知識と経験、感性を身に付けることが出来た非常に有意義な時間であったと思います。この経験は将来、私が社会に出た際に、私の中で大きな要で1つの指標として役立つことと思います。

このような経験が出来たのは留学を了承してくれた両親、様々な手続きをして頂いた大学の方々、そしてワッコム先生方のおかげです。この経験を活かして残りの大学生活を過ごしていきたいと思っています。



春期英語中期留学

デザイン工学部 環境理工学科 下岡 夏子

今回の春期英語中期留学での私の目的はより実践的な英語に触れるということはもちろんだが、アメリカの文化を体験する、国際感覚を身につける、大学生ならではの長期での休みを有意義に過ごすといった目的があった。

語学については最も多く課題点が残ったように思う。現地での英語は今まで学んできた英語とは視点も頻出の語彙も大きく異なっているものであり、リスニング力の重大さを実感した。私はリスニングが苦手だったため、ホストファミリーとの会話や授業ではとても苦労した。もちろんスピーキングについても同じことが言えるが、現地の方は時間がかかったとしても、親身に応答し私の拙い英語も理解して下さった。英語を話す、聞く上で自分の知らない又はすぐには思い出せない単語や語彙があることはもちろんだが、日本語とは品詞の順番が違うため即座に文を組み立てることがとても難しいと感じた。

また、日本で流通している表現と同じ表現が英語圏には無かったり、各言葉の意味をそのまま翻訳しても現地と同じニュアンスでは理解できない、されないことがあり、難しいと感じるとともに第二言語を勉強する際の面白さや興味深さを知った。

また、日本とアメリカでは必要もしくは不必要な言葉や表現が違うため、それも勉強になると同時にお互いの国民性の違いを感じた。

授業については国籍の違う生徒とも交流することができ、とても新鮮だった。

勉強というよりは、実践的な英語を学ぶためのグループワークなどが多く、難しいと感じる場面も多々あったが、楽しく授業を受けることが出来た。

自分自身で知識を身につけるのは勿論のこと、日々恐れずに英語を使う人々と接することが英会話を習得する上で最も重要だと感じた。

ホームステイについて、私が留学する際に1番心配があった点は国籍や言語の違う家族の家にホームステイをすることだった。

最初はホストファミリーときちんとコミュニケーションをとれるかどうか、仲良くなれるかどうか不安が大きかったが、時間を割いてコミュニケーションを取って下さり、会話の内容も少しずつ広げていけるようになった。

私のホストファミリーは2人の姉妹がおり、まだ小学生の子どもたちだったので、大人の方よりコミュニケーションが難しく、最初は親しくなることが出来なかった。

休日になると家族でいつも出かける場所へ私も連れて行って下さり、楽しくそしてアメリカの文化や様々な場所を体験することが出来た。

お互いの国の行事を紹介しあったりもして、とても興味深かった。



3月2日の夜になると用意していた簡易的な雛人形を短い紹介とともにプレゼントしたことがあり、思いのほか家族が喜んでくれ、子どもたちとの仲が一気に深まったと感じたという出来事があった。



このような感動的な体験も留学ならではの出来事だったと思う。

ホストファザーが手持ちの銃を見せてくれたことがあった。私は日常的に銃が側にあるのは怖いと思ったが、私が日本では一般の人は銃を持たないと言うとファザーはそれを怖いと言った。私は日本とアメリカの価値観の違いをここで最も感じた。

私はアメリカに来ればアメリカの文化だけを体感する

ものだとばかり思っていたが、実際には今まで意識することが無かった日本の文化や国民性についても考えることが出来た。

食生活などはそれらが顕著に表れていて、日本人の食に対するこだわりを垣間見ることが出来た。

現地の人はとても親切で、気さくな方が多く、初対面の方とも仲良くなれたり、困ったことがあれば親身になって手助けをしてくださった。

初対面の人と握手やハグをする文化も抵抗はなく嬉しく思った。

アメリカも日本も良い点悪い点を挙げればキリが無いが、どちらかが絶対に良いというわけではなく、それぞれその国にあったニーズで人や経済が回っているということをお身に経験することが出来た。

コロナウイルスの影響による早期帰国で名残惜しい点は多々あるが、短期だからこそ毎日が新しい発見の連続で、充実した1ヶ月を過ごすことが出来たと思う。

最終日の夜はホストファミリー全員が私にお別れの言葉を伝える時間を設けて下さり、良い思い出のままアメリカを立つことが出来た。

この1ヶ月の間で感じたこと、学んだ事を生かし学校生活や英語の勉強に活かしていきたい。



学術研究書出版助成本の概要

学術研究書出版助成本の概要

Financial Aid for Publishing



令和2年度 写真・イラストコンテスト(写真部門) 応募作品
『テントの灯り』
細井 皓介(工学部 都市創造工学科)

『米中経済戦争と東アジア経済 —中国の「一带一路」と米国の対応、そのアジア各国・日本への影響は—』の概要

経済学部 経済学科 教授 福井 清一

本書は、大阪産業大学・経済学部のアジア共同体研究センターが主催した国際シンポジウム『米中経済戦争の行方と東アジア経済への影響』における成果を、その際の議論を踏まえて拡張したものである。米中経済戦争が日本をはじめアジア諸国に与える影響について予測するとともに、今後の国際経済秩序の在り方について、様々な当事国の視点から考察している。

これまで米国主導で推進され、世界経済の成長を後押ししてきた自由主義的国際経済秩序は、コロナ以前から、米中による追加関税の賦課、ハイテク技術や製品の輸出規制など、米国主導の保護主義化、分断化により揺らぎ始めていた。コロナ禍は、それへの対応策としての、国際的な人・物の移動制限、各国による自国産業の保護政策、民間企業によるリスク対応としての国内回帰などを通じて、少なくとも短期的には、保護主義化、分断化を一層強める可能性がある。

コロナ禍が保護主義化の潮流に加えて米中分離(decoupling)を加速化させるなら、これまで経済成長を支えてきたグローバル化の潮流を逆流させることになり、新型コロナウイルスの感染拡大を克服した後の世界経済を立て直すためのシナリオを描くのも困難となるであろう。グローバル化が多くの課題を抱えていることは事実であるが、保護主義化、ブロック化により世界経済の停滞を招くというシナリオは是が非でも避けねばならない。コロナ後の世界経済の発展を後押しする上では、グローバル化の問題点を克服しつつ経済活動の活性化を推進してゆくことができるかが鍵となる。

本書の直接的な目的は、米中経済戦争とそれを取り巻くアジア各国への影響、および、今後の対応策について考察することにあるが、これらを理解しておくことは、コロナ後の米中経済戦争、ひいては、世界の経済体制、世界経済の行方を占ううえで避けて通れない作業である。

米国第一主義を掲げるトランプ大統領は、一連の米国第一主義にもとづく通商政策を実行した。そしてその後、膨大な貿易赤字を生み出している中国からの輸入品に対

する高率関税の賦課を決断したことが、米中貿易戦争の発端となった。

米国による中国への追加関税措置をはじめとする貿易制限措置とこれに対する中国の対抗措置による経済的影響が、米中双方から相手方への輸出が減少するばかりでなく、両国と経済的関係の密接な国々（韓国、台湾、東南アジア諸国）への影響も大きい。

とくに、グローバル・バリューチェーン(GVC)が進展し、これまで中国を中心に構築してきた地域の生産ネットワークをさらに拡大することによって経済成長を推進したい中国以外の東アジア諸国にとっても影響は小さくない。日本、韓国、タイ国など産業構造の高度化が進み中国中心のGVCに組み込まれた東アジア諸国にとって、米中貿易戦争による中国経済、世界経済へのマイナス効果は逆風となる一方、米国向け輸出への依存率が高いベトナムなどの東南アジア後発国にとっては、米国による関税賦課により打撃を受ける中国からの生産移管が起き、むしろ追い風となる可能性がある。

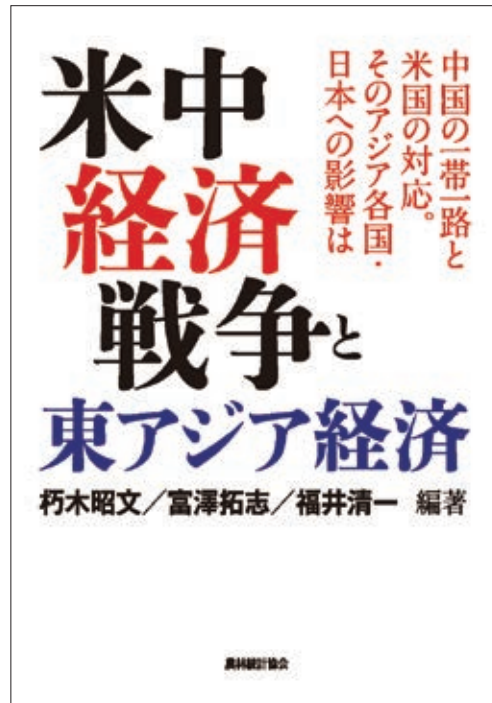
さらに米中貿易戦争は、米国による最先端技術分野における優位性の維持と国家安全保障を目的とした対米投資、対米輸出管理の規制強化を実施するなど、技術覇権の争いも含んだ経済戦争にまで発展している。この規制強化は、米国発の最先端技術を用いた生産活動を行おうとしている日系企業にとって、中国企業と連携した対中輸出や対中技術移転を困難にするという極めて深刻な問題を引き起こす可能性がある。

東アジア諸国が、貿易と投資の自由化を梃子に、さらに経済を発展させようとする中で、米中経済戦争が、貿易・投資の自由化の進展により構築された国際経済秩序、ひいては、各国経済にどのような影響を及ぼすのかを理解しておくことは、コロナ後の東アジア経済を占ううえで重要である。

本書は、米中経済戦争の背景と経緯、中国から見た米中戦争、中国以外の東アジア諸国への影響と対応、およ

び、日本への影響と対策に関する4部、13章と最後のエピローグによって構成される。本書の章別タイトルと執筆者は以下のとおりである。

第一部 米中経済戦争—その経緯		
第1章	米国における米中経済戦争の背景と今後の行方	三浦秀之
第2章	米中貿易摩擦の経済的背景と経緯	李基東
第二部 中国の産業政策と米中経済戦争の影響		
第3章	中所得国の畏と産業政策	朽木昭文
第4章	米中経済戦争下の「中国製造2025」と一帯一路構想	鄭海東
第5章	中国の投融資体制と対BRI(一帯一路)直接投資	門闖
第三部 東アジア諸国への影響と対応		
第6章	米中貿易紛争が韓国経済に及ぼす影響と政策対応	李基東
第7章	米中貿易摩擦2019—タイ国への動的的影響と戦略—	キティ・リムスクル(福井訳)
第8章	ベトナムにとっての米中貿易戦争	池部亮
第9章	中国からベトナムへの生産移管の必要な条件	ドゥ・マ・ホン
第四部 日本への影響と対応		
第10章	米中経済戦争による日本経済への影響と対応	福井清一
第11章	5Gにおける米中経済戦争と日本の選択	古谷真介
第12章	米中経済戦争とアジアにおける地域経済統合の行方	福井清一
第12章	補論 RCEP交渉の行方とインド	
第13章	日本が辿るべき進路：「産業集積の移転」と「グローバル・バリューチェーンの形成」	朽木昭文
エピローグ		韓福相



内容を簡単に説明しておく。まず、第1部で、米中経済戦争が勃発した背景、米国のトランプ大統領がなぜ米国第一主義を掲げ中国に対する制裁にまで至ることになったのか、その経緯について、政治学的視点(第1章)、および、経済学的視点(第2章)から解説する。次に、第2部では、中国による『製造2025』『一帯一路構想』などの経済発展戦略(産業政策)の重要性(第3章)、これらの戦略と米国による対中制裁との関連、および、将来の展望(第4章)、そして、一帯一路構想と、直接投資に必要な投資資金の国内供給体制について解説する(第5章)。また、米中経済戦争は、米中当事国だけではなく、東アジア諸国にも多大な影響を及ぼしつつある。第3部では、自由主義的国際経済秩序の下で築き上げられてきたグローバル・バリューチェーン(GVC)の一端を担い利益を享受してきた東アジア各国(韓国、タイ国、ベトナム)が、その影響に対して、どのような対応策を講じようとしているのかについても説明する(韓国は第6章、タイ国は第7章、ベトナムは第8章、第9章)。最後の第4部では、米中経済戦争が日本経済におよぼす影響について既存の文献等による予測をもとに概観(第10章)し、米中経済戦争が最も先鋭化さ

れた形で表れている先端情報通信技術の覇権争いについて解説した後(第11章)、日本が今後辿るべき道について、アジア諸国との国際協調、米国による投資、輸出規制への対応(第12章)、および、中国との連携の模索(第13章)という視点から検討する。最後のエピローグでは、コロナ後の世界における国際協調の重要性について述べられる。

以上が、本書の概要であるが、先に述べたように、世界はコロナ後の世界に目を向け始めている。本書が、コロナ後の世界経済を考えるうえで、少しでも社会に貢献できれば、学術出版助成金を提供していただいた大阪産業大学・学会のご厚意に多少とでも報いることができるものと考えている。

『森を変えるカワウ—森林をめぐる鳥と人の環境史』の概要

デザイン工学部 環境理工学科 教授 前迫 ゆり

本書『森を変えるカワウ—森林をめぐる鳥と人の環境史』は、日本に広域的に分布するカワウが森林と地域に与えるさまざまな複合的課題について、鳥類学、植生学、民俗学、社会学の異なる4つの学術分野から紐解き、現代的課題に応える専門書である。専門書ではあるが、研究者、大学院生、大学生、行政、一般市民に興味をもって読んでいただくことをめざしている。

カワウは、湖沼や河川で魚を食べ、森林で集団繁殖する水鳥である。シカやイノシシなどと同様、近年急激に増加し、アユの捕食や森林衰退などを引き起こす厄介な動物として認識されている。しかしその一方で、日本の在来種である本種は、昔から人との関わりの深い鳥でもあった。特に、カワウと森と周辺住民の間には密接な相互関係があった。本書では、「鳥を利用するための人々の森林管理」「鳥による森林生態系」の変化、「信仰の場としての森における鳥と人との関係」について、具体的な事例をもとに論考する。

鳥を利用する伝統的な森林管理の事例として愛知県の鶺鴒の山を紹介する。カワウ等魚食性鳥類の肥料としての「糞」の採取と利用は、地元でのローカルな利用として列島各地に見られる。鶺鴒の山では、森にカワウが居ついてもらうための森林管理技術を発達させた。ムラに恵みをもたらしていたカワウは、糞採取終了後も地元の人々にとっては身近な存在であり、町のシンボルという認識がある。

地元の人々にとって「信仰の場」である寺や神社の森でのカワウと人との関わりについては、滋賀県の竹生島を取りあげる。ここでは、少なくとも江戸時代後期から明治期にかけてカワウやサギが棲みついており、樹木衰退を嫌って植栽や追い払い、捕獲などが行われていた。カワウにとって好適な生息場所である一方、人々にとって信仰の島であった竹生島は、昭和初期、戦時中、そして現在も、カワウが増えるたびに、追い払いや駆除を行ってきた。竹生島の森の位置づけは時代と共に微妙に変化しており、森林の管理やカワウに対応するのがだれなのか、どのようなやり方で対応するのかについては変化が見られる。



このように、カワウと森と人との関わりには地域毎に歴史があり、地元の人々は森や鳥と関わる技術を育んできた。そのことが、現在のカワウに対する認識や被害対策への取り組み方にも影響を及ぼしていると考えられる。すなわち、地域毎のカワウと森と人との関わりの歴史を理解することで、現在生じている森林をめぐるカワウと人との軋轢やその対応について、より一層理解を深めることができるのである。こうした理解の下で、「温故知新」をキーワードとしてカワウと森と人の未来のあり方について、それぞれの専門分野の立場から4人の著者が提言を行う。

カワウなど、ウ類の増加とそれに伴う食害や森林被害の発生は、北米やヨーロッパなどでも同時期に生じており、共通性がある。しかしながらその対応は、自然環境や歴史的文化的背景が異なるため、日本と欧米では独自のあり方が存在する。欧米の野生生物管理や資源管理の方法をそのまま導入するのではなく、日本の環境や、日本での動物と人との関わりの歴史的経緯を基本においた上で、対応の方向性を検討していくことが重要である。日本

ならではの自然と人の暮らしとの関わりについて、自然と社会の双方から考える視点を提起することで、自然と人が育む持続可能な社会の構築に貢献できるものと考えている。

研究をスタートさせて以来10年の間に、蓄積・解析した興味深いデータを、研究者のみならず、行政や一般の人々にも広く読んでいただきたいと、著者一同、考えている。

タイトル：『森を変えるカワウー森林をめぐる鳥と人の環境史』

著者(五十音順)：亀田佳代子(滋賀県立琵琶湖博物館)、藤井弘章(近畿大学)、前迫ゆり(大阪産業大学)、牧野厚史(熊本大学)

出版社：京都大学学術出版会

発刊予定：2021年5月(愛鳥週間)

その問いは誰のものか

—先住民の科学・西洋科学・科学教育—

全学教育機構 高等教育センター 准教授 山田 嘉徳

本書は『Who's asking: Native Science, Western Science, and Science Education』(Medin, D. L. & Bang, M. The MIT Press. 2014)の邦訳書です。本書の主題は、科学を理解するためのさまざまな方法が、科学そのものや科学教育の実践にとってどのような意味を持つのか、というものです。著者らは学習科学を背景に、科学社会学、科学哲学、科学教育の視点を適切に組み合わせ、科学を多様な取り組みとして再定義すれば、科学はより包括的なものになると主張しています。著者らはまた、科学がどのように機能するのか、科学の本質、科学における文化、ジェンダー、民族性の役割、バイアスと規範、そして人々が科学やその周辺の世界とどのように関わっているのかについて、有用で広範な議論を提供しています。本書で提唱される「科学教育における科学概念のコミュニティベースによる再定式化」は、より多様で公平かつ包括的な科学コミュニティと科学的実践を発展させるために不可欠であり、同時にそのような作業を通じ、多様で非支配的な背景を持つ若者の教育機会と学びの質を向上させることができるということを説得的に主張しています。

本書の学術的意義の一つは、「包括的な科学的共同体がより良い科学を生み出す」というロンギーノの主張(Longino (1990). Science as social knowledge: Values and objectivity in scientific inquiry, Princeton University Press.)を踏まえながら、科学を拡張的なやり方で再定式化することで、包括的で多様性に富んだ科学教育を生み出すことができるということを実証的に論じている点にあります。科学教育における多様性と公平性は、非支配的な背景を持つ多様な若者たちにエンパワーメントをもたらす可能性があるということのみならず、そのようなアプローチが全体の科学活動に利益をもたらすという点でも評価されます。さらに、冒頭に述べた主題に対して、著者らが専門とする学習科学領域で使用されるデザイン実験、さらには参与観察、インタビュー、フォーカスグループ等の質的調査・分析をもって、



多様なアプローチを適切に組み合わせながら緻密な実証的方法に則して迫っています。この点において、単なる科学教育論批判とは一線を画しており、科学教育分野における方法論的基盤への学術的な貢献が認められるものとなっています。

なお本書は16章で構成され、議論はきわめて広範にわたるものの、論述そのものはウィットに富んだ比喻や会話も多く含まれており、読者に語りかけるような表現が多用されている点も特徴的です。

最後に著者のメディンとバングについて簡潔に紹介します。メディンは、ノースウェスタン大学の心理学及び教育・社会政策学を兼担する教授です。専門は認知心理学で、特に自然界に関する知識や推論、これに関連する文化の役割、環境に関する意思決定について、膨大な研究業績を残しています。その功績から、米国心理学会の会長賞と同学会の特別科学貢献賞をそれぞれ受賞しています。近年では、全米研究評議会のインフォーマル科学学習委員会の委員を務めながら、STEM教育研究を中心に、

現在70歳を数えながらも現役で活躍している当該分野では第一線の研究者です。また共著者のバングは、メディンと同じく、現在、ノースウェスタン大学の教授を務め、学習科学及び心理学を専門としています(なお著書が刊行された当時は、ワシントン大学に在籍していました)。彼女の研究は、STEM教育における効果的な学習方法や学習環境の複雑さに焦点を当てながら、そこでの文化、学習、発達のダイナミクスを明らかにしようとするところに特徴があります。また、彼女自身が先住民のオジブウェ族にルーツを持ち、いかにして公正で持続可能な教育システ

ムを開発していくのかという点にも関心を寄せ、研究者としてのキャリアを過ごしてきました。このような経緯が、本書が投げかける問い、すなわち、科学をめぐる「その問いは誰のものか」という点にも象徴的に反映されています。

本書が科学と科学教育に携わる多くの方の目に触れ、豊かで深みのある科学教育・研究活動の貢献に少しでも寄与するところがあるとすればたいへん幸いです。

最後に、本書が刊行される運びとなりましたのは、ひとえに大阪産業大学学会から賜りました多大なご支援のおかげです。ここに記して感謝申し上げます。

学会報告



学会報告

Report of the Academic Society

令和2年度 写真・イラストコンテスト(写真部門) 応募作品
『心情』
寺西 優宰(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

令和2年度 年次報告

令和2年度 常任委員長 米田 昇平

今年度、大学は、新型コロナの流行という予想外の困難に直面し、入学式の中止、オンライン授業の実施等の対応に追われましたが、学会活動もまた大きく制約されることになりました。昨年に引き続き、学会の目的(「学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて研究助成等を図ること」)を実現するための活動、とくに「学生会員の学会活動への参加機会の拡大」に努めることを活動方針とする事業展開を考えていましたが、そのほとんどを中止せざるを得ませんでした。

羽田機体工場見学会、東京証券取引所と各種メディア見学会、鈴鹿安全運転研修、芸術鑑賞巡りのほか、3～4件の日帰り見学会を予定していましたが、すべて中止となりました。10月、11月頃に予定していましたが、音楽プロデューサーの向谷実氏の講演会も、中止となりました。企画事業では、オンライン審査が可能な学会コンテストのみ行うことができました。ぶんかくコンテストには長編2件、短編3件、写真・イラストコンテストには写真37件、イラスト4件の応募がそれぞれありました(見学会プランニングコンテストは応募者なし)。ぶんかくコンテストの審査を担当しましたが、今年も文芸好きの学生がいることが確認できてうれしく思いました。

助成事業としては、教員への出版助成を予定通り進めることができました。出版助成の申請は4件で、商業出版が単著1、共編著2、博士論文製本の申請が1件でした。このほか、学生の卒業論文集の発行援助金の支給を行いま

した。海外留学費の補助事業については、昨年度に渡航し、今年度に留学期間満了で帰国または新型コロナウイルスの影響で途中帰国した学生に対し、留学費の補助を行いました。例年補助を行っている国際交流課の夏期海外語学研修は新型コロナウイルスの影響で中止となりましたし、例年後援していた4月の新入生歓迎企画「入学宣誓式プロジェクト」やインターンシップ報告会も中止となりました。

今年度の学会活動は、出版助成や『大阪産業大学論集』の発行など、教員を対象とするものが目立つ結果となり、「学生会員の学会活動への参加機会の拡大」の点では、十分ではありませんでした。次期の委員会にはこの点にとくに留意していただきたいと考えています。

異例の状況のなか、今年度の学会活動を支えていただいた常任委員の先生方、とくにチーフ会メンバーの編集委員長の藤岡芳郎先生(経営学部)、企画委員長の大橋美奈子先生(工学部)、法務委員長の曾我千亜紀先生(国際学部)、財務委員長の塩見剛一先生(全学教育機構)、広報委員長の平松綾子先生(デザイン工学部)、さらに幹事の産業研究所事務室の伊藤治尚事務長、学会事務局の桐本加奈さん、松村泰子さんのご協力とご尽力に感謝いたします。

(経済学部 教授)

令和2年度 学会活動報告

【評議員会】

第1回評議員会 ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、議題を絞ってメール審議	6月16日	メール審議議題 ①令和2年度予算(案)について ②令和元年度会計報告 ③令和元年度会計監査委員報告
第2回評議員会	3月16日	議題①令和2年度活動報告 ②令和3年度チーフ会人事について ③令和3年度活動方針について ④令和3年度学会予算(案)について ⑤会則・規程集改正(案)および規程の追加(案)について ⑥その他

※学会報55において、評議員会および新旧常任委員会を3月17日に開催としましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、メール審議としました。

【常任委員会】

新旧合同常任委員会 (評議員会終了後)	3月16日	議題①新常任委員の役割分担決定 ②令和2年度委員から令和3年度委員へ引継ぎ
------------------------	-------	--

【会計監査】

5月7日 令和元年度外部会計監査

6月3日 令和元年度内部会計監査

【チーフ会】

第1回チーフ会	中止	第7回チーフ会	メール審議
第2回チーフ会	メール審議	第8回チーフ会	12月15日 オンライン開催
第3回チーフ会	中止	第9回チーフ会	1月19日 オンライン開催
第4回チーフ会	メール審議	第10回チーフ会	2月16日 オンライン開催
第5回チーフ会	メール審議	第11回チーフ会	3月 2日 オンライン開催
第6回チーフ会	中止		

【編集委員会】

第1回編集委員会	中止	第6回編集委員会	中止
第2回編集委員会	中止	第7回編集委員会	11月17日 オンライン開催
第3回編集委員会	メール審議	第8回編集委員会	1月19日 オンライン開催
第4回編集委員会	休会	第9回編集委員会	2月16日 オンライン開催
第5回編集委員会	メール審議		

【令和2年度発行論集・学会報】

種別	分野	巻号数	備考
論集	経営論集	21-2・3合併号、22-1・2合併号	年3回 原稿募集
	経済論集	21-2・3合併号、22-1、22-2	年3回 原稿募集
	人文・社会科学編	39、40、41	年3回 原稿募集
	自然科学編	131	年1回 原稿募集
	人間環境論集	20	年1回 原稿募集
学会報		56	年1回 発行

【企画委員会】

第1回企画委員会	中止	第6回企画委員会	メール審議
第2回企画委員会	メール審議	第7回企画委員会	11月17日
第3回企画委員会	メール審議	第8回企画委員会	中止
第4回企画委員会	中止	第9回企画委員会	メール審議
第5回企画委員会	中止		

【企画事業】

◆学会コンテスト

第21回 ぶんかくコンテスト

第5回 写真・イラストコンテスト

第4回 見学会プランニングコンテスト

※見学会および講演会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止

<後援>

◆活動への助成

3月5日～ デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 卒業研究優秀作品展(Web動画公開)への助成

◆令和元年度 春期英語中期留学および海外留学をした学生への助成

【広報】

適時 webサイト更新

論集データベースと機関リポジトリの統合

【法務】

規程の追加、改正の検討

【財務】

毎月の学会会計処理(事務局)後に伝票の確認および預金通帳残高との照合(本会計)

【大阪産業大学学会会員数一覧】

(人)

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
学生会員(院生)	108	114	121	106
〃 (大学生)	7,771	7,774	7,766	7,889
正会員(専任教員)	218	218	209	207
特別会員	2	4	1	1
準会員(非常勤・卒業生)	21	21	22	26
名誉会員	11	15	16	14
賛助会員	2	1	2	3
計	8,133	8,147	8,137	8,246

12月末現在の会員数

令和元年度 学会会計報告 (平成31年4月1日～令和2年3月31日)

令和元年度 財務委員長 仲田 秀臣

大阪産業大学学会の令和元年度の収支決算を以下の通り報告いたします。

収入の部では、学会費などの収入小計は昨年度に比べ406万円の増収となりました。これは平成29年度から学会費の徴収方法を4年分の一括徴収から1年分(前期・後期)ごとの徴収に変更しましたが、変更後3年目の今年度は、昨年度に比べ、学会費の収入が1学年分増加したためです。

支出の部では、支出小計が昨年度に比べて614万円の減少となりました。これは、出版助成の申請がなかったことや、後期の見学会を当初4つ開催予定のところ、学年歴

の関係で3つとなったことでイベント費が減少となったことなどが要因となります。このほか、学生への海外留学補助ができるよう規程が改正されたため、海外留学補助金費の増加、学会事務員2名を直接雇用としたため、法定福利費の科目を追加しました。

令和元年度も、各種見学会やコンテストなどのイベント、出版助成などの各種助成を積極的に行った結果、次年度繰越金は1,283万円減少しました。

今後も、学会の諸活動をさらに活性化することにより、会員への会費還元を務めていきます。

【収入の部】

(単位：円)

科 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減
学会費(学生)	15,120,000	13,929,600	△1,190,400
〃 (正・準)	1,114,000	1,155,000	41,000
受取利息	5,000	2,228	△2,772
雑収入	400,000	365,500	△34,500
(小 計)	16,639,000	15,452,328	△1,186,672
前年度繰越金	35,072,482	35,072,482	0
合 計	51,711,482	50,524,810	△1,186,672

【支出の部】

(単位：円)

科 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減
論集発行費	5,000,000	3,740,829	△1,259,171
学会報発行費	1,700,000	1,369,686	△330,314
講演会費	800,000	934,020	134,020
イベント費	5,600,000	4,695,709	△904,291
諸活動費	1,000,000	731,265	△268,735
海外留学補助金	1,200,000	1,611,100	411,100
出版助成	7,000,000	2,192,441	△4,807,559
ウェブサイト保守点検費	1,000,000	947,298	△52,702
人件費	5,900,000	5,887,979	△12,021
渉外慶弔費	200,000	90,000	△110,000
印刷製本費	250,000	154,237	△95,763
通信輸送費	400,000	129,226	△270,774
学生表彰費	1,800,000	1,400,000	△400,000
法定福利費	60,000	51,840	△8,160
支払手数料	2,834,040	2,714,040	△120,000
その他(会議費、消耗品費等)	200,000	129,914	△70,086
(小 計)	34,944,040	26,779,584	△8,164,456
60周年記念事業繰入金	1,500,000	1,500,000	0
次年度繰越金	15,267,442	22,245,226	6,977,784
合 計	51,711,482	50,524,810	△1,186,672

※令和2年度より、『60周年記念事業費』は『周年記念事業費積立』に名称変更



▲令和2年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『首箇和癒』
大上 鉦太(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

編集後記

学会報56のテーマは「新しい生活様式と大学での学び」です。令和2年4月7日、政府は日本で歴史上初となる緊急事態宣言を発令しました。これにより都市はロックダウンされ企業活動や生活に多大な影響を与えました。その後、現在まで新型コロナウイルスの収束が見通せず私たちの生活様式に大きな影響を与え続けています。企業活動ではデジタルトランスフォーメーション(DX)が急速に注目されています。非対面式のビジネス活動が脚光を浴びてオンラインとオフラインをシームレスにつないだ新たなシステムが進展しています。働き方では在宅勤務やリモートワークが推奨され、「巣ごもり消費」が伸びて自宅を中心に生活する人が急拡大しました。

新型コロナウイルスは過度な自然破壊が原因ではないかとされています(日本経済新聞2020年6月26日17面)。このような急激な変化に対して生活者の価値観は自然環境保護や社会課題解決重視へとシフトしています。最近SDGsとESGについて多くの情報に接するようになりました。SDGsとは「Sustainable Development Goals」の略で、2015年に国連が定めた2030年までに世界が目指すべき持続可能で多様性と包摂性のある社会を実現するための目標です。貧困や飢餓、保険、教育、ジェンダー、水・衛生、エネルギー、不平等、気候変動、陸上資源などの17の目標が定められ、さらに詳細な169のターゲットも示されています。ESGは「社会的責任を果たす企業に投資をすること」を意味します。ESGは投資家側の視点でEnvironment(環境)、Social(社会)、Governance(ガバナンス)を重視することを示しています。したがって、企業が長期的に投資家の信頼を得ながら成長するためにはESGへの取り組みが不可欠だとの見方が広まっています。

現在のような先が読めなくて環境が激変する時代ではどのような行動指針が必要なのでしょうか。ピーター・ドラッカー氏は「文化は戦略に勝る(Culture eats strategy for breakfast)」と述べています。この言葉は、組織が環境の変化に対して迅速かつ的確に適応していくためには、その組織の根底に良き文化が必要であるという意味だそうです。

学会報56は新型コロナウイルスの感染拡大に伴って各学部、学科の教員が懸命に対応された「新しい生活様式と大学での学び」について特集しています。キャンパス・リノベーションではハイブリッド授業関連の写真をピックアップして掲載しています。このほかに、コンテスト報告、留学記、学術研究書出版助成本の概要などを掲載しています。

最後になりますが、本号の編集・発刊にご協力いただいた編集委員の方々、またとくに精力的に編集の任にあたっていただきました学会事務局に深く感謝申し上げます。

(令和2年度編集委員長：藤岡 芳郎)

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced or transmitted, in any form or by any means, without prior permission in writing from the publisher.

大阪産業大学学会報 第56号 非売品

発行日 2021(令和3)年3月5日
発行 大阪産業大学学会
〒574-0013
大阪府大東市中垣内3丁目1-1
TEL (072) 875-3001 (大代)
FAX (072) 875-6551
印刷 友野印刷株式会社
〒700-0035
岡山市北区高柳西町1-23
TEL (086) 255-1101
FAX (086) 253-2965

Academic Society
of Osaka Sangyo University

